

作業室用

茨城県教育財団文化財調査報告第206集

北田遺跡

主要地方道石岡下館線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第206集

北田遺跡

主要地方道石岡下館線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、21世紀の社会を展望し、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県全域にわたる調和のとれた発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めています。主要地方道石岡下館線道路改良事業も、こうした交通体系の整備と県土の一体的な振興を図るために、計画されたもので、その予定地内に、北田遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、平成13年11月から平成14年2月まで北田遺跡の発掘調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構と遺物が確認され、郷土の歴史を解明する上で多大な成果を上げることができました。

本書は、北田遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土への理解を深めると共に、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大なる御協力を賜りましたことに対し、深く感謝申し上げます。

また、茨城県教育委員会、真壁町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 斎藤 佳郎

例　　言

- 1 本書は、茨城県下館土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成13年度に発掘調査を実施した、茨城県真壁郡真壁町大字山尾字北田834番地ほかに所在する北田遺跡^{北田}の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間と整理期間は、以下のとおりである。
調　査　平成13年11月1日～平成14年2月28日
整　理　平成14年12月1日～平成15年3月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第二課長鈴木美治の指揮のもと、調査第2班長矢ノ倉正男、主任調査員黒澤秀雄、調査員梅澤貴司が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一の指揮のもと、主任調査員黒澤秀雄が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、流路跡出土の木製品及び住居跡出土の柱材の樹種同定については、独立行政法人森林総合研究所の能城修一氏に御教示いただいた。流路跡出土の種子のモモとスモモについては、農林水産省果樹試験場核果類育種研究室の山口正己氏、オニグルミについてはミュージアムパーク茨城県自然博物館の小幡和男氏に御教示いただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際し、御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第K系座標を原点とし、X軸 = +29,880, Y軸 = +24,960の交点を基準点（A1a1）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。
調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。
- 2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。
- 3 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構	住居跡 - S I	土坑 - S K	路跡 - R		
遺物	土器 - P	土製品 - D P	石器・石製品 - Q	木器・木製品 - W	拓本記録土器 - T P
土層	擾乱 - K				
- 4 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

炉 - ■■■	粘土 - ■■■	焼土 - ■■■	黒色処理 - ■■■	赤彩・織維土器 - ■■■
●土器・拓本記録土器	○土製品	□石器・石製品	★木器・木製品	- - - 硬化面
- 5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 6 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。
- 7 遺構・遺物実測図中の掲載方法については、次のとおりである。
 - (1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
 - (2) 遺物は原則3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、その場合は個々に縮尺スケールで表示した。
- 8 「主軸」は、住居跡については炉や竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし、その他については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は、主軸・長軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N-10°-E）
- 9 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
 - (1) 土器の計測値の単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。
 - (2) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
 - (3) 遺物番号については、土器・拓本のみ掲載の土器片、土製品、石器・石製品、金属製品、木製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。
- 10 遺構一覧表における計測値は、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

抄 録

ふりがな	きただいせき							
書名	北田遺跡							
調査名	主要地方道石岡下館線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告							
シリーズ番号	第206集							
著者名	黒澤秀雄							
編集機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2003(平成15)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地 市町村番号							
北田遺跡	茨城県真壁郡真壁町 大字山尾字北田834 番地ほか	08503 - 045	36度 16分 07秒 (36度 16分 18秒)	140度 06分 43秒 (140度 16分 31秒)	44 ~ 46m	20011101 ~ 20020228	6,155.80m ²	主要地方道 石岡下館線 道路改良事業 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
北田遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡 6軒 土坑 45基 配石遺構 2基 遺物包含層1か所	縄文土器(深鉢・器台形土器), 石器・石製品(石鎚・磨製石斧・凹石・石錐)	縄文時代から平安時代 にかけての集落跡である。今回の調査区からは、平安時代の3条の流路跡が確認されている。			
		古墳	竪穴住居跡 13軒 土坑 2基	土師器(壺・高壺・甕・瓶)				
		奈良・平安	竪穴住居跡 2軒 流路跡 3条	土師器(壺・甕), 須恵器(壺・盤・蓋・円面鏡), 木製品				
		不明	土坑 28基					

目 次

序

例言

凡例

抄録

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 繩文時代の遺構と遺物	8
(1) 壓穴住居跡	8
(2) 土坑	25
(3) 配石遺構	32
(4) 遺物包含層	33
2 古墳時代の遺構と遺物	36
(1) 壓穴住居跡	36
(2) 土坑	67
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	68
(1) 壓穴住居跡	68
(2) 流路跡	71
4 その他の遺構と遺物	83
(1) 土坑	83
(2) 遺構外出土遺物	85
第4節 まとめ	89
付章 北田遺跡の自然科学分析	
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、真壁郡真壁町山尾地区において、主要地方道石岡下館線の改良事業を進めている。

平成12年6月1日、茨城県下館土木事務所長から茨城県教育委員会宛に、主要地方道石岡下館線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。

これに対して茨城県教育委員会は、平成12年10月20日に現地踏査を行い、平成12年12月4・5日に試掘調査を実施した。そして、平成13年1月17日、茨城県教育委員会教育長から茨城県下館土木事務所長宛に、事業地内に北田遺跡が所在する旨を回答した。

平成13年3月23日、茨城県下館土木事務所長から茨城県教育委員会教育長宛に、事業地内における埋蔵文化財（北田遺跡）の取り扱いについて協議書が提出された。

その結果、現状保存が困難であることから、平成13年3月26日、茨城県教育委員会教育長から茨城県下館土木事務所長宛に、事業地内における北田遺跡について、記録保存のための発掘調査を実施する旨回答し、併せて、調査機関として財団法人茨城県教育財團を紹介した。

茨城県教育財團は、茨城県下館土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成13年11月1日から平成14年2月28日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

北田遺跡の調査は、平成13年11月1日から平成14年2月28日までの4か月間実施した。以下、調査の経過について、その概要を表で記載する。

項目 期間	11月	12月	1月	2月
調査準備 表土除去 遺構確認		■		
遺構調査		■	■	
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■	■	
補足調査 及び 後片付け				■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

北田遺跡は、茨城県真壁郡真壁町大字山尾字北田834番地ほかに位置している。

真壁町の地形は、茨城県と福島県境にある八溝山から南に伸びる八溝山地の南端部に位置する筑波山を中心とする筑波山塊に接し、東側を南流して霞ヶ浦に流入する桜川と、西側を緩流して利根川に合流する小貝川の低地及びそれらに挟まれた、桜川低地と真壁台地からなる。桜川には、観音川や山口川をはじめとする多くの支流が注いでいる。筑波山塊西縁にも、断片的に段丘面が分布しているが、山地からの土石流や扇状地性堆積物の流入・堆積によって、その分布は不明瞭となり、また、露頭も不明瞭である。山麓級斜面の構成層は、やや厚く堆積した花崗岩の巨礫層である。

北田遺跡は、筑波山塊と真壁台地に挟まれた桜川左岸の標高44~46mの沖積低地に立地している。当遺跡の調査前の現況は、水田及び畑地である。

第2節 歴史的環境

北田遺跡が立地する桜川流域には数多くの遺跡が所在し、特に古墳及び古墳群が数多い。

旧石器時代の遺跡は、あさひじきとき南椎尾小山遺跡¹⁾(41)から貢岩製のナイフ形石器・剥片が、隣接するあさひじきおほほせんまえ南椎尾八幡前遺跡²⁾(40)からチャート製の尖頭器・貢岩製の石核等が出土している。

縄文時代の遺跡は、早期の御殿立場遺跡³⁾(38)がある。前期から後期にかけての遺跡は、台地上あるいは低地に立地している。吾妻塚遺跡からは前期の浮島式土器が、日月遺跡(22)・精戸遺跡(23)・大夫台遺跡(24)・高内遺跡⁴⁾(25)からは中期の加曾利E式土器が、中坪遺跡(37)からは後期の堀之内式土器が、高内遺跡からはわずかに晚期の大洞式土器が出土している。

弥生時代の遺跡では、熊宮遺跡⁵⁾(21)・中坪遺跡・日月遺跡・精戸遺跡・大夫台遺跡・高内遺跡等が確認されている。熊の宮遺跡では後期の住居跡が2軒、南椎尾小山遺跡では後期の住居跡が2軒調査されている。

古墳時代の遺跡は、当遺跡の中心となる時期であるが、町内では古墳及び古墳群が多く、集落の調査事例は少ない。古墳では、加波山西麓には、若林古墳群(3)・車塚古墳(4)・十石塚古墳(5)・鶴坊塚古墳(6)・白井中坪古墳群(7)・端上古墳群(8)がある。筑波山麓には、おふじ櫛現古墳(12)・吾妻塚古墳(13)・平塚古墳(14)・北椎尾天神塚古墳⁶⁾(15)・仙原塚古墳(16)・北原古墳(17)・大柳古墳(18)・松石古墳群(19)・羽鳥天神塚古墳(20)・元寺蒙古墳群(35)・南椎尾小山遺跡がある。北椎尾天神塚古墳は中期(5世紀中葉)の円墳で、二つの粘土梯の埋葬施設から鐵鏟・鐵鉢・大刀・鉄劍・鐵矛や県内初例で、関東地方では3例目といわれる三角板皮織衝角付甲等が出土している。南椎尾小山遺跡からは、後期の円墳が1基確認されている。観音川流域には原万円鏡塚⁷⁾(2)・八幡山古墳(9)・鹿島宮古墳(10)・三の塚古墳(11)がある。八幡山古墳からは銅鏡が出土している。このうち前方後圓墳はおふじ櫛現古墳・仙原塚古墳・北原古墳の3基だけである。集落は、熊の宮遺跡では中期の住居跡が4軒、南椎尾小山遺跡では前期の住居跡が1軒、南椎尾八幡前遺跡では中期から後期にかけての住居跡が26軒調査されている。南椎尾八幡前遺跡からは6世紀前半に位置付けられる置き甕が出土している。

奈良・平安時代は当遺跡の流跡の時期であり、町内では寺院跡や館跡が多い。特に寺院跡は筑波山の山岳信仰との関わりが考えられ、修驗道の拠点としての建立と思われる。寺院跡では、山尾庵現山庵寺⁽³⁹⁾・下谷貝庵寺⁽⁴⁰⁾・谷貝庵寺⁽²⁷⁾・源法院庵寺^(源法寺庵寺跡)⁽²⁶⁾がある。山尾庵現山庵寺では、1980年に地表面のみの確認調査が実施されており、中門・金堂・講堂・塔といった主要伽藍の礎石が確認されている。下谷貝庵寺から新治庵寺と同様の軒丸瓦が出土している。源法院庵寺からは、熨斗瓦が多く出土している。城館跡では、平良兼の館とされる平良兼館跡⁽³⁰⁾がある。集落は、熊の宮遺跡では平安時代初頭の住居跡が1軒、南椎尾小山遺跡では平安時代の住居跡が4軒、南椎尾八幡前遺跡では平安時代の住居跡が3軒調査されている。

鎌倉・室町時代には、真壁城⁽³¹⁾を中心とした城館がつくられている。真壁城跡としては、椎尾城跡⁽³¹⁾・亀熊城跡⁽³²⁾・谷貝城跡⁽³³⁾・谷貝峯城跡⁽³⁴⁾等がある。真壁城については、1174（承安3）年に多気重幹の四男真壁六郎長幹が入部したとの説があり、それ以降1602（慶長7）年に十七代房幹が出羽角館に移されるまで真壁氏の居城であった。

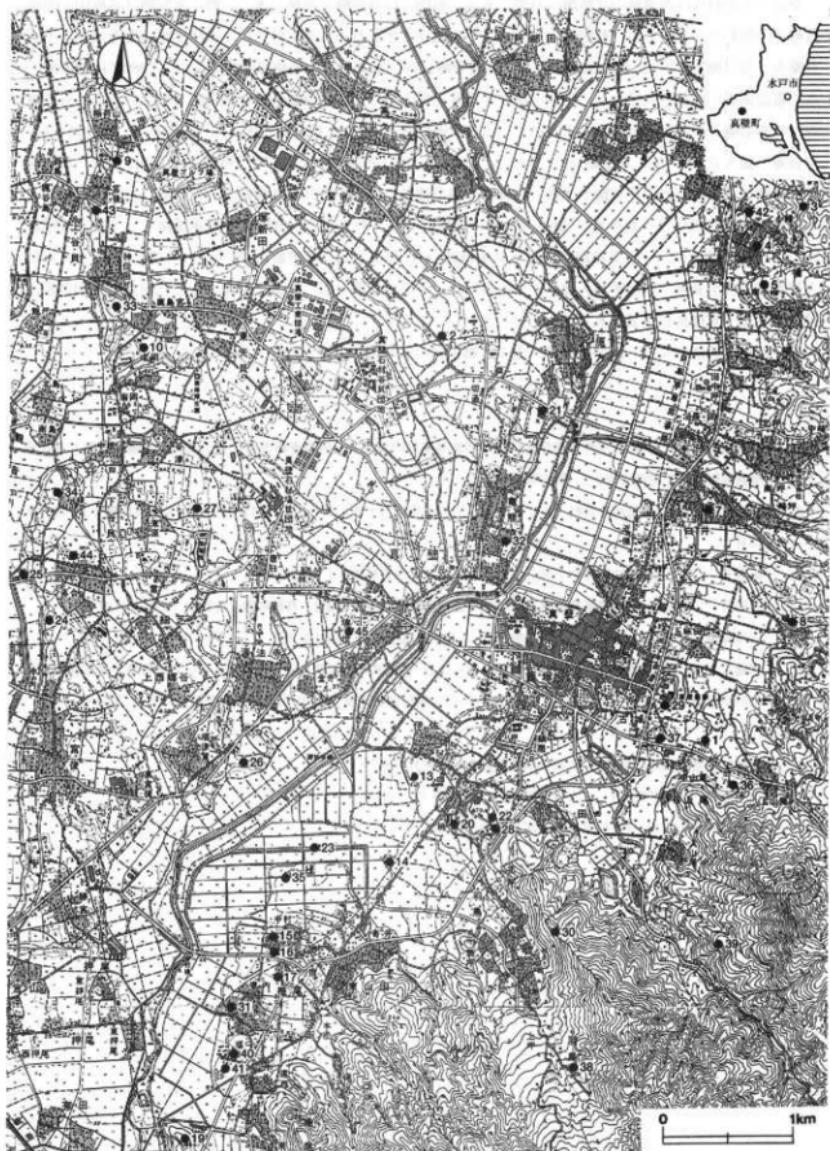
* 遺跡名の次の〈 〉内の数字は、表1・第1図の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 吹野富美夫 「(仮称) 真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書—小山遺跡・八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第99集 1995年3月
- 2) 長岡芳 「御絶立場遺跡の資料－主として繩文早期中後葉の土器について」『真壁町史料 考古資料編I』 1980年10月
- 3) 長岡芳 「高内遺跡繩文後期の土器」『真壁町史料 考古資料編II』 1982年12月
- 4) 長岡芳・川崎純徳 『茨城県真壁郡真壁町熊の宮遺跡発掘調査報告書』 真壁町教育委員会 1984年3月
- 5) 川崎純徳 『北椎尾天神塚古墳とその時代』 ふるさと真壁文庫 2001年3月
- 6) 伊禮正雄他 『真壁城跡－中世真壁の生活を探る－』 真壁城跡発掘調査会 1983年3月 真壁町歴史民俗資料館第78回企画展 『真壁城－発掘調査7年のあゆみ－』 第81回企画展 『歴国の終焉と真壁氏』 2001・2002年

参考文献

- 1) 茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 真壁』 1983年1月
- 2) 川崎純徳 『真壁町史料 考古資料編IV』 2000年3月
- 3) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 2001年3月

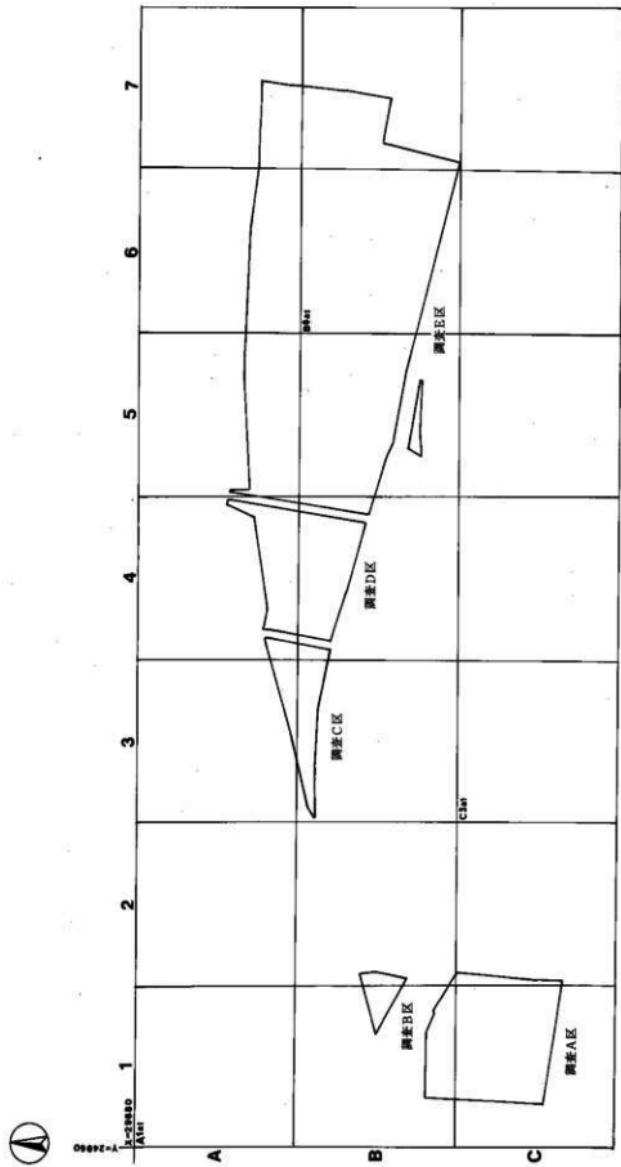


第1図 北田遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 2万5千分の1『真壁』）

表1 北田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
1	北田遺跡(当遺跡)			○	○	○		24	太夫台遺跡	○					
2	原方円鏡古墳			○				25	高内遺跡	○					
3	若林古墳群			○				26	源法寺廃寺跡			○			
4	車塚古墳			○				27	谷貝廃寺跡			○			
5	十石塚古墳			○				28	日月廃寺跡			○			
6	鶴坊塚古墳			○				29	真壁城跡				○		
7	白井中坪古墳群			○				30	平良兼館跡			○			
8	端上古墳群			○				31	椎尾城跡			○			
9	八幡山古墳			○				32	亀熊城跡			○			
10	鹿島宮古墳			○				33	谷貝城跡			○			
11	三の塚古墳			○				34	谷貝峯城跡			○			
12	おふじ椎現古墳			○				35	元寺家古墳群			○			
13	吾妻塚古墳			○				36	真壁氏墓地			○			
14	平塚古墳			○				37	中坪遺跡	○					
15	北椎尾天神塚古墳			○				38	御祓立場遺跡	○					
16	仙原塚古墳			○				39	山尾椎現山廃寺跡			○			
17	北原古墳			○				40	南椎尾八幡前遺跡	○	○	○	○	○	○
18	大柳古墳			○				41	南椎尾小山遺跡	○	○	○	○	○	○
19	松石古墳群			○				42	弁天様古墳			○			
20	羽鳥天神塚古墳			○				43	鹿島神社古墳群			○			
21	熊の宮遺跡	○	○					44	市村家				○		
22	日月遺跡	○						45	塙世城跡					○	
23	轎戸遺跡	○													

0 40m



第2図 北田邊跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

北田遺跡は、八郷町との境に位置するきのこ山西麓の緩斜面から桜川にかけての低地に立地する縄文時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。調査前の現況は水田と畑地で、調査面積は6,155.80m²である。

今回の調査によって、縄文時代の竪穴住居跡6軒・土坑45基・配石構造2基・遺物包含層1か所、古墳時代の竪穴住居13軒・土坑2基、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、平安時代の細い川筋と思われる流路跡3条、時期不明の土坑28基が確認されている。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で60箱分が出土した。出土した主な遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、石器・石製品(石錐・砥石・凹石・磨石・打製石斧・磨製石斧)、土製品(土器片円盤・支脚)、木製品、古錢、種子等である。

第2節 基本層序

調査D区のB3d6区にテストピットを設定し、約2m掘り下げて、土層の堆積状況の観察を行った(第3図)。遺構確認面及び土取り部断面を観察するとE区の標高46.2m付近に鹿沼バシス(KP)が堆積しており、それ以下の標高のところでは流失している。1~11層は水田であった影響を受けている層と考えられる。12~16層がハードローム層である。

1層は、砂を少量、礫を微量含んだ褐灰色の耕作土である。

2層は、砂と礫を中量、炭化物を微量含んだ灰褐色土である。

3層は、砂を少量、礫を微量含んだ黒褐色土である。

4層は、粘土を中量、砂を少量、礫を微量含んだオリーブ黒色土である。

5層は、砂と粘土を中量含んだ黒褐色土である。

6層は、粘土を中量、砂を少量、炭化物を微量含んだ黒褐色土である。

7層は、砂を多量、礫を中量含んだ灰白色である。

8層は、粘土を中量、砂を少量含んだ褐灰色土である。

9層は、炭化物と礫を微量含んだ黒褐色土である。

10層は、炭化物を少量含んだ黒褐色土である。

11層は、ローム粒子を少量含んだ黒色土である。

12層は、暗褐色ロームで、ややしまりがある。

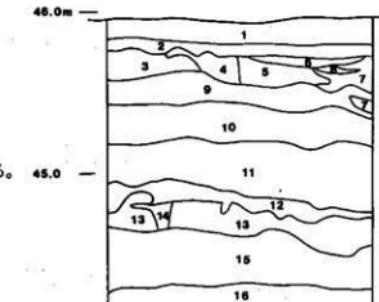
13層は、明黄褐色ロームブロックで、ややしまりがある。

14層は、ぶい黄褐色ロームで、ややしまりがある。

15層は、黄褐色ロームで、粘性もしまりも弱い。

16層は、明黄褐色ロームで、しまりがある。

遺構は、第11層の上面で確認した。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認された繩文時代の遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑43基、配石遺構2基、遺物包含層1か所である。これらの遺構は、調査区A・B・D区で確認されている。それぞれの遺構の特徴と、出土した遺物について記述していく。土坑については、特徴のあるものや遺存状態の良好なものについて解説し、それ以外は実測図と一覧表に示すこととする。

(1) 竪穴住居跡

第6号住居跡(第4~8図)

位置 調査D区の北部、A4i8区。標高29.5mの平坦部に位置している。

重複関係 北部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。南部の西側は第61号土坑を掘り込み、南部の中央部は第62号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長軸7.0m、短軸6.20mの隅丸長方形である。南側に拡張したような1.4mほどの広がりがみられる。壁は高さ8~42cmで、外傾して立ち上がっていている。主軸方向はN-25°-Wである。

床 やや凹凸がみられる。硬化面は確認できなかった。壁溝は全周している。上幅12~22cm、下幅4~12cm、深さ4~10cmで、断面形はU字形である。

炉 確認できなかった。

ピット 浅い底みを除き18か所。P1~4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P6・9・15・16は配置から補助柱穴と考えられる。そのほかのピットの性格は不明である。深さはP1が48cm、P2が61cm、P3が46cm、P4が70cm、P6・9・15・16が30~65cm、P5・7・8・10~14・17・18が14~46cmである。

覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

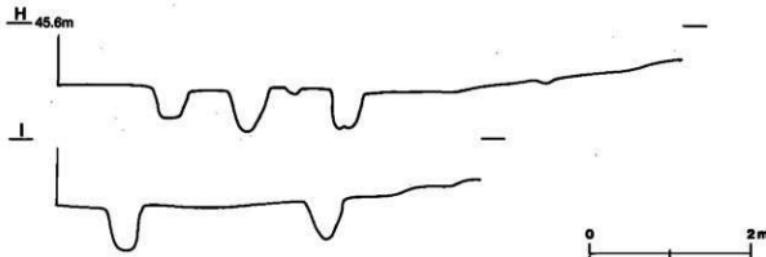
土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量
3 黒褐色	ロームブロック中量、炭化物微量

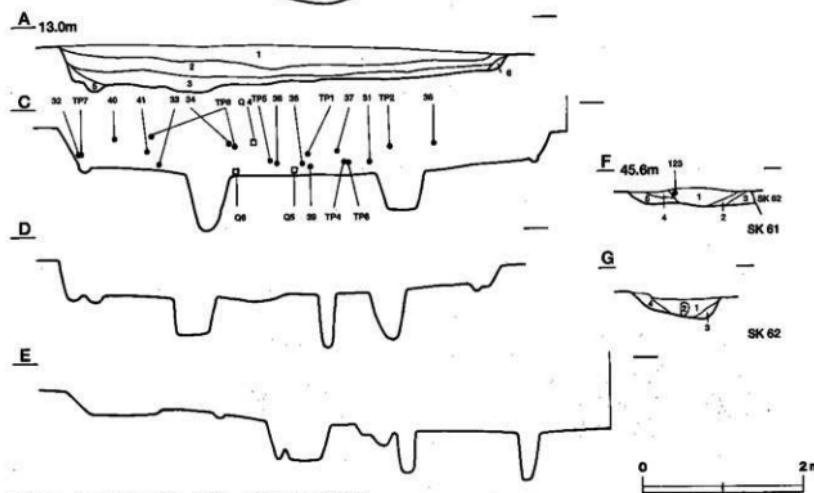
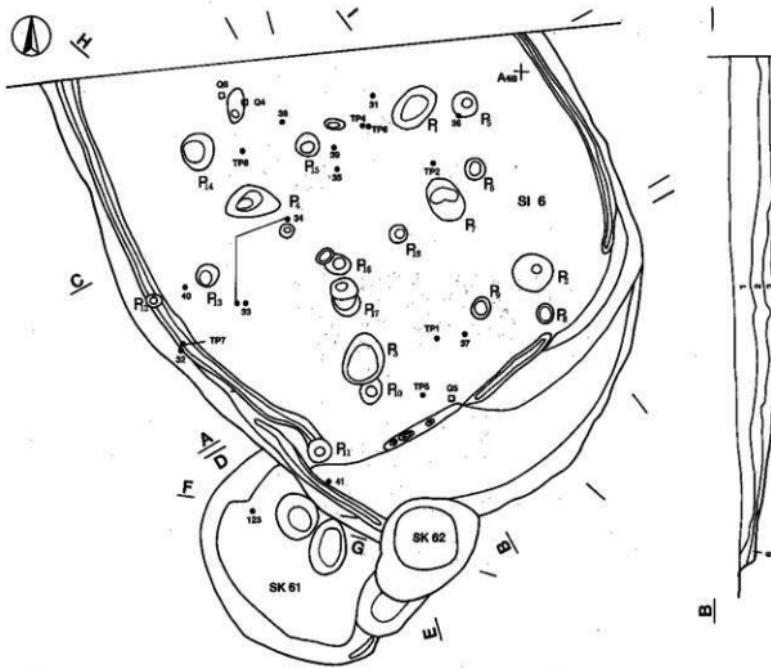
4 黒褐色	ロームブロック少量
5 深褐色	ロームブロック中量
6 黒褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 繩文土器片754点、土器片円板1点、磨石3点、礫10点のほか、擾乱等により混入したとみられる土師器片24点が出土している。31繩文土器深鉢は中央部の覆土下層から、40の繩文土器器台形土器は南西部の覆土中層から出土している。

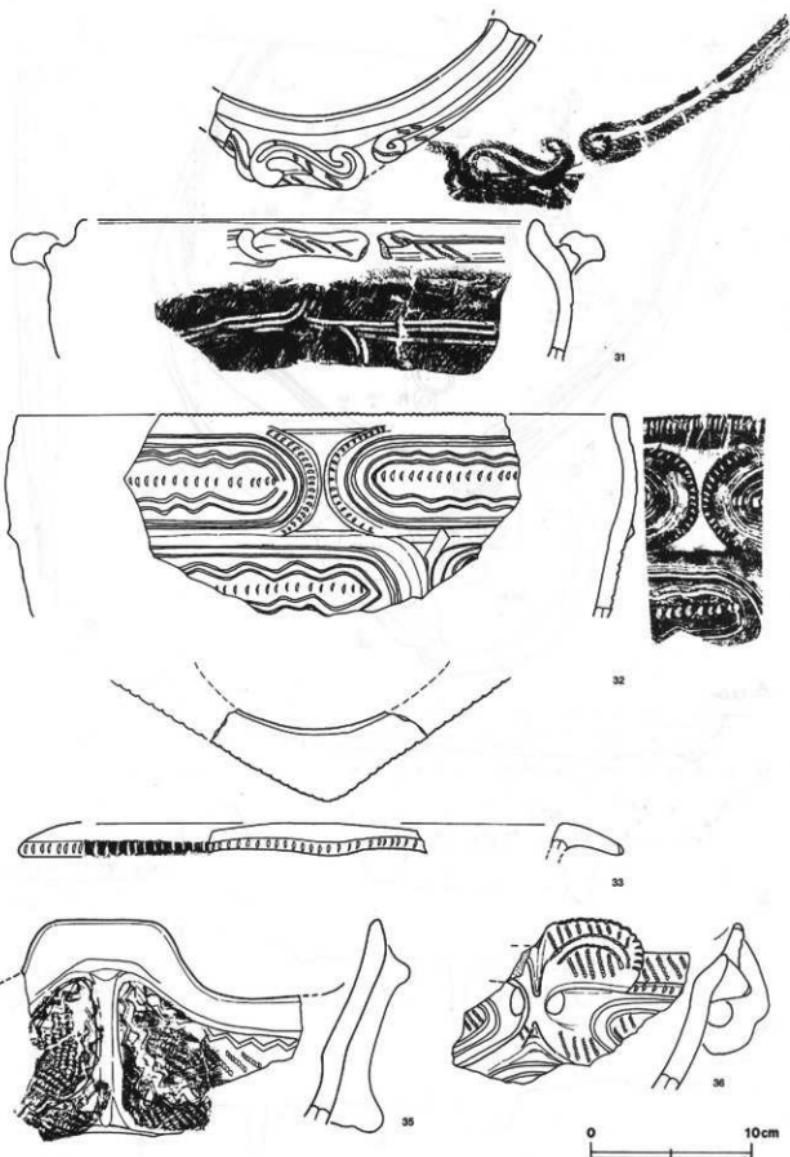
所見 時期は、出土土器等から繩文時代中期中葉と考えられる。



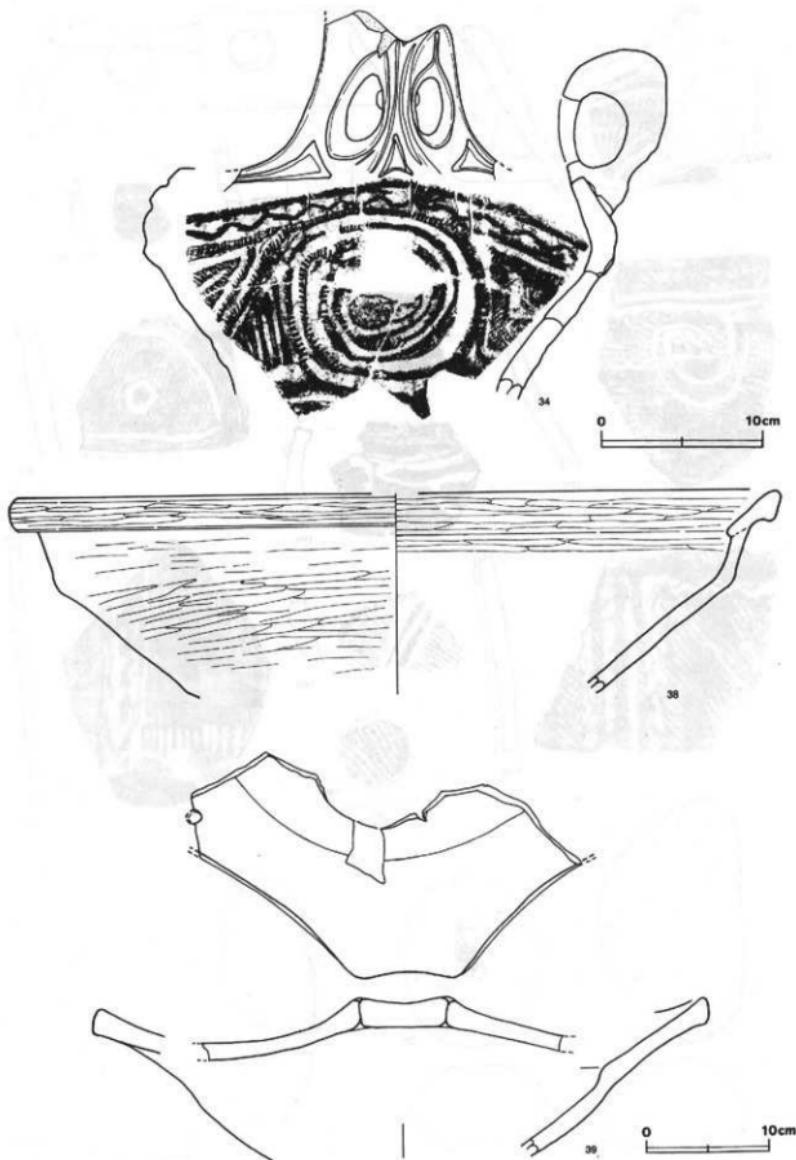
第4図 第6号住居跡実測図



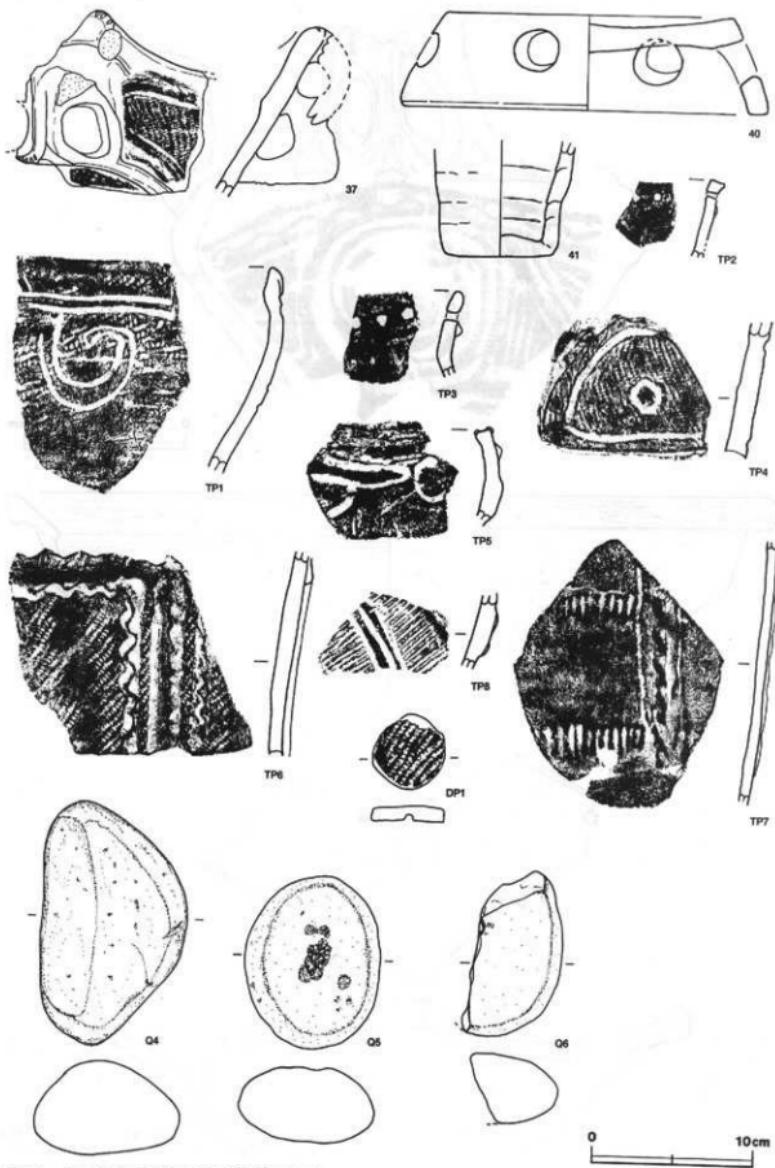
第5図 第6号住居跡、第61・62号土坑実測図



第6図 第6号住居跡出土遺物実測図（1）



第7図 第6号住居跡出土遺物実測図（2）



第8図 第6号住居跡出土遺物実測図(3)

第6号住居跡出土遺物観察表（第6～8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
31	縄文土器	深鉢	[28.6]	(8.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部のS字状の溝上に单脚R Lの縄文 腹部は單脚R Lの縄文を北端で区画	中央部 覆土下層	15%
32	縄文土器	深鉢	[37.8]	(12.5)	-	石英多・長石多・ 雲母多	褐	普通	口縁部に牛字ミ目 口縁部に沈線が入り、北 端部に爪形文	中央部 覆土下層	10%
33	縄文土器	浅鉢	[30.0]	(2.0)	-	長石・金雲母	にぶい褐色	普通	口縁部の舌状の突起に牛字ミ目	南西部床面	5%
34	縄文土器	深鉢	[25.0]	(23.8)	-	石英・長石・ 雲母多	にぶい赤褐色	普通	口縁部に横状の溝上に单脚R Lの縄文 若く沿って沈線で区画 内部に金雲母で埋	中央部 覆土中層	20%
35	縄文土器	深鉢	-	(13.0)	-	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	後部に沿って沈線が入り、北端部に单脚R L の縄文	中央部 覆土下層	10%
36	縄文土器	深鉢	-	(16.3)	-	石英・長石・ 金雲母多	にぶい褐色	普通	口縁部に横状の溝上に单脚R Lの縄文 若く沿って沈線で区画 爪形文	北東部 覆土中層	10%
37	縄文土器	深鉢	-	(10.9)	-	石英・長石・ 雲母多	にぶい褐色	普通	口縁部に横状の溝上に单脚R Lの縄文 若く沿って沈線で区画 爪形文	中央部 覆土下層	10%
38	縄文土器	浅鉢	[62.8]	(16.4)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	口縁部・内面部及び側部外縁へ黒さ 無文	北西部 覆土下層	30%
39	縄文土器	深鉢	[49.6]	(12.8)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部に横状の溝上に单脚R Lの縄文 若く沿って沈線で区画 爪形文	中央部 覆土下層	20%
40	縄文土器	器台	17.8	5.8	22.5	石英・長石・雲母・ 小石	灰黒	普通	口縁部に横状の溝上に单脚R Lの縄文 若く沿って沈線で区画 爪形文	南東部 覆土中層	90% PL12
41	縄文土器	手鏡	-	(7.1)	2.0	石英多・長石多・ 雲母	にぶい褐色	普通	内面部頗る積み重ね	南東部 覆土下層	80% PL12
TP1	縄文土器	深鉢	-	(12.7)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	单脚R Lの縄文を地文に 沈線	東南部 覆土中層	
TP2	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	口縁部に孔を穿つ 離帶を施す	中央部 覆土中層	
TP3	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部に孔を穿つ 離帶を施す	覆土中	
TP4	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	单脚R Lの縄文を地文に 沈線	北東部 覆土下層	
TP5	縄文土器	鉢	-	(6.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	離帯と沈線を施す	南東部 覆土下層	
TP6	縄文土器	鉢	-	(12.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	单脚R Lの縄文を地文に 離帯を吊り付けた後 常に沿って沈線	北東部 覆土中層	
TP7	縄文土器	鉢	-	(15.2)	-	石英・長石・雲母	明褐	普通	单脚R Lの縄文を地文に 区画する離帯を施す	中央部 覆土下層	
TP8	縄文土器	深鉢	-	(4.7)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	地面上及び腰帯に沿って沈線 区画内に条縞 文	北西部 覆土中層	

第8号住居跡（第9・10図）

位置 調査A区の南西部、C1f0区。標高44.2mの平坦部に位置している。

規模と形状 壁は削平され、南部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。長径5.95m、確認できた短径4.60mの円形または梢円形と考えられる。主軸方向はN-8°-Wと推定される。

床 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

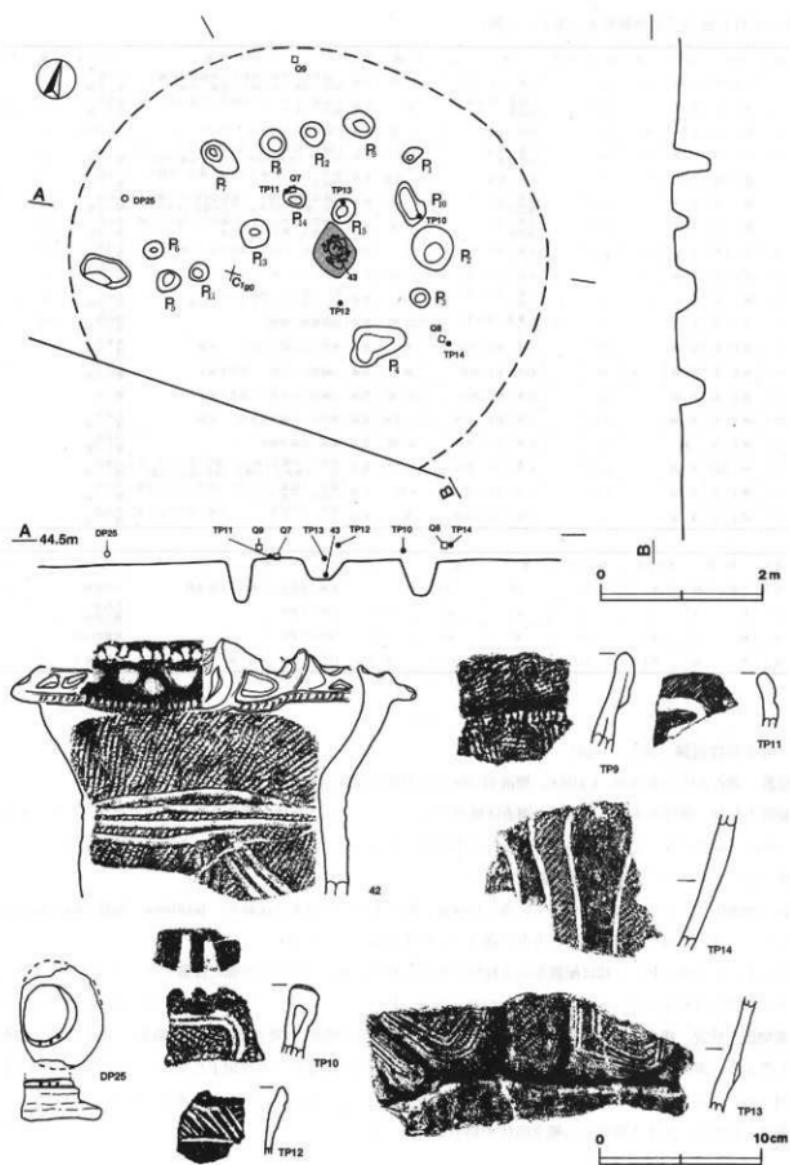
炉 埋甕炉で、中央部に設けられている。口縁部と胴下半部を欠損する深鉢を、長径69cm、短径54cmの梢円形をした、深さ30cmの円筒形の掘り方内に据えて、炉体土器としている。

ピット 15か所。P1～12は配置から主柱穴と考えられる。P13～15は中央部に位置しているが性格は不明である。深さはP1・2・5・6・9・13が22～30cm、P3・4・7・8・10～12・14・15が14～20cmである。

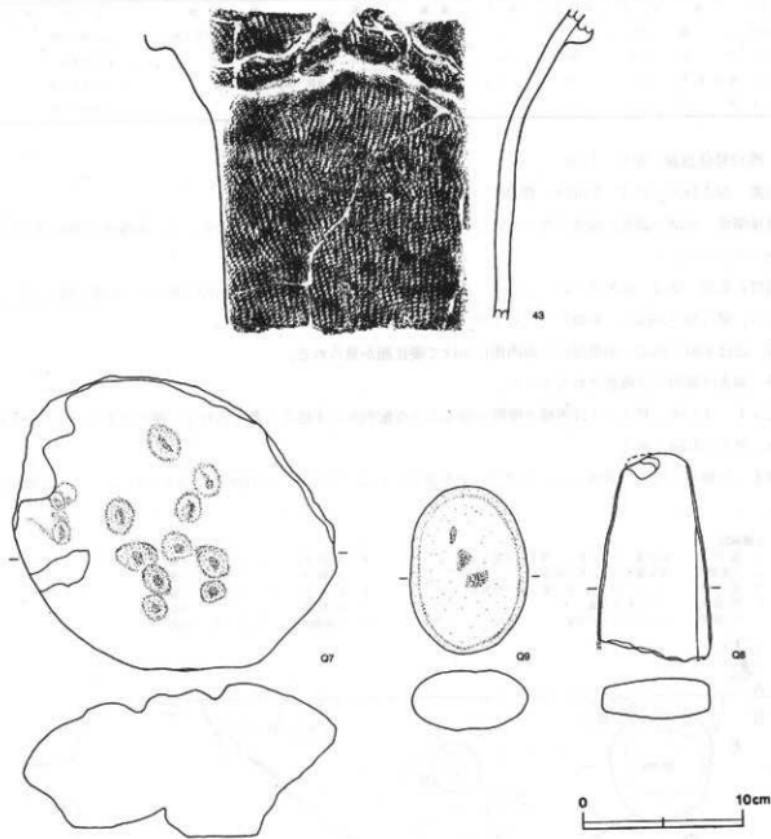
遺物出土状況 縄文土器片789点、土偶1点、凹石5点（1点掲載）、磨石7点（1点掲載）、敲石1点、磨製石斧1点、礫54点のほか、攪乱等により混入したとみられる土器片3点が出土している。43は炉体土器に転用された縄文土器深鉢である。D P25の土偶は覆土中の出土で、流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器等から縄文時代中期中葉と考えられる。

番号	器種	底さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	土器片凹石	4.7	4.5	0.9	21.4	土	表面に单脚R Lの縄文 側面削痕	北西部覆土中	PL19
Q 4	磨石	15	9.2	5.7	992	安山岩	自然石を素材	北西部 覆土中層	
Q 5	磨石	10.5	8.5	4.7	564	安山岩	自然石を素材	南東部床面	
Q 6	磨石	(10.2)	(6.0)	(4.3)	(329.5)	安山岩	自然石を素材 半分欠損	北西部 覆土中層	



第9図 第8号住居跡・出土遺物実測図



第10図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第9・10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	純文土器	深鉢	[20.2]	(15.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい青	普通	縦帶上にキサミ目 漆器から胎部單刷し玄米焼成	裏土中	50%
43	純文土器	深鉢	-	(18.9)	-	石英・長石・小槽	灰青	普通	縦帶上に斜めぼじの純文 漆器に沿って沈刷	炉腰内	50% 加体温 PL12
TP9	純文土器	深鉢	-	(6.1)	-	石英・長石・雲母	灰青	普通	胎部R Lの純文の地文 一部に1列の結節状突起	裏土中	
TP10	純文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい青闇	普通	胎部R Lの純文による平行沈刷 口部に軽く凹み込み 口部胎部に撚状工具による押付	北京都 煙草下層	
TP11	純文土器	深鉢	-	(3.4)	-	石英・長石・雲母	褐灰	普通	胎文の地文による平行沈刷	中央部 裏土表面	
TP12	純文土器	深鉢	-	(4.1)	-	石英・長石・雲母	灰黄青	普通	1縦部を沈刷で区画 区画内に斜位に沈刷	中央部 裏土中層	
TP13	純文土器	深鉢	-	(6.7)	-	石英・長石・雲母	灰青闇	普通	胎帶貼り付け後沈刷と半截竹管による平行沈刷	中央部 底面	
TP14	純文土器	深鉢	-	(8.4)	-	石英・長石	にぶい青	普通	沈刷で区画 区画内に单刷R Lの純文と胎消	東部覆土中層	

番号	器種	長さ(径)	幅(乳径)	厚さ	重 量	材 質	器種	出土位置	備考
DP25	土偶	(2.5)	-	-	(65.9)	土	腰帶上にヤギミ目 ハート形土偶の左足	西部覆土中層	
Q 7	四 石	18.1	(20.1)	9.4	(3683.8)	花崗岩	表面に12穿孔	中央部床面	
Q 8	磨 砕 石 砂	(12.6)	7.0	2.5	(37.23)	蛇紋岩	刃部一部欠損	東部覆土中層	PL19
Q 9	磨 石	10.2	7.1	3.7	406.2	安山岩	自然石を素材	北部覆土中層	

第12号住居跡(第11・12図)

位置 調査D区の北部、A46区。標高45.1mの平坦部に位置している。

重複関係 北部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。南西部を第65号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 壁は一部削平されているが、長径6.45m、確認できた短径2.05mの円形あるいは橢円形と考えられる。壁は高さ20cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向は不明である。

床 ほぼ平坦である。中央部から南西部にかけて硬化面が見られる。

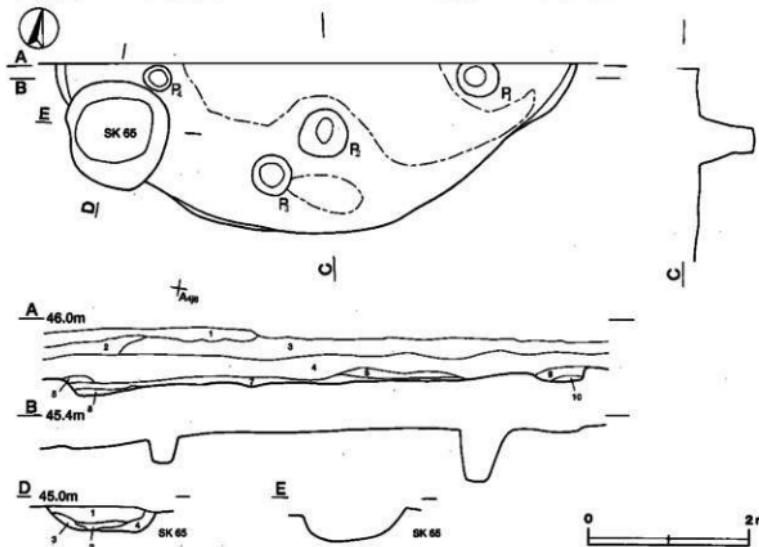
炉 調査区域内では確認されなかった。

ピット 4か所。P 1～4は規模と壁際を巡るような配列から主柱穴と考えられる。深さはP 1～3が58～68cm、P 4が32cmである。

覆土 10層からなる。各層にロームブロックを含んでいることから、人為堆積と考えられる。(1～4層は表土)

土層解説

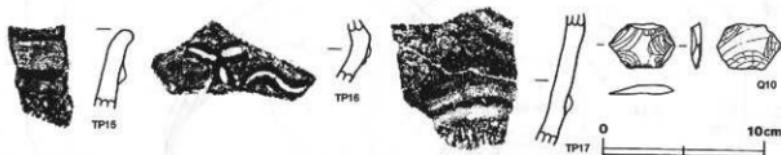
1	褐 色	砂中量、ローム粒子・焼土粒子微量	6	黒 褐 色	ロームブロック中量
2	灰 黄褐色	砂少量、ローム粒子微量	7	黒 褐 色	ロームブロック少量
3	褐 色	ロームブロック・砂少量、炭化物微量	8	黒 褐 色	ロームブロック中量
4	黑 褐 色	ローム粒子少量	9	黒 褐 色	ロームブロック少量
5	黑 褐 色	ロームブロック微量	10	灰 黄褐色	ロームブロック中量



第11図 第12号住居跡、第65号土坑実測図

遺物出土状況 繩文土器片370点、礫14点のほか、攪乱等により混入したとみられる土師器片35点、須恵器片6点が出土している。

所見 時期は、出土土器等から縄文時代中期後葉と考えられる。



第12図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特徴	出土位置	備 考
TP15	縄文土器	深 跡	-	(4.8)	-	石英・長石・雲母	黒	普通	縦帶で区画 区画内に単刷しの繩文	覆土中	
TP16	縄文土器	鉢	-	(3.8)	-	石英・長石・雲母	に赤い黄褐色	普通	縦帶上に沈刷	覆土中	
TP17	縄文土器	深 跡	-	(8.3)	-	石英・長石・雲母	に赤い橙	普通	縦帶で区画 区画内に単刷しの繩文	覆土中	
Q10	鉢	片	2.7	4	0.6	7.6	チャート	横長断片 二次調整痕		南西部覆土中	

第14号住居跡（第13～15図）

位置 調査D区の北西部、A4j6区。標高45.5mの平坦部に位置している。

重複関係 南部を第13号住居跡に、東部を第47号土坑に、中央部を第59号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 壁は一部が遺存しているのみであるが、長径5.00m、短径4.40mの橢円形と考えられる。壁は高さ20cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-55°-Wと考えられる。

床 やや凸凹している。硬化面は確認されなかった。

炉 埋焼炉で、中央部南寄りに設けられている。口縁部と胴下半部を欠損する2個の深鉢を、長径114cm、短径65cmの橢円形をした、深さ50cmの円筒形の掘り方内の両端に据えて、炉体土器としている。

ピット 8か所。P1～8は壁際を巡っていることから主柱穴と考えられる。深さはP1～4が30～34cm、P5～8が40～48cmである。

覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

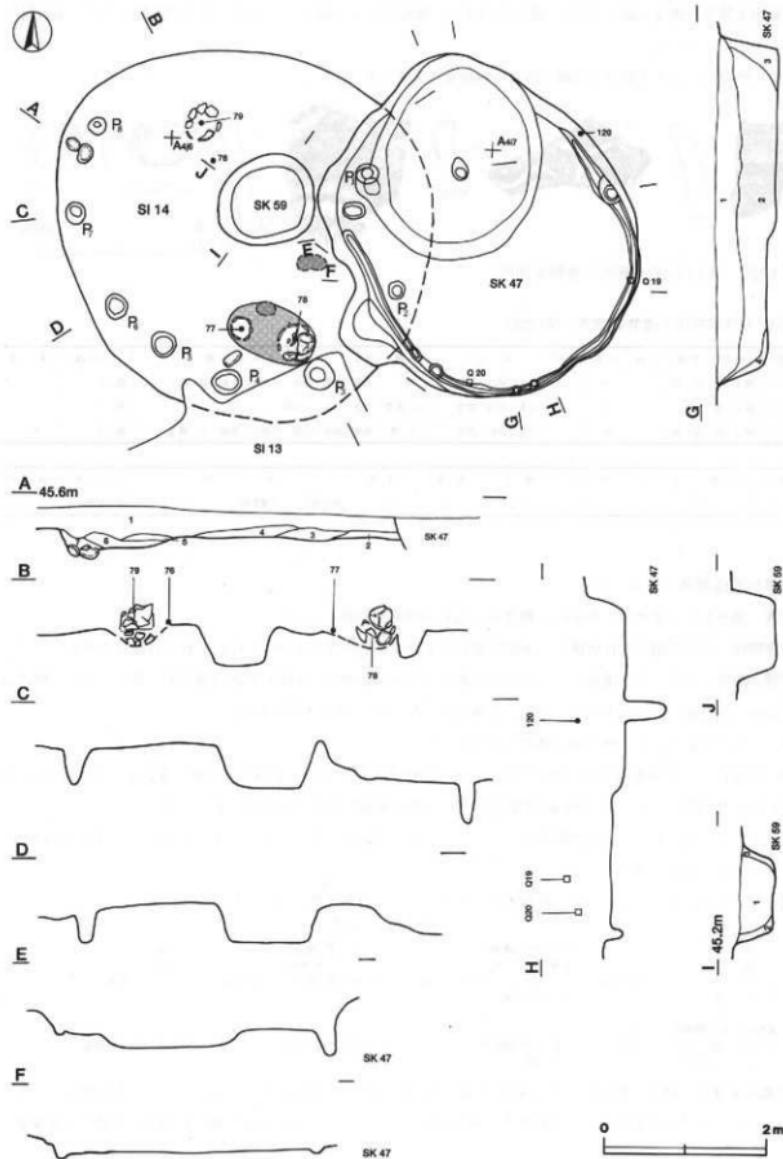
1 黒 褐 色	ロームブロック・炭化物・礫微量	5 灰 黄 褐 色	ロームブロック中量
2 褐 色	ロームブロック中量	6 に赤い黄褐色	ロームブロック少量
3 黒 色	炭化物多量。ロームブロック・焼土粒子少量	7 灰 黄 褐 色	砂中量。ロームブロック微量
4 黒 褐 色	ロームブロック・炭化物少量		

第59号土坑土層解説

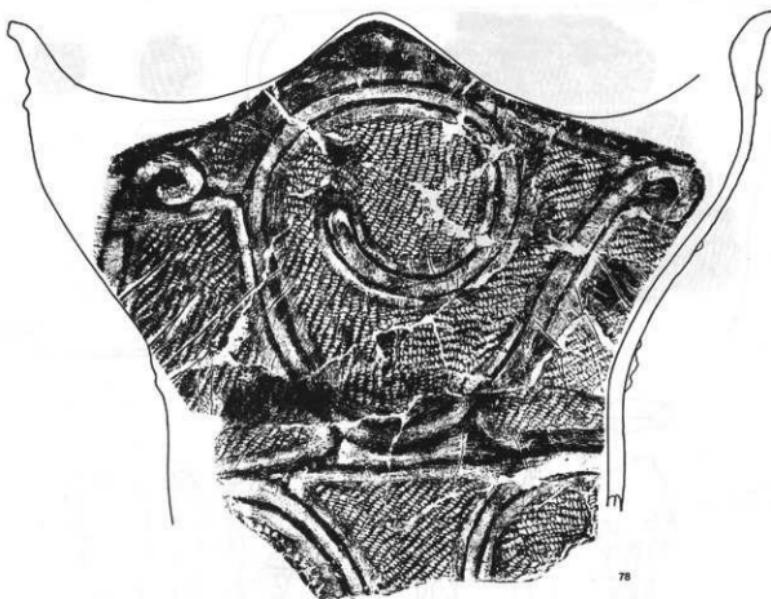
1 黒 褐 色	ロームブロック少量、炭化物微量	3 黒 褐 色	ローム粒子中量、炭化物・砂微量
2 に赤い黄褐色	ロームブロック・砂少量		

遺物出土状況 縄文土器片157点、土器片円盤3点、石錐1点、削器1点、礫2点のほか、攪乱等により混入したとみられる土師器片20点、須恵器片33点が出土している。77と78は炉体土器に転用された縄文土器深鉢である。

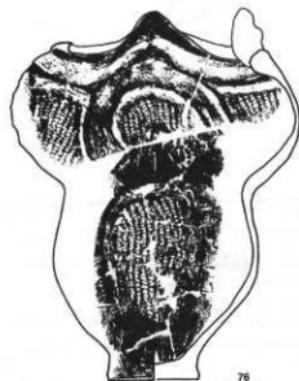
所見 時期は、出土土器等から縄文時代中期中葉から後葉にかけてと考えられる。



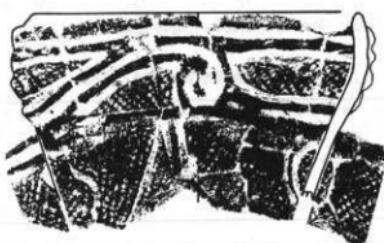
第13図 第14号住居跡、第47・59号土坑実測図



78



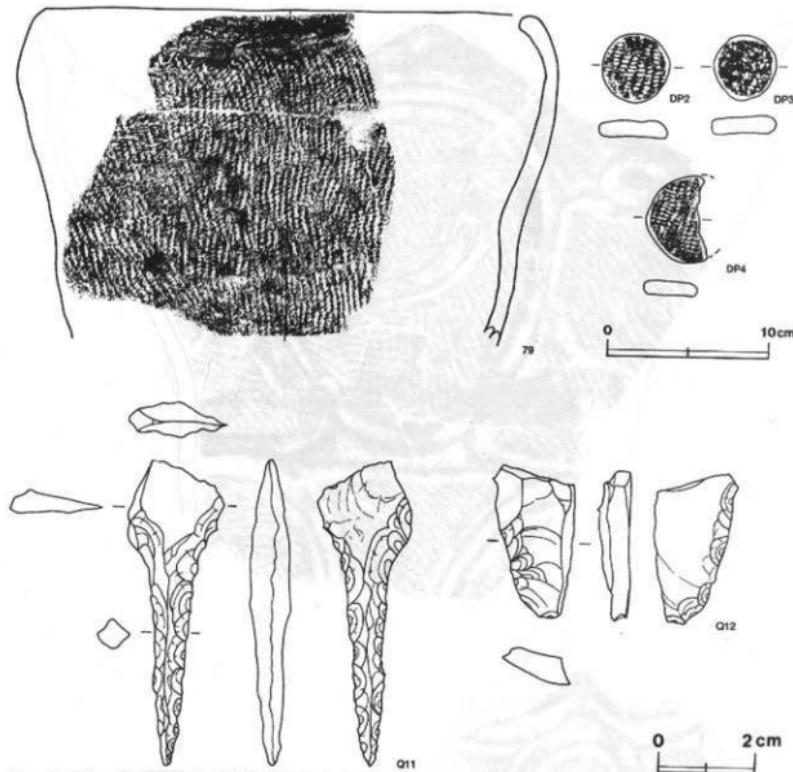
76



77



第14図 第14号住居跡出土遺物実測図（1）



第15図 第14号住居跡出土遺物実測図（2）

第14号住居跡出土遺物観察表（第14・15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
76	縄文土器	深鉢	12.5	22.7	5.7	石英・長石・ 赤色粒子	にぶい緑	普通	単筋L.Rの縄文の地文を微隆起線で区画	中央部床面	40% PL15
77	縄文土器	深鉢	20.6	(11.5)	-	石英・長石・濁母・ 小槽	緑	普通	口縁部を盛青で区画、区画内に単筋L.Rの縄文 内に網部状施しRの縄文上に吹焼が集中	知勝内	30%
78	縄文土器	深鉢	[48.0]	(31.7)	-	石英・長石・濁母・ 小槽	緑	普通	母起線で区画 区画内に単筋Rの縄文	知勝内	20% PL15
79	縄文土器	深鉢	30.8	(20.3)	-	石英・長石	にぶい緑	普通	単筋L.Rの縄文	北部床面	20%

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重 量	材 質	等 級	出土位置	備 考
DP2	土器片円盤	4.3	4.2	0.9	22.3	土	表面に単筋R.Lの縄文 開面研磨	北東部覆土中	PL19
DP3	土器片円盤	4.0	3.9	1.1	19.1	土	燒失を受け摩滅のため表面の縄文施文不明 側面研磨	例勝中	PL19
DP4	土器片円盤	5.4	(3.4)	0.9	(19.3)	土	表面単筋Rの縄文 開面研磨	南東部覆土中	
Q11	石 磨	6.2	2.1	0.9	5.1	チャート	逆三角形状を呈し、先端部かなり突出	覆土中	PL19
Q12	削 器	3.1	1.7	0.7	3.3	黒曜石	左側縁に調整痕	覆土中	PL19

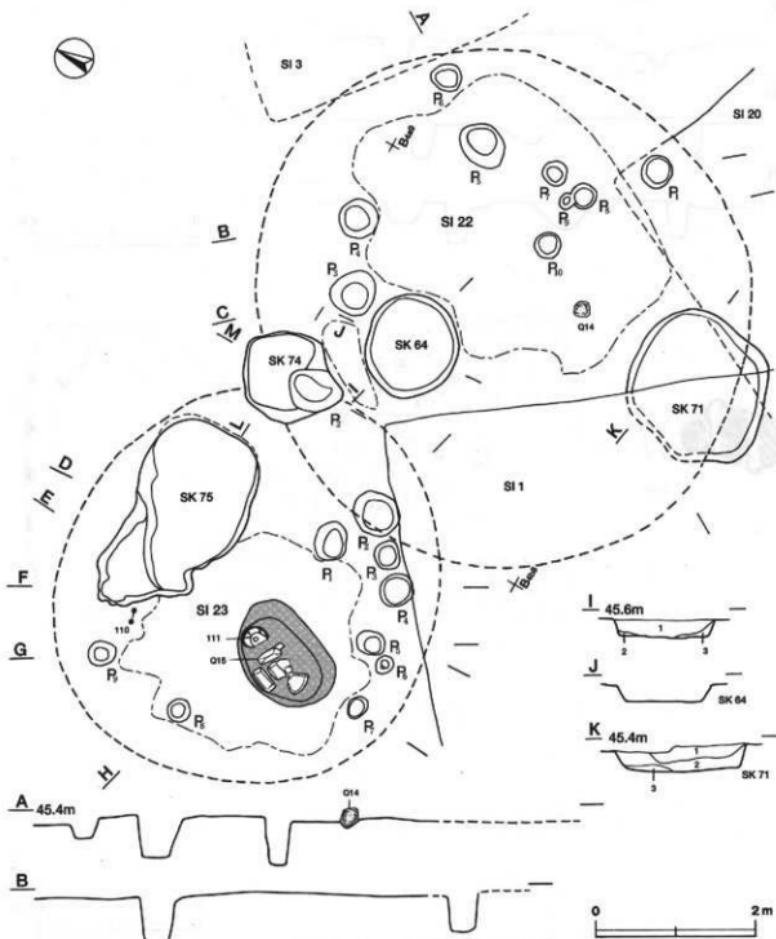
第22号住居跡（第16・17図）

位置 調査D区の東部、B4a8区。標高45.4mの平坦部に位置している。

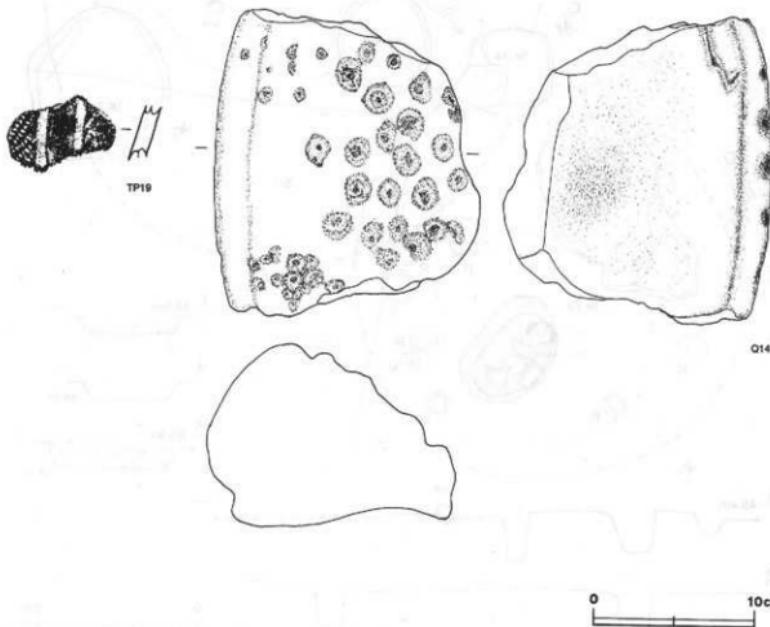
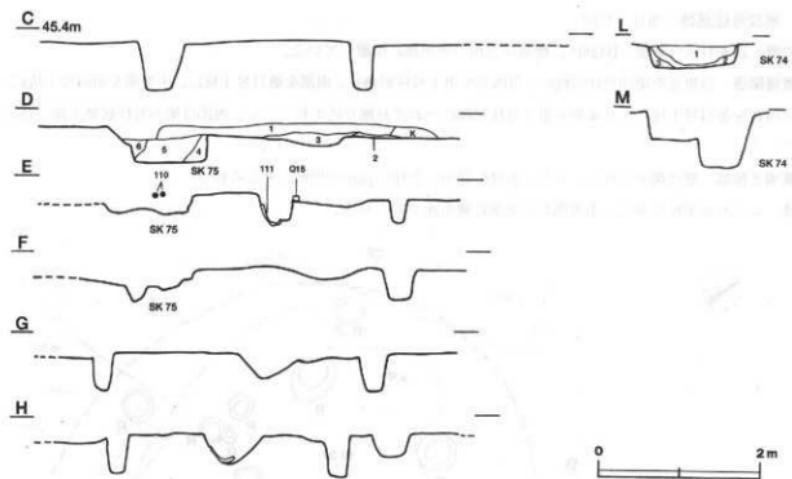
重複関係 南東部を第20号住居跡に、南西部を第1号住居跡に、南部を第71号土坑に、中央部を第64号土坑に、北西部を第74号土坑に、北東部を第3号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。西部は第23号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 壁は削平されているが、長径6.56m、短径6.12mの円形と考えられる。

床 おおむね平坦である。中央部から東部に硬化面が見られる。



第16図 第22・23号住居跡、第64・71・74・75号土坑実測図



第17図 第22・23号住居跡、第74・75号土坑・出土遺物実測図

炉 確認できなかった。

ピット 10か所。P 1～5は推定される壁際を巡るよう確認されていることから主柱穴と考えられる。P 6～10の性格は不明である。深さはP 1・5が45cm前後、P 2～4が60cm前後、P 6が24cm、P 7～9は10～14cm、P 10が54cmである。

覆土 壁は削平されていて、堆積状況は不明である。

第64号坑土層解説

1	暗 黄 色	ロームブロック少量、炭化物微量
2	にぶい黄褐色	ローム粒子少量

第71号坑土層解説

1	にぶい黄褐色	ロームブロック中量
2	暗 黄 色	ロームブロック中量

第74号坑土層解説

1	黒 黄 色	ロームブロック少量、砂微量
2	にぶい黄褐色	ロームブロック少量

3 暗 黄 色 ロームブロック中量

3 にぶい黄褐色 ローム粒子多量、砂少量

3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 繩文土器片4点。凹石1点が炉跡の南東部から出土している。

所見 時期は、出土土器等から繩文時代中期後葉と考えられる。

第22・23号住居跡出土遺物観察表(第17・18回)

番号	種類	基盤	口径	器高	基盤	胎 土	色 質	底成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP19	繩文土器	脚 体	-	(31)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	芯縫で区画 区画内に導管RLの繩文と磨擦	SI22裏土中	
II10	繩文土器	往 口	10.7	(17.9)	-	石英・長石・金銀鉱	にぶい橙	普通	地文は単層RLの繩文	SI22西部床面	45%
III1	繩文土器	脚 体	-	(29.5)	6.2	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	脚部單層LRの繩文	SI-23炉跡内	50% PL17
番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	高さ	材質	材質	特徴	出土位置	備考	
Q14	凹石・石皿	(18.9)	(16.8)	11.9	(36734)	安山岩	表面に4枚目 真の機能面の周囲に縁を有し、機能面が凹む		SI22中央部床面	PL20	
Q15	凹石・石皿	31.6	(20.0)	11.0	(36460)	花崗岩	表面に4枚目 真の機能面の周囲に縁を有し、機能面が凹む 縁に7孔		SI22炉跡内		

第23号住居跡(第16～18回)

位置 調査D区の中央部、B4a7区。標高45.3mの平坦部に位置している。

重複関係 南東部を第1号住居跡に、東部を第22号住居跡と第74号土坑に掘り込まれている。中央部床面は第75号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 壁はほとんど削平されているが、推定長径5.1m、短径4.74mの円形と考えられる。炉跡から判断して主軸方向はN-26°-Eと考えられる。

床 やや凸凹である。炉跡の周囲に硬化面が見られる。

炉 土体土器を伴う石組炉で、中央部から南西寄りに設けられている。長径142cm、短径100cmの長方形で、深さ40cmの掘り方内の北東際に深鉢を据えて、炉体土器としている。石組の石は、長さ30cm前後の凹石4個と10cmほどの川原石2個を使用している。

ピット 浅い窪みを除き9か所。P 1の性格は不明である。P 2～9は、推定される壁際を巡るよう確認されていることから主柱穴と考えられる。深さはP 1が50cm、P 2～7が28～40cm、P 8・9が50cmほどである。

覆土 3層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。4～6層は第75号土坑の覆土である。

土層解説

1	黒 黄 色	ロームブロック・炭化物微量
2	褐 灰 色	ロームブロック少量
3	黒 黄 色	炭化物少量、ロームブロック微量

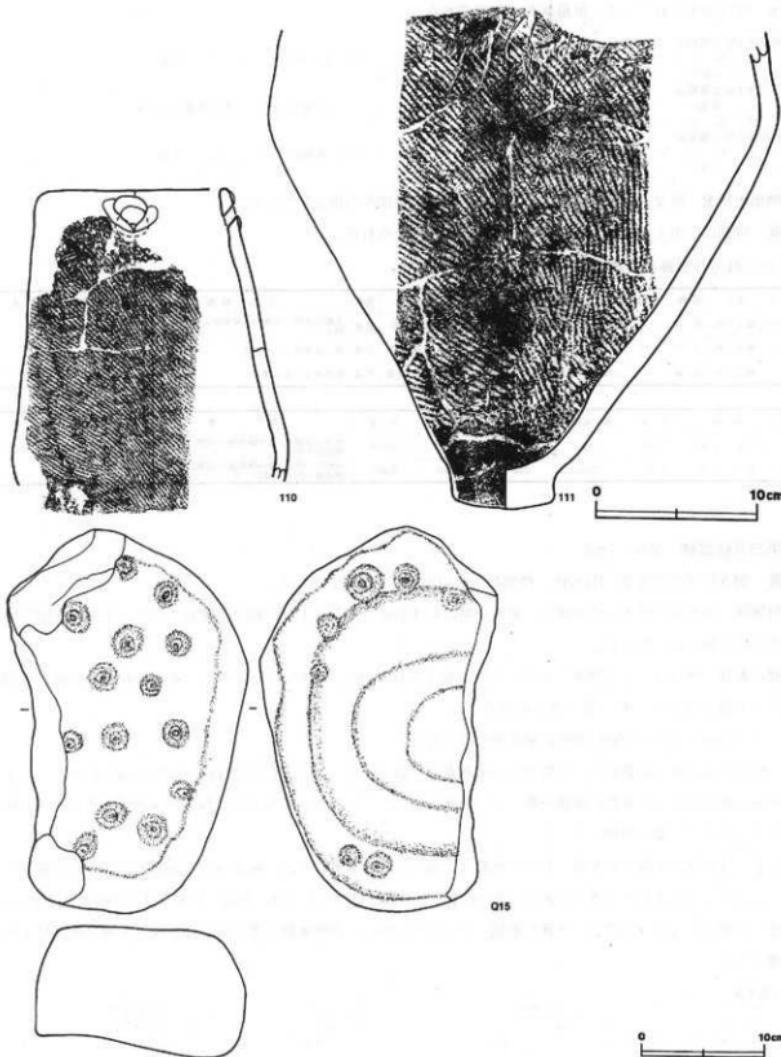
4 黒 黄 色 ロームブロック・炭化物微量

5 黒 黄 色 ロームブロック・炭化物微量

6 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 繩文土器片81点、石皿を兼用した凹石1点、花崗岩製の凹石3点（未掲載）のほか、攪乱等により混入したとみられる土師器片29点が出土している。110の繩文土器壺形土器は西部の床面から出土している。111は炉体土器に転用された繩文土器深鉢である。

所見 時期は、出土土器等から縄文時代中期後葉と考えられる。



第18図 第23号住居跡出土遺物実測図

(2) 土坑

第4号土坑（第19図）

位置 調査A区の中央部、C1d9区。標高44.2mの平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.52m、短径2.05mの椭円形で、確認面からの深さは94cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がりっている。長径方向はN-27°-Eである。底面は段状である。

覆土 6層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

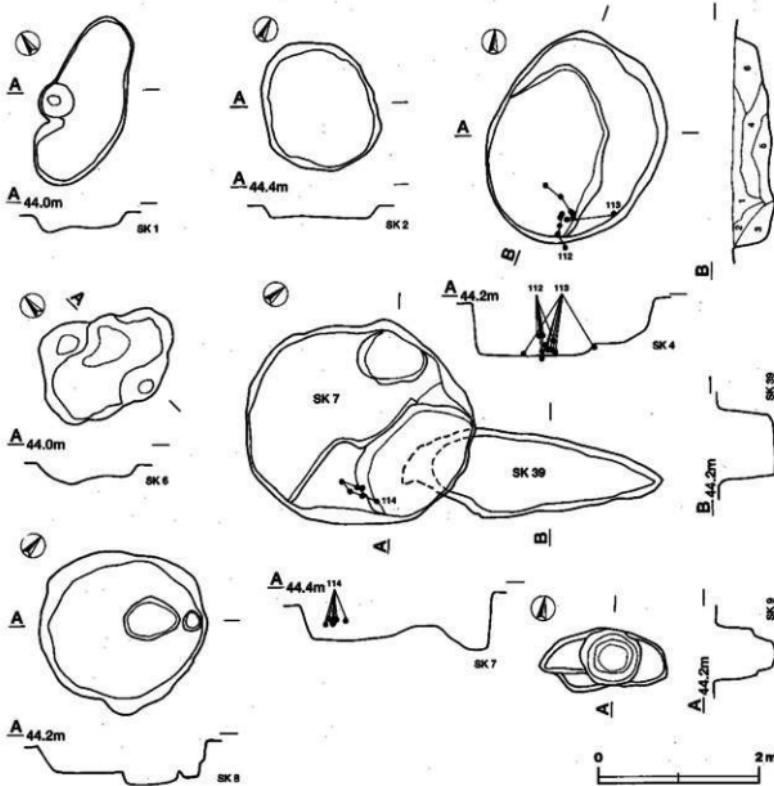
土層解説

1 黒褐色	砂多量
2 灰褐色	砂多量、ロームブロック少量
3 灰褐色	砂多量

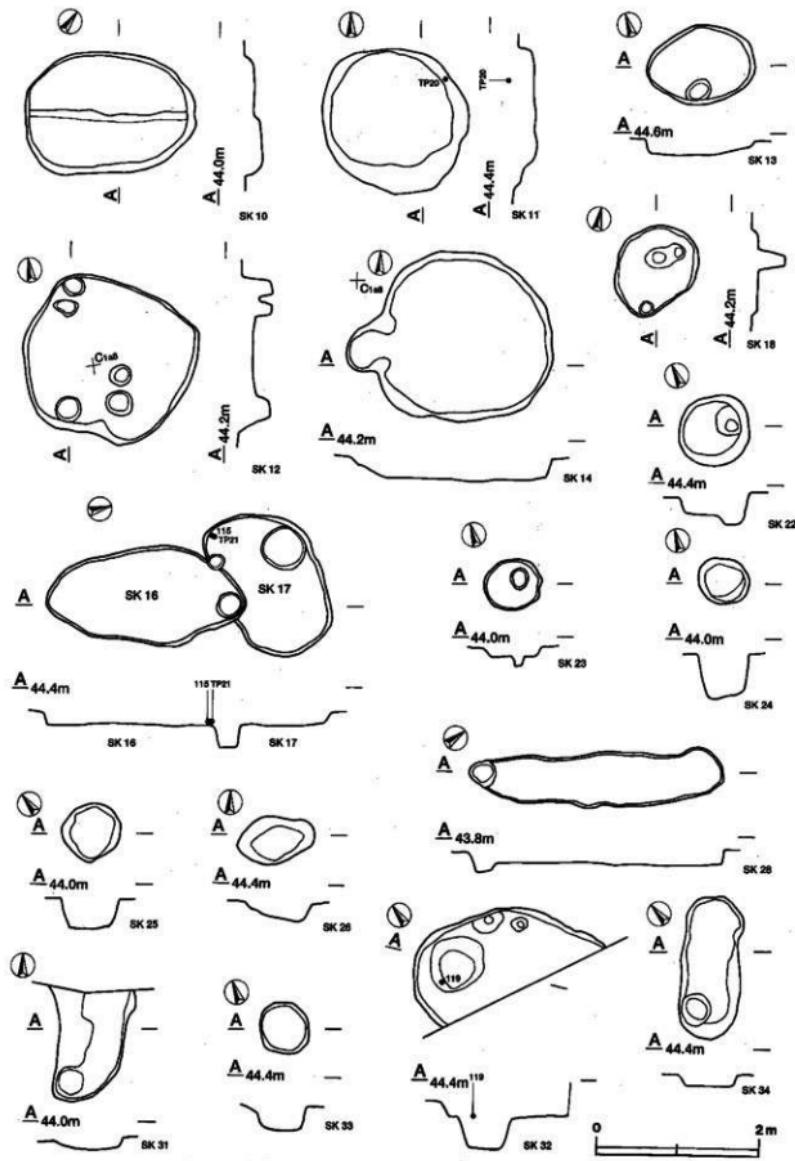
4 褐灰色	砂多量、ロームブロック少量
5 黑褐色	砂多量、ロームブロック少量
6 黑褐色	砂多量

遺物出土状況 繩文土器片138点、礫5点、凹石1点（未掲載）、磨石1点（未掲載）のほか、擾乱等により混入したとみられる土師器片27点が出土している。112の繩文土器深鉢と113の繩文土器浅鉢が南部底面から出土している。

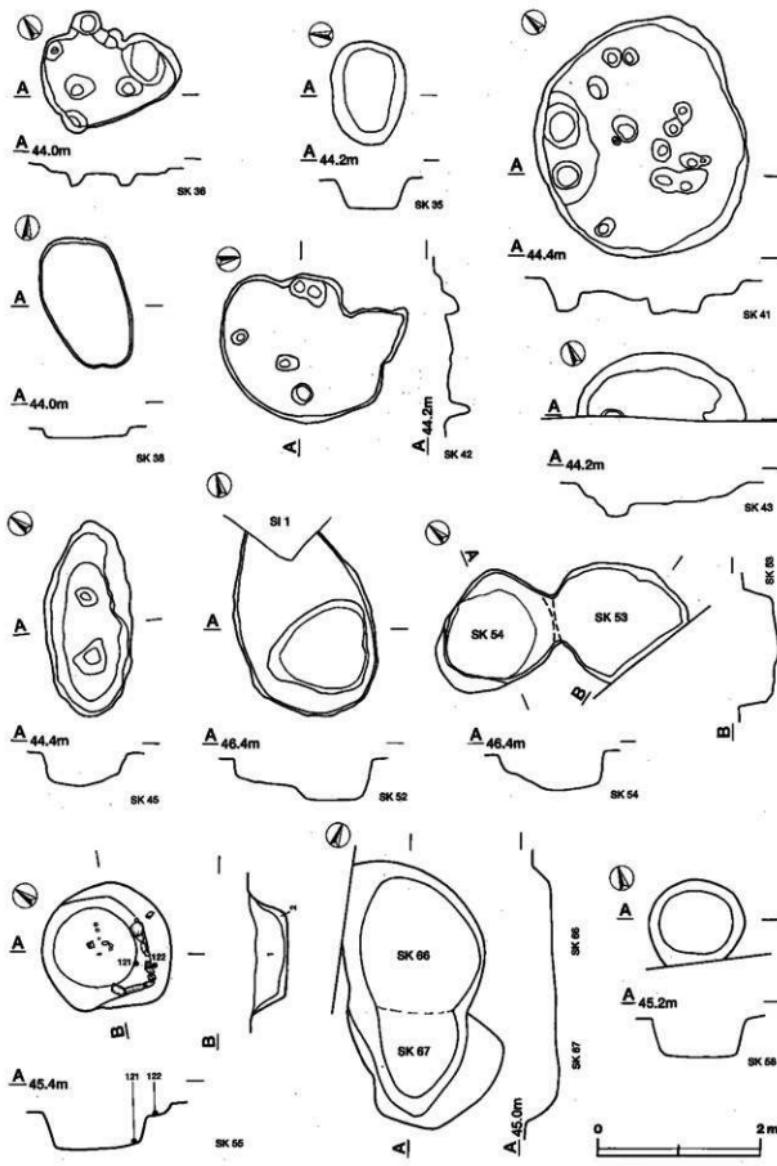
所見 時期は、出土土器等から縄文時代中期中葉と考えられる。



第19図 縄文時代土坑実測図(1)



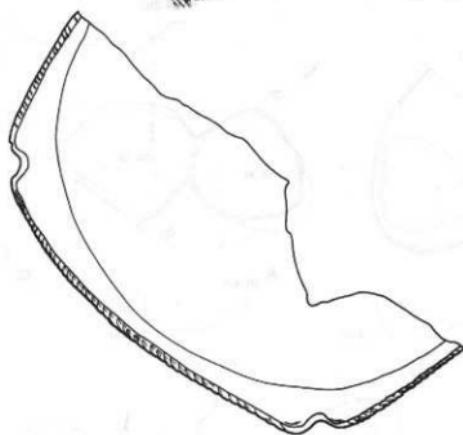
第20図 楢文時代土坑実測図（2）



第21図 縄文時代土坑実測図（3）



112



113

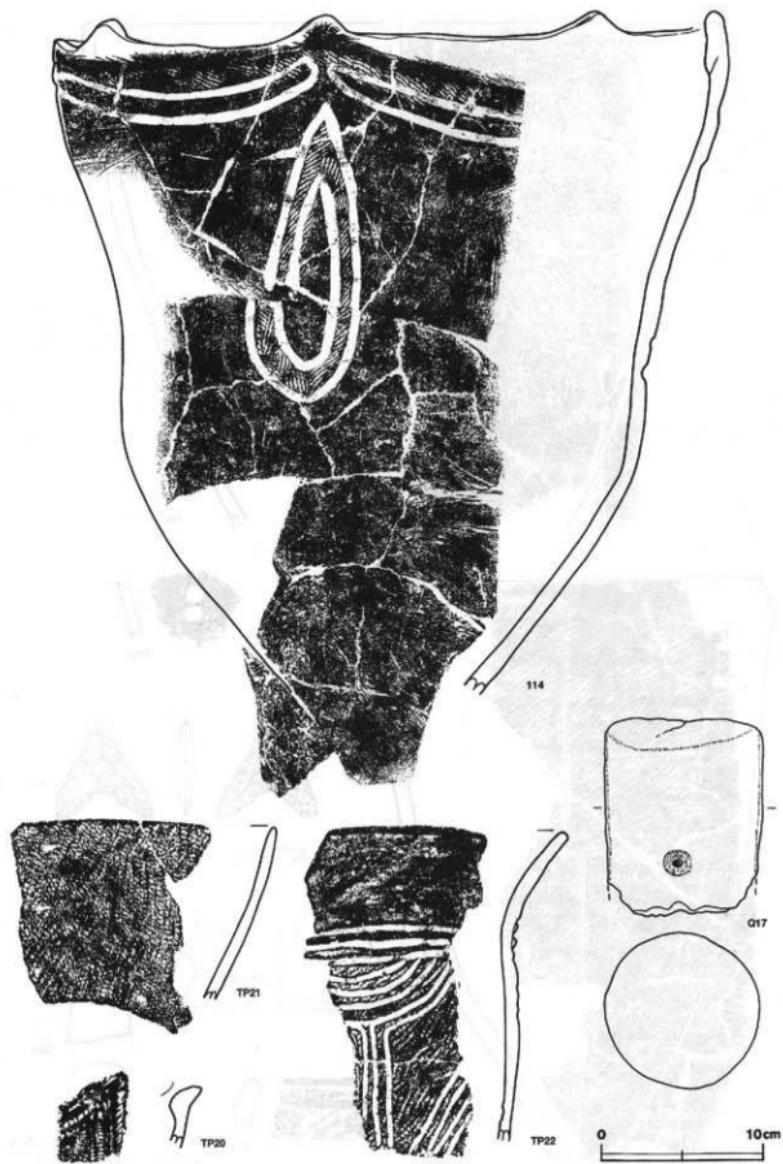


Q16

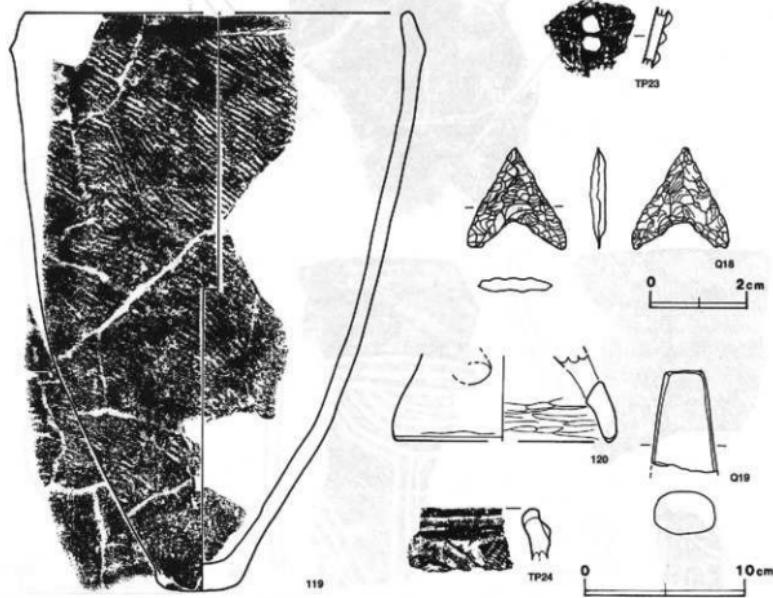
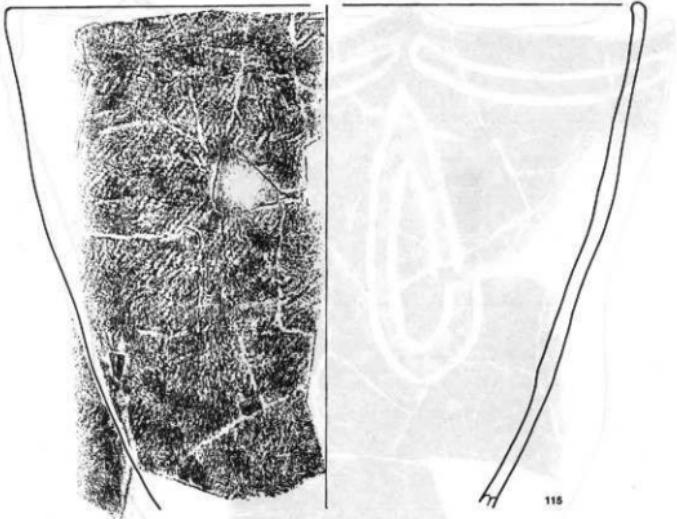
0 2 cm

0 10 cm

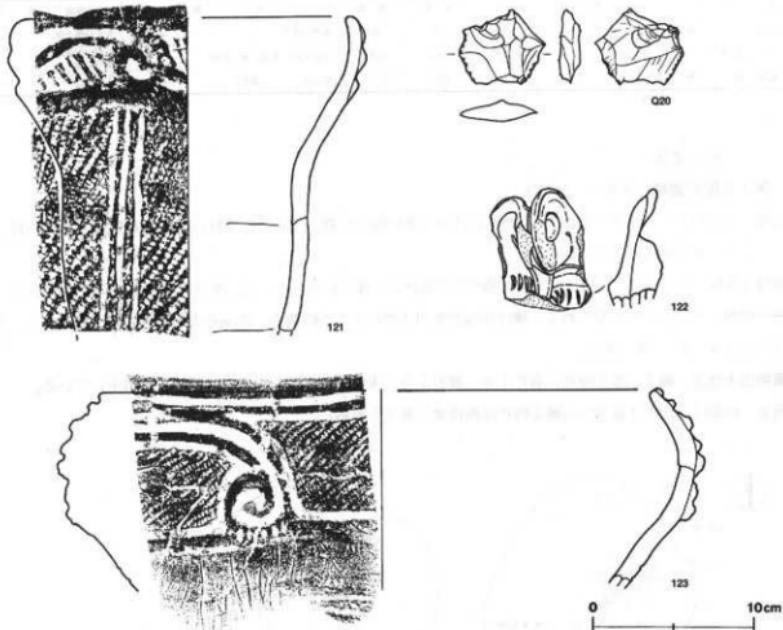
第22図 縄文時代土坑出土遺物実測図（1）



第23図 繩文時代土坑出土遺物実測図（2）



第24図 縄文時代土坑出土遺物実測図（3）



第25図 縄文時代土坑出土遺物実測図(4)

縄文時代土坑出土遺物観察表(第22~25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
112	縄文土器	深鉢	-	(16.2)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	輪肋Lの綱文を地文に波状の花繩が横位と直位に施す	SK4南部 底面	15%
113	縄文土器	深鉢	[38.0]	(13.1)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口部部にキザミ目 無文	SK4南部 底面	25%
114	縄文土器	深鉢	40.5	(42.2)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	丁字型の格状口縁、底部R Lの綱文を地文に施す	SK7北東部 底面中央	40% PL17
TP20	縄文土器	深鉢	-	(3.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	底部に沿って2列の輪肋波綱文	SK11東端 壁土上層	
115	縄文土器	深鉢	[39.2]	(31.2)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	單脚R Lの綱文	SK17南西部 底面	90%
TP21	縄文土器	深鉢	-	(10.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	半脚R Lの綱文	SK17南西部 底面	
TP22	縄文土器	深鉢	-	(18.9)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	沈縁で区画 区画後單脚R Lの綱文	SK21腹中央	
TP23	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	輪肋上部縁による押込 隆帯に沿って2列の輪肋波綱文	SK31腹土中	
119	縄文土器	深鉢	[34.2]	(35.5)	5.2	石英・長石・小礫	にぶい褐	普通	口縁部無文帯 腹部單脚R Lの綱文	SK32北西部 壁土中層	90% PL18
120	縄文土器	器台	-	(6.3)	(12.4)	石英・長石	明赤褐	普通	内面ハラ腰き 傷跡に孔を穿つ 孔数は不明	SK47北東部 壁土上層	20%
TP24	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	腰起縁で区画 区画内に單脚R Lの綱文	SK47腹土中	
121	縄文土器	深鉢	[20.8]	(19.3)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい褐	普通	口輪部文様帶と区画 内側單脚R Lの綱文を施すに3本波綱が張下	SK55中央部 底面	70%
122	縄文土器	深鉢	-	(7.5)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	突手 扇形文が施す	SK55南部 底面	5%
123	縄文土器	深鉢	[34.0]	(12.3)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい褐	普通	腰起縁で輪肋文様帶と腰際文様帶を有す 口縁部文様帶に沿って波綱が施す 区画内に单脚R Lの綱文	SK61北西部 壁土上層	10%

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q16	磨製石斧	(3.4)	1.9	0.9	(9.4)	硬鉄岩	刃部欠損 基部丁寧に研磨	SK2覆土中	
Q17	石棒	(17.2)	9.8	9.5	(1571.2)	安山岩	1か所凹痕 外面焼熱	SK21腹土中	

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q18	石 磚	2.1	—	0.3	0.8	頁岩	系縫に挟り	SK 43覆土中	PL.20
Q19	磨製石斧	(6.2)	(3.8)	2.7	(108.5)	砂岩	刃部欠損 基部丁寧に研磨	SK 47南東部 覆土上部	PL.20
Q20	剥片	4.5	—	1.3	28.1	チャート	縦長剥片 二次調整痕	SK 47西部 覆土上部	PL.20

(3) 配石遺構

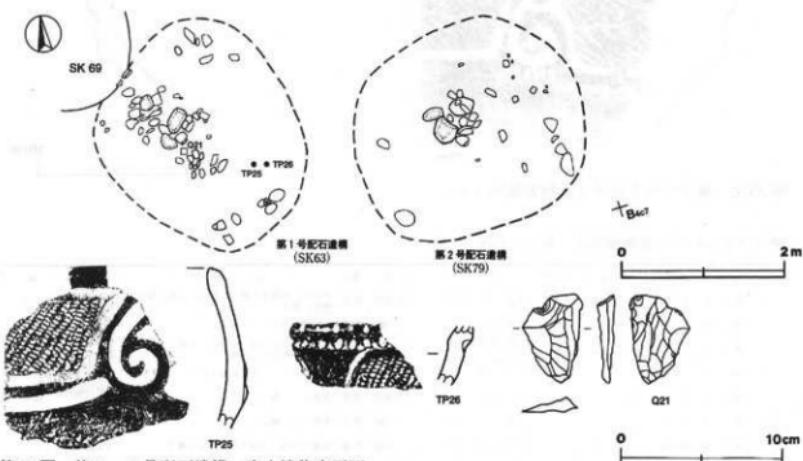
第1号配石遺構 (SK 63 第26図)

位置 調査D区の中央部、B4b5区。標高45.1mの平坦部に位置している。本跡の北西側に第69号土坑が接しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長径2.70m、短径2.35mの橢円形の範囲に、礫が広がっている。礫の下に掘り込みは見られない。礫は被熱しているものも見られる。礫は10cm前後の小形のものが63個と、30cmの大形のものが3個である。長径方向はN-25°-Wである。

遺物出土状況 繩文土器片68点、剥片1点、磨石1点(未掲載)と凹石1点(未掲載)が出土している。

所見 時期は、出土土器等から繩文時代中期後葉と考えられる。



第26図 第1・2号配石遺構・出土遺物実測図

第1号配石遺構出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	深さ	底様	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP25	繩文土器	深鉢	—	(9.9)	—	石英・長石・雲母	にぼい黄褐色	普通	縫合と沈締で区画 区画内に草履R.L.の縄文	南東部底面	
TP26	繩文土器	深鉢	—	(3.6)	—	石英・長石・雲母	にぼい褐色	普通	縫合上下に利安文・沈締で区画 区画内に草履R.L.の縄文と磨削施文	南東部底面	

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q21	剥片	5.4	3.8	1.1	12.8	チャート	縦長剥片 部分的に二次調整痕	中央部底面	

第2号配石遺構 (SK79 第26図)

位置 調査D区の中央部、B4b6区。標高45.1mの平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.90m、短径2.50mの横円形の範囲に、礫が広がっている。礫の下に掘り込みは見られない。礫は被熱しているものも見られる。礫は10cm前後の小形のものが29個と、30cmの大形のものが7個である。長径方向はN-88°-Eである。

遺物出土状況 繩文土器片7点が出土している。

所見 時期は、出土土器等から繩文時代中期後葉と考えられる。

(4) 遺物包含層

第1号遺物包含層 (第27~29図)

位置 調査B区全体の範囲が包含層と考えられる。

規模と形状 調査B区全体から繩文土器片の分布が見られるので、調査区域外にまで延びていると考えられる。

遺物を取り上げた後、底面を精査したが、遺構と考えられるものは確認できなかった。

覆土 調査区域内の端の部分にトレーンチを入れ、土層観察を行った。ほぼレンズ状に堆積していることから、

自然堆積と考えられる。

土層解説

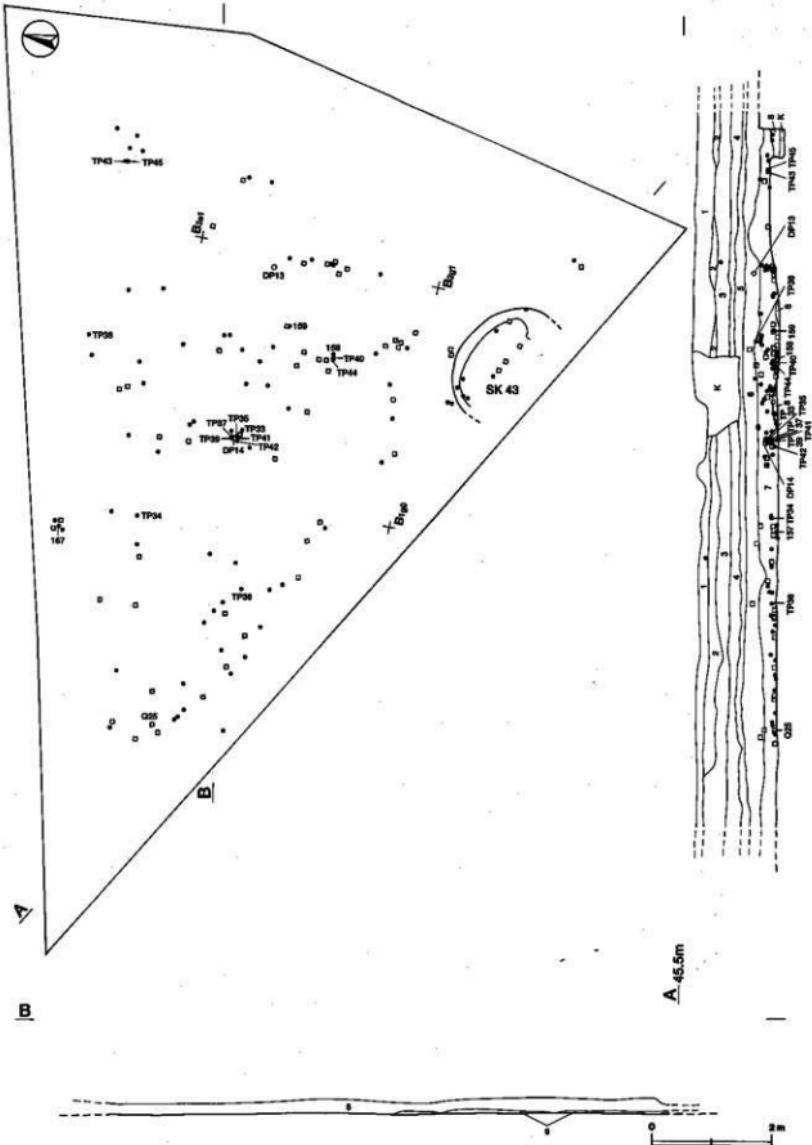
1 灰 黄 色	砂中量、礫少量、粘土粒子微量	6 灰 黄 色	砂・粘土粒子中量、炭化物少量
2 にぶい 黄 色	砂・礫中量、炭化物・粘土粒子少量	7 黒 暗 色	砂・粘土粒子中量
3 灰 黄 色	砂・礫中量、粘土粒子少量	8 黒 暗 色	砂少量
4 灰 暗 色	砂・礫中量、粘土粒子少量	9 黒 灰 色	砂中量
5 黄 灰 色	砂・粘土粒子中量、炭化物微量		

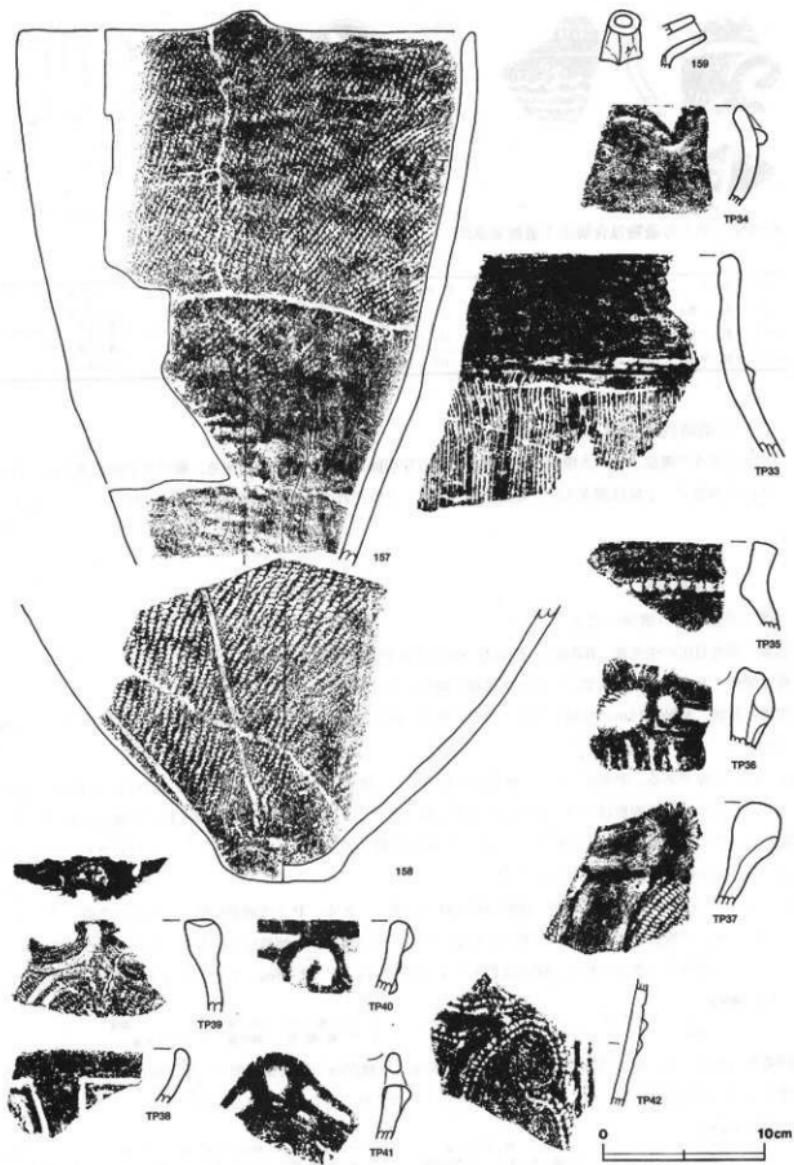
遺物出土状況 繩文土器片3377点、磨製の不明石製品1点、礫47点、磨石1点(未掲載)、石皿1点(未掲載)のはか、擾乱等により混入したとみられる土師器片62点、須恵器片20点、陶器片10点が出土している。調査B区全体に繩文土器片の分布が見られる。

所見 出土した繩文土器片のはほとんどは中期のもので、本跡の時期と考えられる。その他の土器片は流れ込んだものと考えられる。

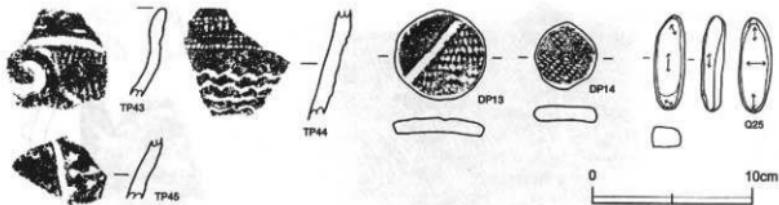
第1号遺物包含層出土遺物観察表 (第28・29図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
157	縄文土器	深鉢	[26.4]	(33.0)	-	石英・長石・小礫	にぶい黄	普通	単脚RLの縄文	北部底面	30% PL18
158	縄文土器	深鉢	-	(17.2)	7	石英・長石・ 赤色粒子・小礫	にぶい黄	普通	単脚正Lの縄文族比縄が垂下	中央部底面	30% PL18
159	縄文土器	注口	-	(3.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	注口部ナメ・江戸部赤影	中央部 底土下層	5%
TP23	縄文土器	深鉢	-	(12.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	腰帶貼り付け 腹部朱絵文	北部底土下層	
TP24	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	口縁部にV字状の施縄 無文	北部底土下層	
TP25	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	口縁部下位に刺突文	中央部 底土下層	
TP26	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	石英・長石・雲母	黒	普通	口縁部に點墨貼り付け 斜縄が垂下	北部底土下層	
TP27	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	腰帶貼り付け区画 区画内に単脚正Lの縄文と施縄文	中央部 底土下層	
TP28	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	施縄で区画 区画内に施縄文と単脚縄文	北部底土下層	
TP29	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	施縄で区画 区画内に単脚RLの縄文	中央部 底土下層	
TP30	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	施縄で区画 区画内に単脚RLの縄文	中央部 底土下層	
TP40	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	口縁部腰帶貼り付け	中央部 底土下層	
TP41	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	横筋の突手	中央部 底土下層	
TP42	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	腰帶に沿って2列の粘跡比縄文	中央部 底土下層	
TP43	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	石英・長石・雲母	黒	普通	押し引き竹管文・山形文が混走	北部底面	
TP44	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	施縄で区画 区画内に刺突点文	中央部底面	
TP45	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	施縄で区画 区画内に刺突点文	北部底面	





第28図 第1号遺物包含層出土遺物実測図（1）



第29図 第1号遺物包含層出土遺物実測図（2）

番号	部 構	長さ (往)	幅 (乳径)	厚 さ	重 量	材 質	特 徹	出土位置	備 考
DP13	土器片円錐	5.5	5.6	0.9	31.5	土	表面単節及しの縞文 斜面研磨	中央部 覆土中層	
DP14	土器片円錐	4.2	3.9	0.9	14.7	土	表面単節RLの縞文 斜面研磨	中央部 覆土下層	
Q25	磨製石製品	5.7	1.9	1.3	19.8	安山岩	表面丁寧に研磨	北西面底面	

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認された古墳時代の遺構は、竪穴住居跡13軒、土坑2基である。竪穴住居跡は調査区のD区とE区の西部で、土坑は調査A区で確認されている。それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について、記述していく。

（1） 竪穴住居跡

第1号住居跡（第30～32図）

位置 調査D区の中央部、B4b8区。標高45.5mの平坦部に位置している。

重複関係 北部から東部は第22・23号住居跡と第52・71号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.14m、短軸5.12mの方形である。壁は高さ10～22cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-42°-Wである。

床 ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。壁溝は全周している。上幅10～16cm、下幅6～10cm、深さ4～6cmで、断面形はV字状である。床全面に貼り付くように多量の炭化材や焼土粒子が確認されている。

竪 北西壁の中央部は擾乱を受けているが、その周辺に粘土が見られることから、ここに付設されていたと想定される。規模や形状は不明である。

ピット 9か所。P1～4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P5は南東壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6・9は配置から補助柱穴、P7・8は壁際に位置することから壁柱穴と考えられる。深さはP1～4が43～60cm、P5が38cm、P6～9は20cm前後である。

P5土層解説

1 黒 色 炭化物少量、ロームブロック微量
2 ぶい黄褐色 ロームブロック中量

3 暗 褐 色 砂少量、ロームブロック微量
4 灰 黄 褐 色 砂中量、ローム粒子少量

貯蔵穴 北コーナー部に付設されている。長軸100cm、短軸70cmの隅丸長方形で、深さ40cmである。覆土の堆積状況は人為的に埋め戻したような様相で、その上を炭化材で蓋をしたような状況である。

貯蔵穴土層解説

1 黒 褐 色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子少量
2 ぶい黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量

3 黒 褐 色 炭化物中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量
4 灰 黄 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量

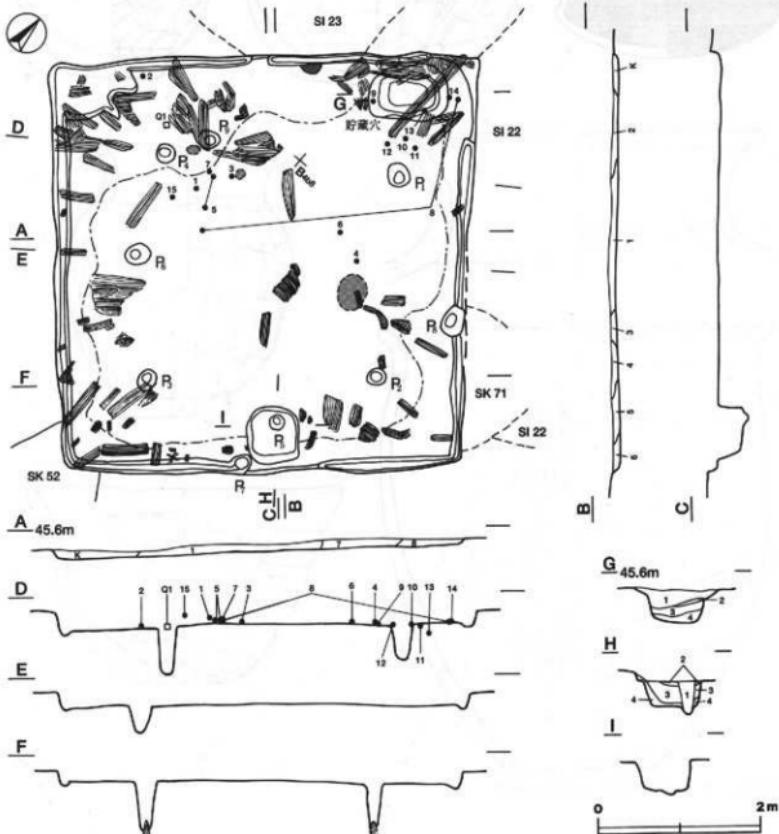
覆土 8層からなる。各層がブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

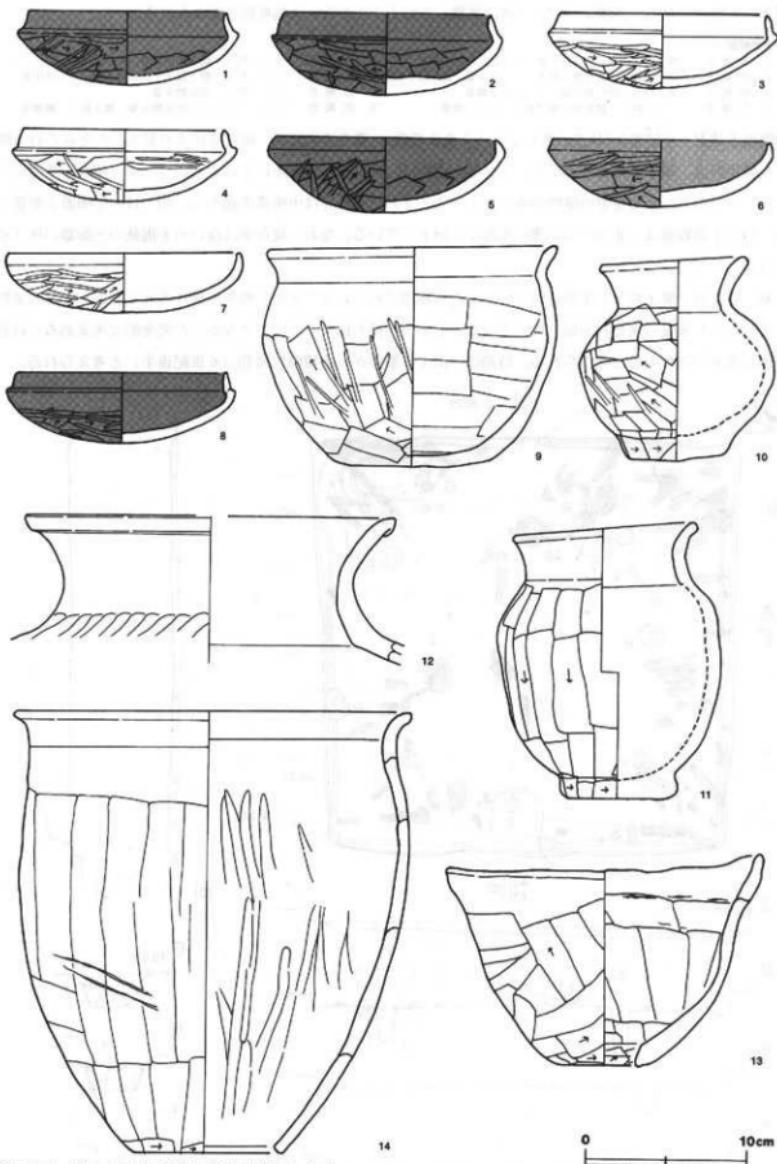
1 黒褐色	焼土粒子中最量、炭化材少量。ロームブロック微量	5 黒褐色	ローム粒子、焼土粒子少量、炭化物微量
2 灰褐色	ローム粒子、炭化物・粘土ブロック少量、焼土粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化物、鹿沼バニス少量
3 黑褐色	焼土粒子、炭化物少量。ローム粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子、炭化物少量
4 黑褐色	ローム粒子、炭化物少量、焼土ブロック微量	8 灰褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子・礫微量

遺物出土状況 土師器片118点、磨石2点（1点未掲載）、礫5点のはか、攪乱等により混入したとみられる繩文土器片97点、須恵器片1点が出土している。遺物は、中央部から西部にかけてと北コーナー部から集中して出土している。しかも完形の遺物が多い。1・3・5の土師器杯は中央部床面から、10・11の土師器小形甕と13・14の土師器瓶は、北コーナー部の床面から出土している。なお、現存率は高いが未掲載の土師器の杯2点ある。

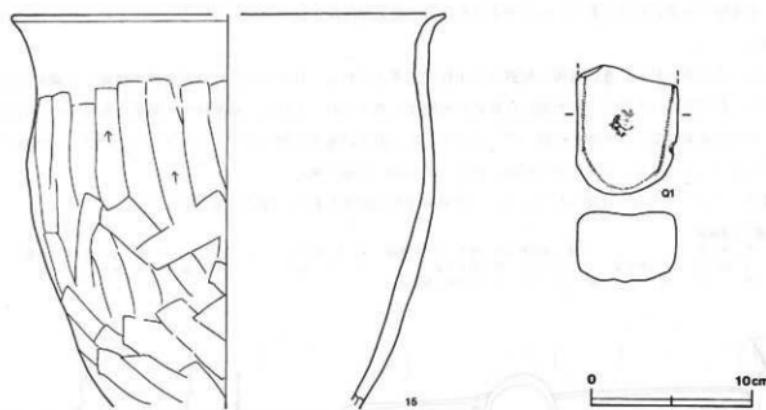
所見 炭化材や焼土粒子が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形の遺物が多いことや多量の炭化材が貼り付いていることから、持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第30図 第1号住居跡実測図



第31図 第1号住居跡出土遺物実測図（1）



第32図 第1号住居跡出土遺物実測図（2）

第1号住居跡出土遺物観察表（第31・32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
1	土 器	环	12.3	4.5	-	長石・金雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ	中央部床面	100% PL11
2	土 器	环	12.8	4.9	-	長石・金雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ 内・外面黒色處理	北西部床面	95% PL11
3	土 器	环	12.8	4.6	-	長石・金雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ	中央部床面	90% PL11
4	土 器	环	12.4	4.4	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ	中央部床面	90% PL11
5	土 器	环	13.7	4.5	-	石英・長石・金雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ	中央部床面	90% PL11
6	土 器	环	13.5	4	-	長石・金雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ 内・外面黒色處理	中央部床面	80%
7	土 器	环	14.5	3.7	-	長石・金雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ	中央部床面	70%
8	土 器	环	12.9	4.3	-	長石・金雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ 内・外面黒色處理	中央部床面	60%
9	土 器	环	17.6	13.7	9.8	石英多・長石多・雲母	褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ナダ	北コーナー部床面	95% PL11
10	土 器	小形器	8.8	12.6	6.1	石英多・長石多・雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ナダ	北コーナー部床面	100% PL11
11	土 器	小形器	11.1	17	6.2	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ナダ	北コーナー部床面	100% PL11
12	土 器	器	[22.5]	(9.0)	-	石英多・長石多・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面磨きナダ	北コーナー部床面	20%
13	土 器	器	19.3	13	5.1	石英多・長石多・雲母	にぶい褐色	普通	口縫部指標による押任 孔部ヘラ削り	北コーナー部床面	100% PL12
14	土 器	器	24.4	27.1	9.4	石英・長石	にぶい赤褐色	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナダ 孔部ヘラ削り	北コーナー部床面	90% PL11
15	土 器	器	[26.5]	(34.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナダ	中央部床面	35%

番号	器種	其さ (往)	幅 (孔往)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	磨 石	(8.0)	-	6.2	(4.3)	(306.6)	砂岩	自然石を素材とし、1面に磨り直膨	北西部床面

第2号住居跡（第33・34図）

位置 調査E区の南西部、B5d4区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係 北西壁の中央部を第46号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.38m、短軸5.16mの方形である。壁は高さ4~10cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-20°-Wである。

床 ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。床全面に貼り付くように炭化材が確認されている。

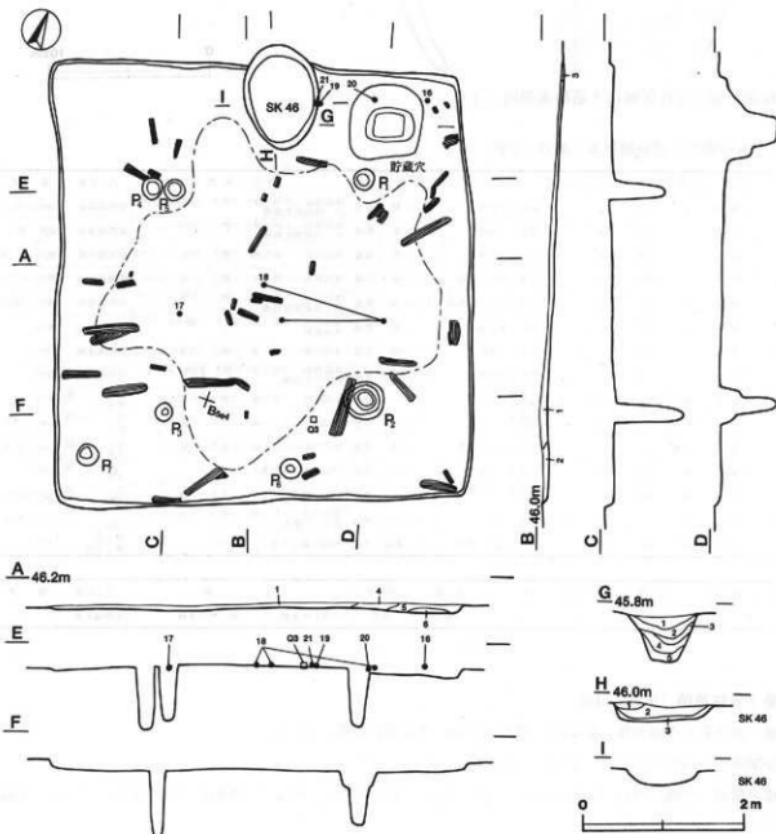
竈 北西壁中央部に付設されていたと想定されるが、第46号土坑に掘り込まれているため、規模や形状は不明である。

ピット 7か所。P 1～5は規模と配置から主柱穴と考えられる。P 4・5はほぼ同規模で隣接して確認されている。新旧関係は不明で、同時期に存在した可能性も考えられ、主柱穴・補助柱穴の関係であるかもしれない。P 6は南東壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 7の性格は不明である。深さはP 1～5が66～85cm、P 6・7が18～20cmである。

貯蔵穴 北コーナー部に付設されている。一边90cmほどの隅丸方形で、深さ54cmである。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量	4 黄褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
2 黒褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量	5 に赤い黄色	ローム粒子中量、炭化物・鹿沼バミス少量
3 黄褐色	鹿沼バミス中量、ロームブロック・炭化物少量		



第33図 第2号住居跡、第46号土坑実測図

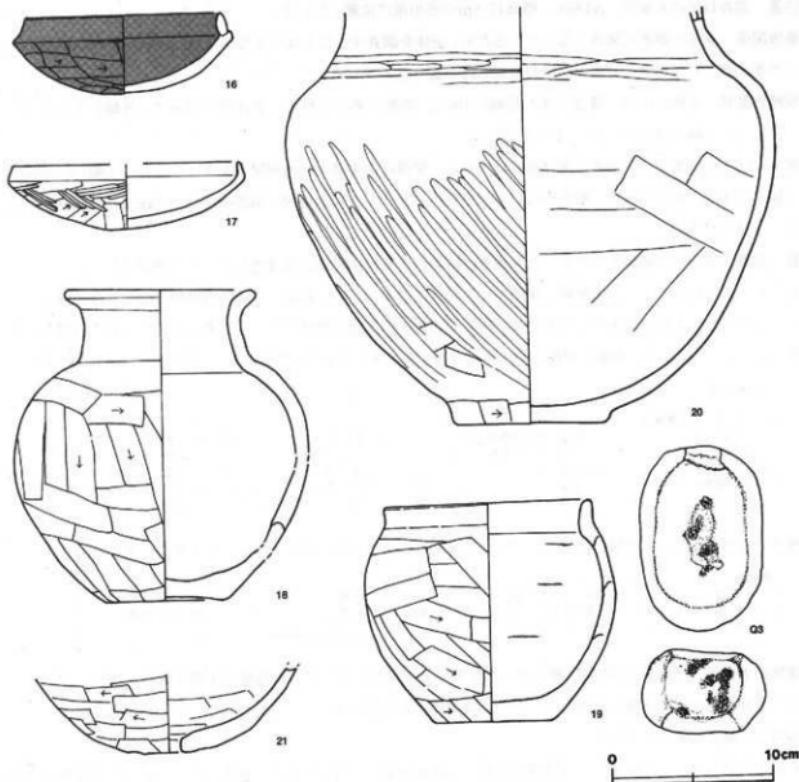
覆土 6層からなる。各層にロームブロックや炭化粒子が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化材・鹿沼バミス少量	4 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	5 黒褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量、炭化物微量
3 黒褐色	ロームブロック微量	6 黒褐色	鹿沼バミス中量、ロームブロック少量、炭化物微量
第46号土器土層解説			
1 褐色	鹿沼バミス中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量	3 明褐色	ロームブロック少量
2 黑褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量		

遺物出土状況 土師器片167点、磨石1点、礫1点、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片23点が出土している。遺物は中央部から北コーナー部にかけて出土している。完形に近い遺物が多い。16の土師器壺、19の土師器小形甕と20の土師器甕は北コーナー部から、18の土師器壺は中央部から出土している。なお、現存率は高いが未掲載の土師器の杯2点がある。

所見 炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物が多いことや多量の炭化材が貼り付いていることから、持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第34図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	素種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
16	土師器	壺	12.2	4.8	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外側へラ削り 内・外側黒色処理	北コーナー部 覆土中層	90% PL12
17	土師器	壺	[142]	4	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外側へラ削り後へラ磨き 内面ナデ	中央部床面	50%
18	土師器	壺	11.2	19.2	7.3	石英・長石・金雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外側へラ削り 内面ナデ	中央部床面	75% PL12
19	土師器	小形壺	12.6	13.5	7.3	石英多・長石多・ 雲母	にぶい褐色	普通	体部外側へラ削り 内面ナデ	北コーナー部 床面	95% PL12
20	土師器	壺	-	(25.5)	9.4	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外側へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ	床面	30%
21	土師器	瓶	-	(49)	3	石英多・長石多	にぶい褐色	普通	体部外側へラ削り 内面ナデ	北コーナー部 床面	20%

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	磨石	11.3	7.7	5.1	568.7	安山岩	自然石を素材とし、4面に磨きの痕跡	南東部床面	

第3号住居跡(第35・36図)

位置 調査D区の北東部, A4j9区。標高45.8mの平坦部に位置している。

重複関係 東部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。全体が第4号住居跡を、北西部が第5号住居跡を、南部が第22号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.05m、確認できた短軸5.3mで、方形と考えられる。壁は高さ24cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-35°-Eである。

床 ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。壁溝は北東壁下と南西壁下を巡っている。上幅14~20cm、下幅6~10cm、深さ7cmで、断面形はU字状である。P3・4の北東側に幅26cm、長さ60cmで、8cmほどの高まりが見られる。

塗 調査区域内では確認できなかった。調査区域外の北東壁中央部に付設されていたと想定される。

ピット 5か所。P1・2は配置と規模から主柱穴と考えられる。P3・4は南北壁際の中央部に位置していることから、土手状の高まりと合わせて、何らかの出入口施設を形成していたと考えられる。P5は壁外に位置しているが、壁からの距離と規模から本跡に伴うものと考えられる。深さはP1が74cm、P2が66cm、P3・5が30cm、P4が52cmである。

P1・2・3・5土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	6 黄褐色	ローム粒子多量、塵泥バミス少量
2 紫褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	7 にぶい黄褐色	ロームブロック中量、塵泥バミス少量
3 明黄褐色	ロームブロック中量	8 黑褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4 にぶい黄褐色	ロームブロック中量	9 黄褐色	ローム粒子多量、砂少量
5 黑褐色	ロームブロック中量	10 黑褐色	ロームブロック少量

覆土 5層からなる。各層にロームブロックや炭化物が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

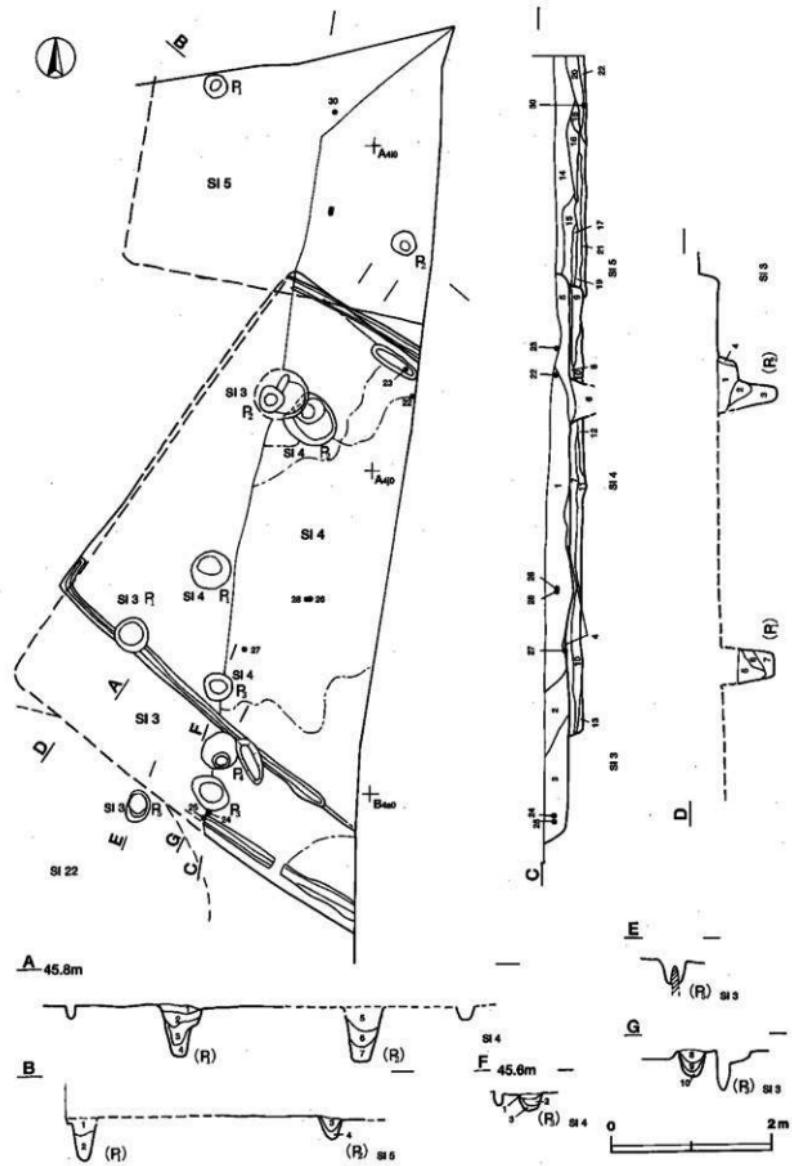
土層解説

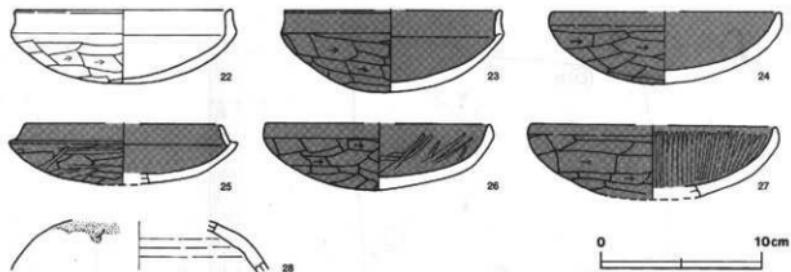
1 黒褐色	ロームブロック中量、炭化物少量	4 黑褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2 紫褐色	ロームブロック中量、塵泥バミス少量、撲土粒子微量	5 黑褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3 黑褐色	ロームブロック中量		

遺物出土状況 土師器片160点、礫2点、擾乱等により混入したとみられる繩文土器片26点が出土している。

26の土師器は中央部覆土中層から、27の土師器は中央部床面から出土している。なお、現存率は高いが未掲載の土師器の杯が6点ある。

所見 時期は、出土土器等から古墳時代後期(6世紀後半)と考えられる。重複している第4号住居跡との時期差はほとんどないと思われる。





第36図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	洗成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土器	环	133	45	-	全表面	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナダ	北東部 埴上層	95%
23	土器	环	[134]	50	-	全表面	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナダ 内・外面黒色 修理	北東部 埴上層	60%
24	土器	环	[142]	44	-	黄母	にぶい赤褐色	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナダ 内・外面黒色 修理	北東部 埴上層	60%
25	土器	环	[122] (37)	-	全表面	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラナダ 内・外面黒色 修理	北東部 埴上層	50%	
26	土器	环	[140]	41	-	黄母	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り後ナダ 内面ナダ後ヘラ擦 3 内・外面黒色修理	中央部 埴上層	45%
27	土器	环	[152] (44)	-	長石・雲母	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラナダ 内面ヘラ擦き 4 内・外面黒色修理	中央部 埴上層	40%	
28	須恵器	環	-	(33)	-	長石	黄赤	普通	体部ロクロナダ 外面自然釉付着	中央部 埴中層	5%

第4号住居跡(第35・37図)

位置 調査D区の北東部、A4j9区。標高45.8mの平坦部に位置している。

重複関係 東部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。北西部は第5号住居跡を掘り込み、大部分を第3号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.2m、確認できた短軸4.64mで、方形と考えられる。壁は高さ18cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-36°-Eである。

床 ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。北西壁は削平されているが、壁溝は全周していると考えられる。上幅10~18cm、下幅4~8cm、深さ18cmで、断面形はU字状である。

竈 調査区域内では確認できなかった。調査区域外の北東壁中央部に付設されていたと想定される。

ピット 3か所。P1・2は配置と規模から主柱穴と考えられる。P3は南西壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。深さはP1が68cm、P2が60cm、P3が22cmである。

P1・2 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 明黄褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 4 明黄褐色 ローム粒子多量

P3 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 2 白褐色 ロームブロック中量

- 5 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量
- 6 黄褐色 ロームブロック多量
- 7 明黄褐色 ロームブロック多量

覆土

- 3 明黄褐色 ロームブロック多量
- 10 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子
- 11 黄褐色 ロームブロック多量
- 12 にぶい黄褐色 ローム粒子多量
- 13 黑褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミシ少量

覆土 8層からなる。ロームブロックを含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 6 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 7 白褐色 ロームブロック多量、炭化物微量
- 8 にぶい黄褐色 ロームブロック・砂中量、炭化物微量
- 9 黑褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片15点のほか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片4点が出土している。

所見 時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。重複している第3号住居跡との時期差はほとんどないと思われる。

第4号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	土師器	环	[144]	(3.8)	-	雲母	にぶい橙	普通	体部外へラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 内・外面墨色処理	覆土中	10%



第37図 第4号住居跡出土遺物
実測図

第5号住居跡（第35・38図）

位置 調査D区の北東部、A4i9区。標高45.8mの平坦部に位置している。

重複関係 東部と北部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。南部を第3・4号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長軸3.82m、短軸3.56mの方形と考えられる。壁は高さ5cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向は[N-10°-E]と考えられる。

床 ほぼ平坦である。硬化面は確認できなかった。

竈 調査区域内では確認できなかった。

ピット 2か所。P1は配置と規模から主柱穴と考えられる。P2は南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。深さはP1が52cm、P2が25cmである。

P1・2 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量
2 白褐色	ロームブロック・炭化物少量

3 黒褐色	ロームブロック少量
4 黄褐色	ローム粒子多量

覆土 9層からなる。各層にロームブロックや炭化物が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

14 黒褐色	ロームブロック・砂少量、炭化物微量
15 白褐色	ロームブロック・炭化物微量
16 白褐色	炭化物少量、ロームブロック微量
17 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量
18 白褐色	炭化物少量、ロームブロック微量

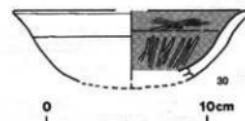
19 黒褐色	ロームブロック少量
20 黒褐色	ロームブロック微量
21 白い黄褐色	ロームブロック中量
22 白褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片49点、砾1点のほか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片3点が出土している。30の土師器環は中央部床面から出土している。

所見 時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀前半）と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
30	土師器	环	[148]	(43)	-	長石・金雲母	にぶい橙	普通	体部外へラ削り 内面ヘラ磨き 内面赤彩	中央部床面	10%

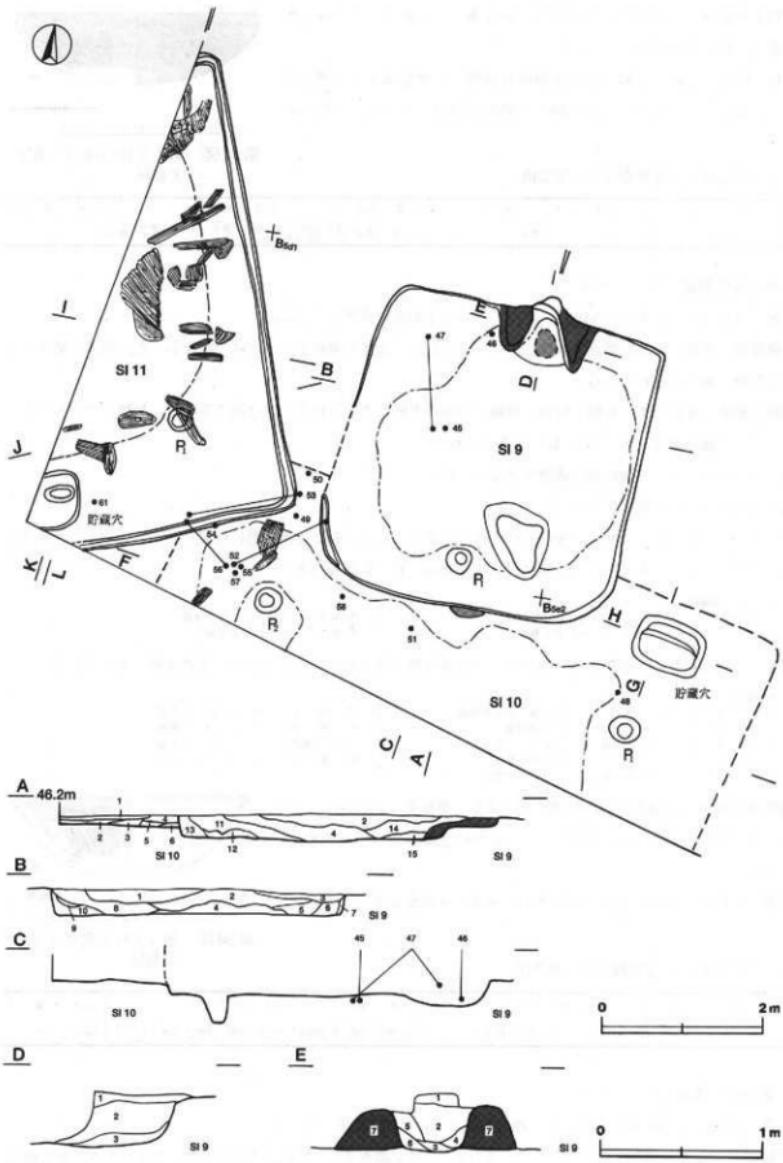


第38図 第5号住居跡出土遺物
実測図

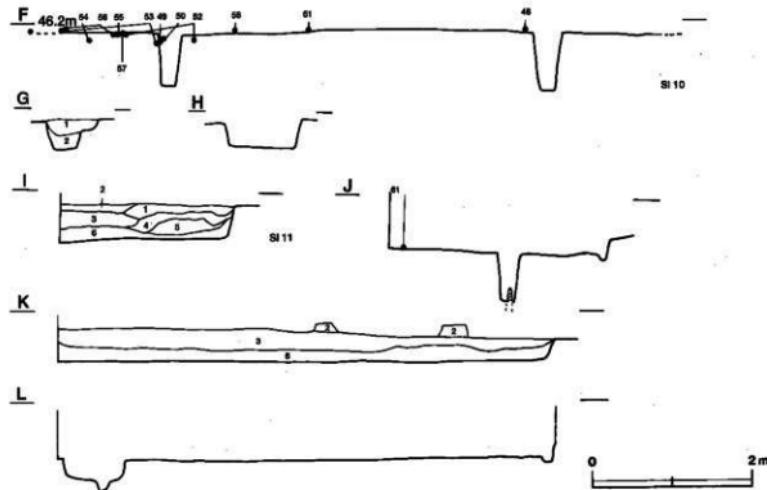
第10号住居跡（第39～42図）

位置 調査E区の南西部、B5e1区。標高46.0mの平坦部に位置している。

重複関係 南部が調査区域外になっているため、全体を調査することはできなかった。北部を第9号住居跡に、西北部を第11号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。



第39図 第9・10・11号住居跡実測図



第40図 第10・11号住居跡実測図

規模と形状 壁は削平されているが、推定長軸7.0m、確認できた短軸2.8mで、方形あるいは長方形と考えられる。主軸方向はN-18°-Eと推定される。

床 ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。床面に貼り付くように炭化材が確認されている。

竈 北部を第9号住居跡に掘り込まれているが、北東壁際の中央部に焼土が確認されることから、ここに付設されていたと想定される。規模や形状は不明である。

ピット 2か所。P1・2は配置と規模から主柱穴と考えられる。深さはP1が72cm、P2が65cmである。

貯蔵穴 北東部に付設されている。長軸91cm、短軸62cmの長方形で、深さは44cmである。

住居跡解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

2 灰黄褐色 ロームブロック少量

覆土 6層からなる。各層がブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土器解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

4 黑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

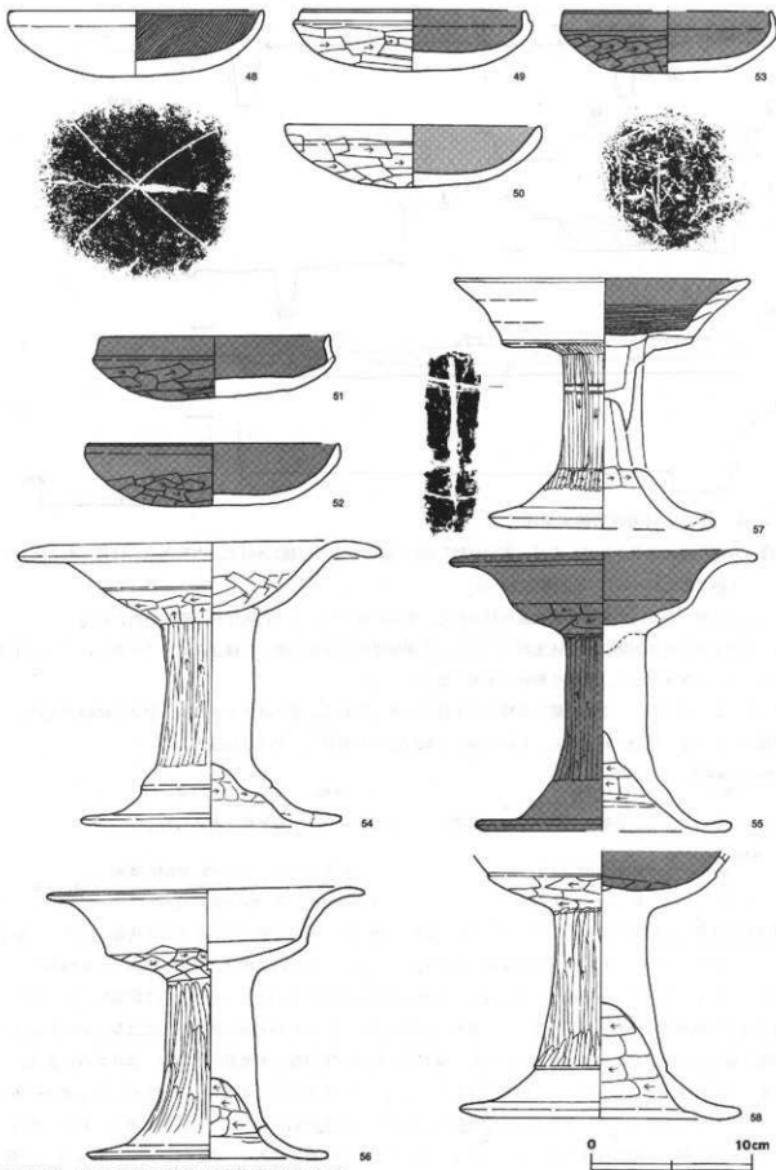
5 灰黄褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量

3 灰褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

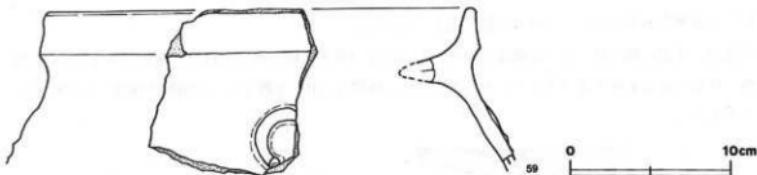
6 灰黄褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片234点（ほとんどが坏・高坏）、礫5点、花崗岩製の凹石1点（未掲載）のはか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片48点が出土している。これらの遺物は、完形品が多く、北西部からまとまって出土している。未掲載のものを含めて7点の大形の高坏が出土している。49の土師器杯、54～57の土師器高坏が北西部の床面からまとまって、重なり合うように、しかも55～56の高坏の上には長さ30～40cmほどの礫を載せるようにして出土している。なお、現存率は高いが未掲載の土師器の坏6点、高坏2点がある。

所見 炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物が多いことから、持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。また、ほぼ完形の大形の土師器高坏がまとめて出土していることが特徴的である。時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第41図 第10号住居跡出土遺物実測図（1）



第42図 第10号住居跡出土遺物実測図(2)

第10号住居跡出土遺物観察表(第41・42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	环	15.6	4.0	-	灰石・雲母	灰褐色	普通	伝統外側ナゲ 内面へラ巻き 内面黒色処理 底部に「」の字記号	北東部床面	100% PL12
49	土師器	环	14.0	3.8	-	石英多・長石多・ 赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	内面内・外側ナゲ 内面黒色処理 外面被熱 強	北西部床面	100% PL13
50	土師器	环	16.0	3.8	-	雲母	にぶい赤褐色	普通	伝統外側へラ削りナゲ 内面ナゲ 内面赤褐色	北西部床面	95% PL13
51	土師器	环	14.1	3.8	-	長石・雲母	灰褐色	普通	伝統外側へラ削り 内面ナゲ 内・外側黒色	北部床面	70% PL13
52	土師器	环	15.7	3.9	-	石英・長石・雲母	灰褐色	普通	伝統外側へラ削り 内面ナゲ 内・外側黒色	北西部床面	55%
53	土師器	环	[12.8]	3.8	-	灰石・雲母	灰褐色	普通	伝統外側へラ削り 内面ナゲ 内・外側黒色 強	北西部床面	60%
54	土師器	高环	19.0	17.7	14.0	灰石・金芸母多	にぶい赤褐色	普通	伝統内・外側被ナゲ 下旋外側へラ削り 内面ナゲ 内面へラ削り 脚部外側へラ削り後へラ巻き 内面 へラ削り 地面内・外側被ナゲ	北西部床面	90% PL12
55	土師器	高环	18.1	17.3	[15.0]	石英・長石・雲母	明褐色	普通	伝統内・外側被ナゲ 下旋外側へラ削り 内面ナゲ 内面へラ削り 脚部外側へラ削り後へラ巻き 内面 へラ削り 地面内・外側被ナゲ	北西部床面	80% PL13
56	土師器	高环	19.8	16.7	15.1	石英・長石・雲母・ 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	伝統内・外側被ナゲ 下旋外側へラ削り 内面ナゲ 内面へラ削り 脚部外側へラ削り	北西部床面	60% PL13
57	土師器	高环	18.3	15.4	12.5	長石	褐色	普通	伝統外側被ナゲ 内面へラ巻き 脚部外側へラ削り 内面へラ削り 地面内・外側被ナゲ	北西部床面	65% PL13
58	土師器	高环	-	(16.5)	15.0	石英・長石・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	伝統外側被ナゲ 下旋へラ巻き 内面へラナゲ 脚部 外側被ナゲ	北西部床面	30% PL13
59	縄文土器	壺	[26.5]	(10.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	無文 内・外側へラ巻き	壁土中(流れ 込み)	5%

第11号住居跡(第39・40・43図)

位置 調査E区の南西部、B4d0区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係 西部が調査区域外になっているため、全体を調査することはできなかった。東部が第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.74m、確認できた短軸3.34mで、方形あるいは長方形と考えられる。壁は高さ20~38cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-21°-Wである。

床 ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。床面に貼り付くように多量の炭化材が確認されている。壁溝は全周している。上幅10~14cm、下幅6~10cm、深さ8cmで、断面形はU字状である。

竈 調査区域内では確認できなかった。

ピット 1か所。P1は配置と規模から主柱穴と考えられる。深さは60cmである。

貯蔵穴 南東壁際中央部に付設されている。確認できた長軸70cm、短軸72cmで、方形あるいは長方形と考えられる。深さは26cmである。

覆土 6層からなる。最下層の6層が人為的に埋め戻された後に、自然に堆積したものと考えられる。

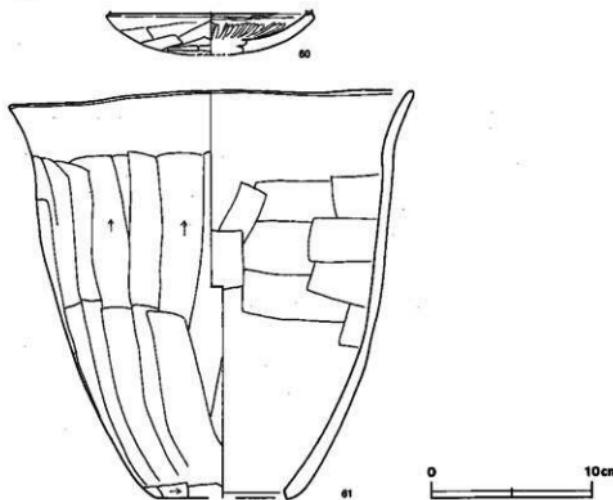
土層解説

1	にぶい黄褐色	砂粒中量	4	灰 黄褐色	砂粒中量
2	暗褐色	ローム粒子少量	5	暗褐色	ロームブロック・炭化物少量
3	暗褐色	ローム粒子少量	6	黒褐色	炭化物多量

遺物出土状況 土師器片28点のほか、擾乱等により混入したとみられる縄文土器片14点が出土している。61の

土器器櫃は南東壁際の床面からつぶれた状態で出土している。

所見 炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。遺物が少ないので、住居廃絶時に使用可能な遺物を運び出したためであろうか。時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第43図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	地 土	色 調	焼成	手 法の特 徴	出土位置	備 考
60	土 器 器	環	-	(27)	-	石英・長石・赤色粒子	褐	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラ削き	覆土中	20%
61	土 器 器	瓶	25.4	25	[8.0]	石英・長石・紫母	にぼい橙	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ削き 内面ヘラナナ	南東壁際床面	70% PL13

第13号住居跡（第44～46図）

位置 調査D区の中央部、B4a6区。標高45.5mの平坦部に位置している。

重複関係 北コーナー一部が第14号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.05m、短軸4.02mの方形である。壁は高さ14～42cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-27°-Wである。

床 ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。南東壁は削平されているが、壁溝は全周していると考えられる。上幅12～20cm、下幅6～10cm、深さ4～10cmで、断面形はU字状である。P5の北西側に幅34cmで、5cmほどの馬蹄形状の高まりが見られる。この高まりの表面も硬化している。床面に貼り付くように炭化材が確認されている。

竈 北西壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで128cm、袖部幅86cmで、壁外への掘り込みは46cmほどである。焚口部は厚さ12～20cmの角柱状の花崗岩を両側に立て、その上に長さ60cmの角柱状の花崗岩を乗せ構築している。袖部は床面と同じ高さの地山面に少量の炭化粒子と多量の砂の混じった粘土で構築されてい

る。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用して、火熱を受け、赤変硬化している。煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土少量	4 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
2 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	5 褐灰色	砂質粘土中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3 灰褐色	砂質粘土中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6 褐灰色	砂質粘土少量、炭化粒子少量

ピット 9か所。P 1～4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P 5は南東壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6～8の性格は不明である。P 9は竈の前方部に位置していることから、竈に関わるピットとも考えられる。深さはP 1が36cm、P 2・3が45cm前後、P 4が28cm、P 5が52cm、P 6が25cm、P 7が52cm、P 8・9が15cmである。

貯蔵穴 東コーナー部に付設されている。長径62cm、短径58cmの円形で、深さ42cmである。

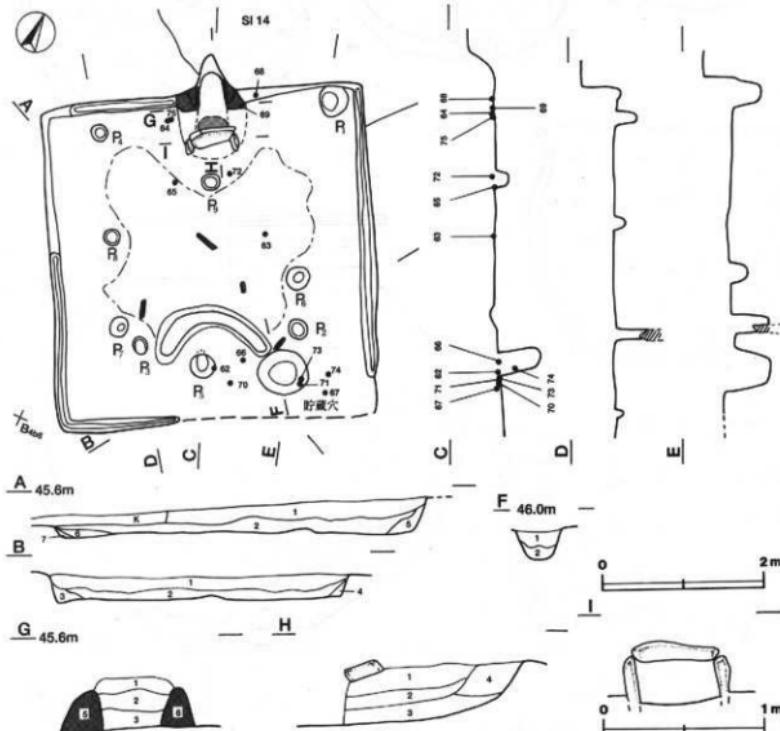
貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	砂中量、ローム粒子少量	2 黒褐色	砂多量、砂中量
-------	-------------	-------	---------

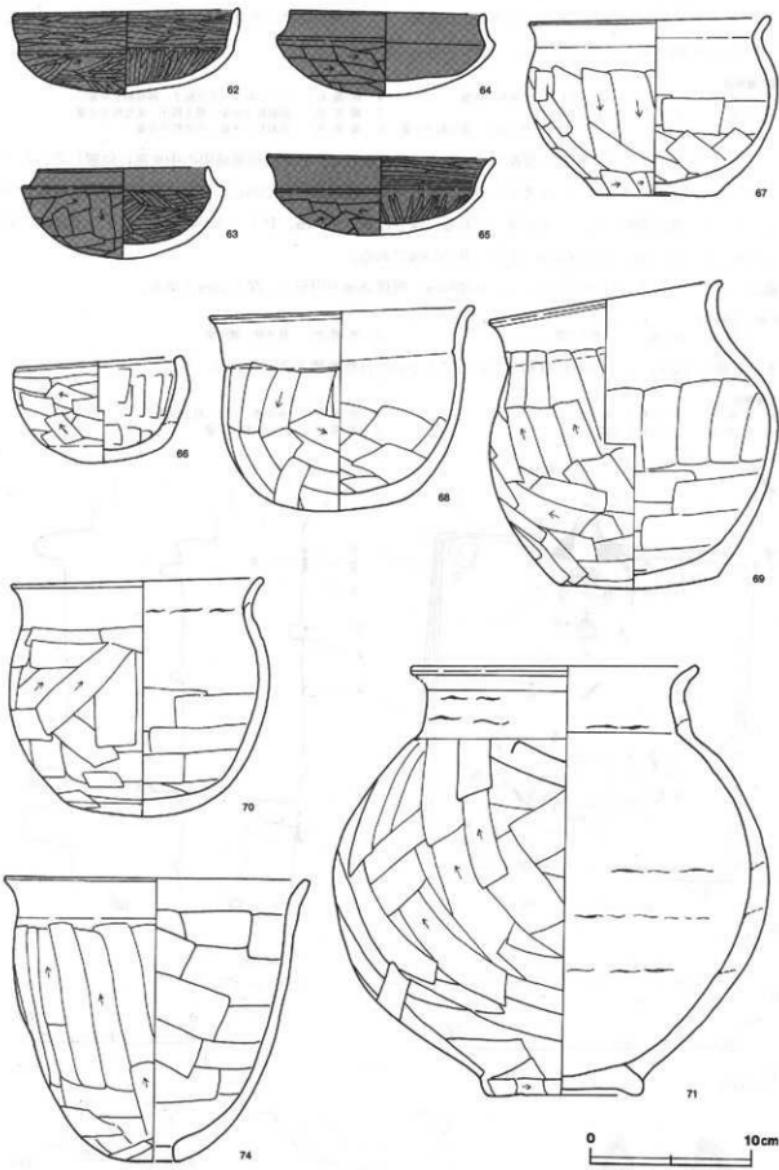
覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

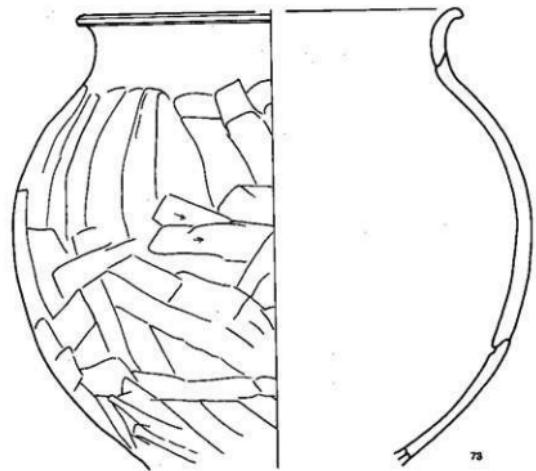
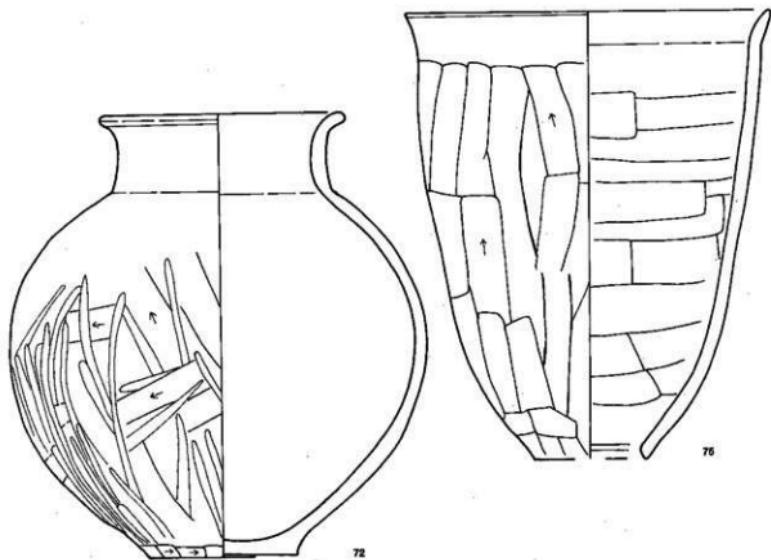
1 黒褐色	ローム粒子・砂少量	3 黒褐色	砂中量、ローム粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子少量	4 黒褐色	ローム粒子少量



第44図 第13号住居跡実測図



第45図 第13号住居跡出土遺物実測図（1）



第46図 第13号住居跡出土遺物実測図（2）

- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化材少量
 6 黒褐色 炭化材中量、ローム粒子少量
 7 褐褐色 砂中量、ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片234点、礫12点、花崗岩製の凹石1点（未掲載）のほか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片19点が出土している。62の土師器壺と70の土師器甕は南東中央部の床面から、67の土師器鉢と74の土師器甕は南東部の床面から、72の土師器甕は竈前方部の床面から出土している。なお、現存率は高いが未掲載の土師器の壺1点がある。

所見 本跡は、竈の筒口部を角柱状の花崗岩で構築している住居跡で、第20号住居跡と同様な竈の構造である。炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物が多いことから、持ち出すことのできなかった突發的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表（第45・46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
62	土師器	壺	14.2	5.2	-	石英・長石・雲母	黒	良好	口縁部内・外面へラフ削り 体部外面へラフ削り 壁面へラフ削り 内面へラフ削き 内・外面黒色處理	南東中央部床面	100% PL14
63	土師器	壺	10.5	5.6	-	石英・雲母	にぶい緑	普通	体部外面へラフ削り 内面へラフ削き 内・外面黒色處理	中央部床面	95% PL14
64	土師器	壺	12.0	5.1	-	長石・雲母	にぶい緑	普通	体部外面へラフ削り 内面ナデ 内・外面黒色處理	壁左側床面	80%
65	土師器	壺	16.5	12.7	-	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	口縁部外面へラフ削り 体部外面へラフ削り 内面へラフ削き 内・外面黒色處理	南東部床面	80%
66	土師器	瓶	10.3	6.2	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい緑	普通	口縁部・体部外面へラフ削り 内面へラフ削き	南東部床面	100% PL14
67	土師器	鉢	15.0	11.0	7.4	石英・長石・雲母	緑	普通	体部外面へラフ削り 内面へラフ削き	南東部床面	100% PL14
68	土師器	甕	16.5	12.7	9.2	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	体部外面へラフ削り 内面へラフ削き	壁右側床面	95% PL14
69	土師器	甕	14.5	18.0	10.0	石英・長石・雲母	緑	普通	体部外面へラフ削り 内面へラフ削き	壁右側床面	100% PL14
70	土師器	甕	15.6	14.5	-	長石・雲母	緑	普通	体部外面へラナダ・ヘラ削り 内面へラナダ	南東中央部床面	90% PL14
71	土師器	甕	17.6	26.7	9.6	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	体部外面へラフ削り 内面へラナダ	南東部床面	95% PL14
72	土師器	甕	14.6	27.5	9.2	長石・赤色粒子	緑	普通	体部外面へラフ削り後へラフ削き 下位へラフ削り 内面ナデ	南東部床面	90% PL14
73	土師器	甕	[28.1]	[28.3]	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外面へラフ削り 内面ナデ	南東部床面	45%
74	土師器	甕	18.9	17.3	3.1	石英・長石・小颗粒・赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外面へラフ削り 内面へラナダ 孔部へラフ削り	南東部床面	95% PL15
75	土師器	甕	23.0	27.8	[7.0]	長石	にぶい緑	普通	体部外面へラフ削り 内面へラナダ 孔部へラフ削り	壁左側床面	75%

第15号住居跡（第47・48図）

位置 調査E区の西部、B5b2区。標高46.0mの平坦部に位置している。

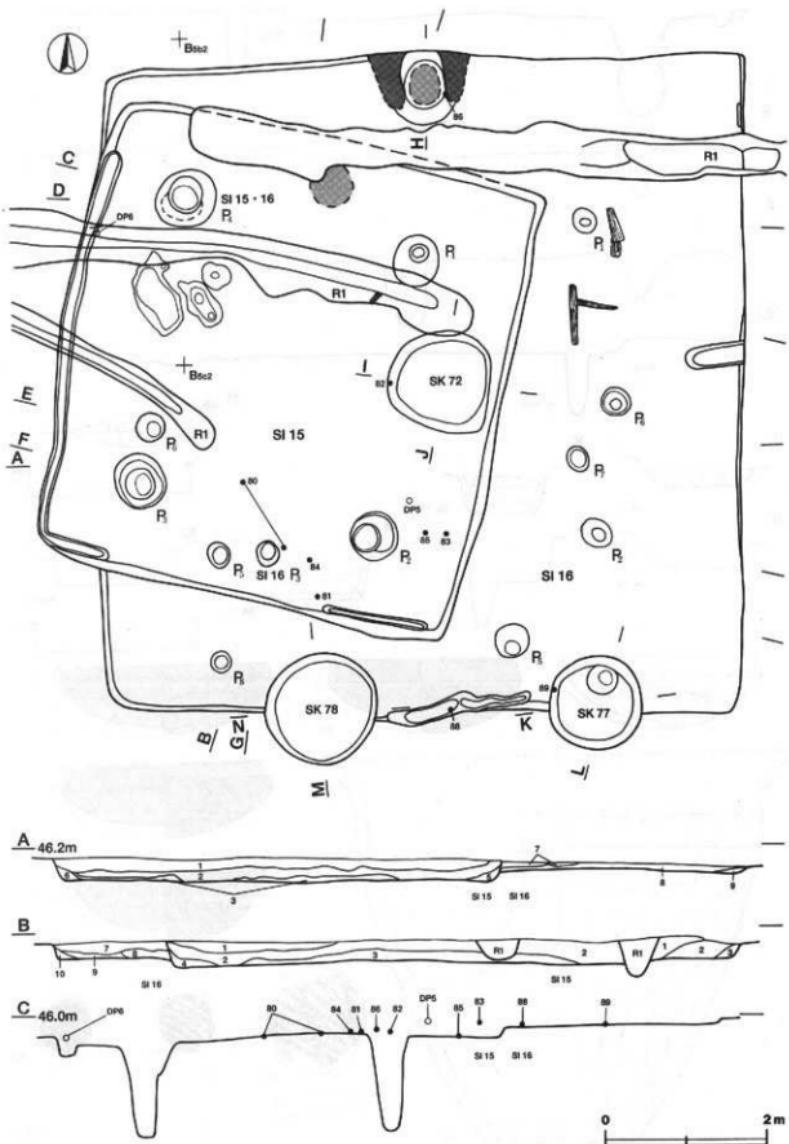
重複関係 第16号住居跡を掘り込み、北壁中央部付近を第1号流路跡に、東部を第72号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.80m、短軸5.60mの方形である。壁は高さ28~35cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-18°-Eである。

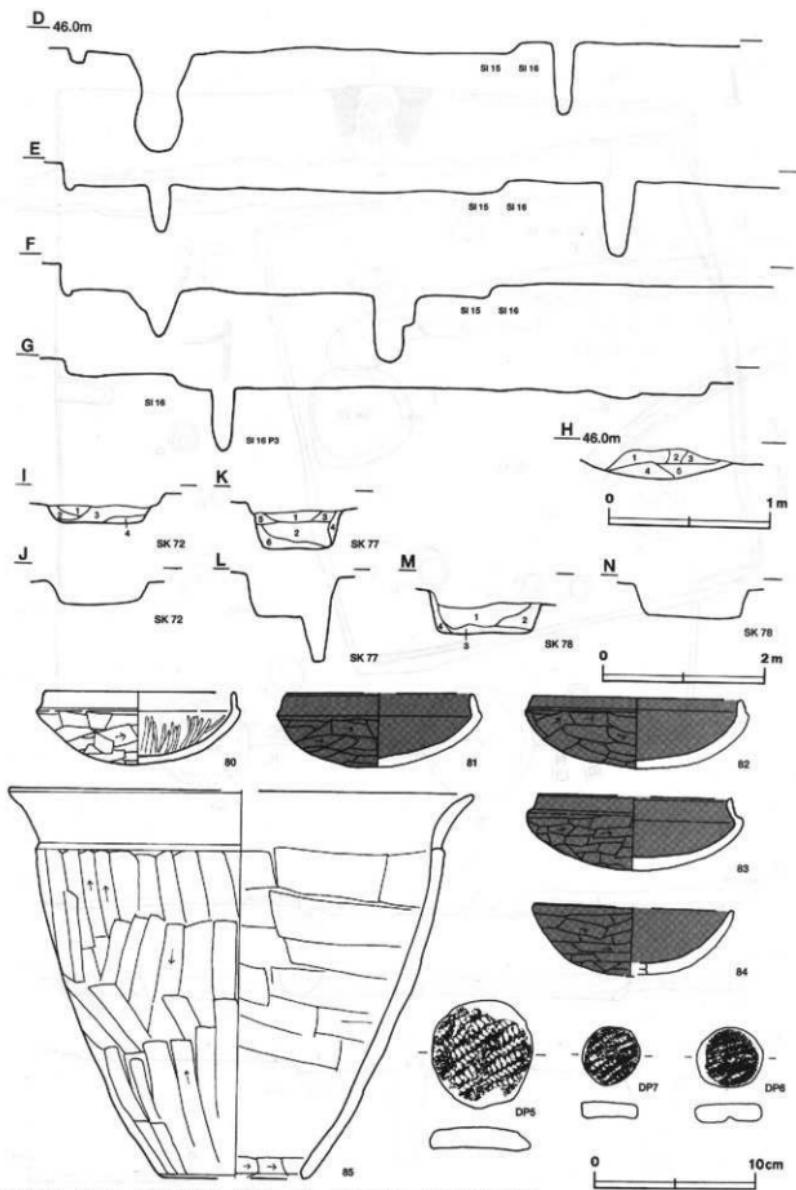
床 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。北西壁下と南西壁下を壁溝が巡っている。上幅10~20cm、下幅4~15cm、深さ5~12cmで、断面形はV状である。

竈 北西壁中央部付近が流路跡に掘り込まれているが、ここに火床面と思われる焼土の痕跡が見られることから、ここに付設されていたと想定される。規模や形状は不明である。

ピット 6か所。P1~4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P4は第16号住居跡で使用していたピットの再利用と考えられる。P5は南西壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は主柱穴に隣接する位置で確認されていることから、補助柱穴と考えられる。深さはP1が120cm、P2が78cm、P3が58cm、P4が116cm、P5が36cm、P6が57cmである。



第47図 第15・16号住居跡、第72・77・78号土坑、第1号流路跡実測図



第48図 第15・16号住居跡、第72・77・78号土坑・出土遺物実測図

覆土 8層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 砂 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	4 砂 色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 黒 砂 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化材少量	5 砂 色	ローム粒子・炭化粒子少量
3 砂 砂 色	ロームブロック・炭化粒子少量	6 黒 砂 色	ローム粒子・炭化材少量

遺物出土状況 土師器片1372点、礫115点、花崗岩製の磨石1点（未掲載）、土器片円盤3点のほか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片91点、平安時代の須恵器片123点（第1号流路跡からの流れ込みと考えられる）、陶器片1点が出土している。80の土師器は南部の床面から、81と84の土師器は86の土師器は、南東部の床面から出土している。礫は床面全体から若干浮いて散在したような状態で出土しているので、屋根材の押さえ等にでも利用したものが落下した可能性が考えられる。なお、現存率は高いが未掲載の土師器の87点がある。

所見 時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	地 土	色 調	地成	手 法の特徴	出土位置	備 考
80	土 師 器	环	11.6	45	-	石英・長石・雲母	灰白	普通	体外外側へ削り 内面へ削き	南部床面	60%
81	土 師 器	环	[11.6]	46	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体外外側へ削り 内面ナダ 内・外黒色	南部床面	50%
82	土 師 器	环	12.9	44	-	石英・長石・雲母	明褐色	普通	体外外側へ削り 内面ナダ 内・外黒色	中央部床面	50%
83	土 師 器	环	[11.9]	45	-	長石・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	体外外側へ削り 内面ナダ 内・外黒色	東北部 壁上中層	30%
84	土 師 器	环	[12.4]	(42)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体外外側へ削り 内面ナダ 内・外黒色	南部床面	20%
85	土 師 器	瓶	[28.0]	237	[86]	石英・長石・雲母・赤色粒子	棕	普通	体外外側へ削り 内面ナダ 礼壇へフ	南部床面	30%

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	時 代	出土位置	備 考
DP5	上器片円盤	6.7	6.3	1.3	57.9	土	表面單脚R.Lの縦文 側面研磨	東北中(流れ込み)	PL19
DP6	土器片円盤	3.7	4.1	1.1	17.9	土	表面單脚R.Lの縦文 側面研磨	東北中(流れ込み)	PL19
DP7	土器片円盤	3.1	3.6	1.0	14.1	土	表面單脚R.Lの縦文 側面研磨	東北中(流れ込み)	PL19

第16号住居跡（第47~49図）

位置 調査E区の西部、B5c2区。標高46.0mの平坦部に位置している。

重複関係 西側を第15号住居跡と第72号土坑に、南壁を第77・78号土坑に、北部を第1号流路跡それぞれ掘り込まれている。

規模と形状 東壁と東側の北壁と南壁の一部は削平されているが、長軸8.2m、短軸8.00mの方形である。壁は高さ20cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-2°-Eである。

床 平坦である。硬化面は確認されなかった。南壁下の一部に壁溝が巡っている。上幅20cm、下幅14cm、深さ7cmで、断面形はV字である。幅30cm、深さ5cmほどで、中央に向かって東壁から1条の溝状の落ち込みが見られる。床面に貼り付くように炭化材や焼土が確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅125cmで、壁外への掘り込みはほとんど見られない。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受け、赤変硬化している。煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。4・5層は天井部の崩落土層であろう。

竈土層解説

1 砂 色	ローム粒子中量、焼土粒子・砂質粘土少量	4 砂 灰 色	砂質粘土多量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
2 黒 砂 色	ローム粒子・砂質粘土少量	5 砂 灰 色	砂質粘土多量、ローム粒子・焼土粒子少量
3 にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量		

ピット 8か所。P 1～4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P 4は本住居の施設後に第15号住居跡の主柱穴に利用されたものと考えられる。P 5は南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 7は主柱穴に隣接する位置で確認されていることから、補助柱穴と考えられる。P 6・8の性格は不明である。深さはP 1・2が90cm前後で、P 3が78cm、P 4が116cm、P 5が30cm、P 6～8が38～46cmである。

覆土 4層からなる。各層にロームブロック、焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

7 黒 色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量	9 細 赤 褐 色	焼土粒子中量、炭化粒子少量
8 前 赤 褐 色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量	10 后 褐 色	ロームブロック少量

第72号土坑土層解説

1 前 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	3 前 褐 色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
2 前 褐 色	ローム粒子少量	4 褐 色	ローム粒子・鹿沼バミス中量

第77号土坑土層解説

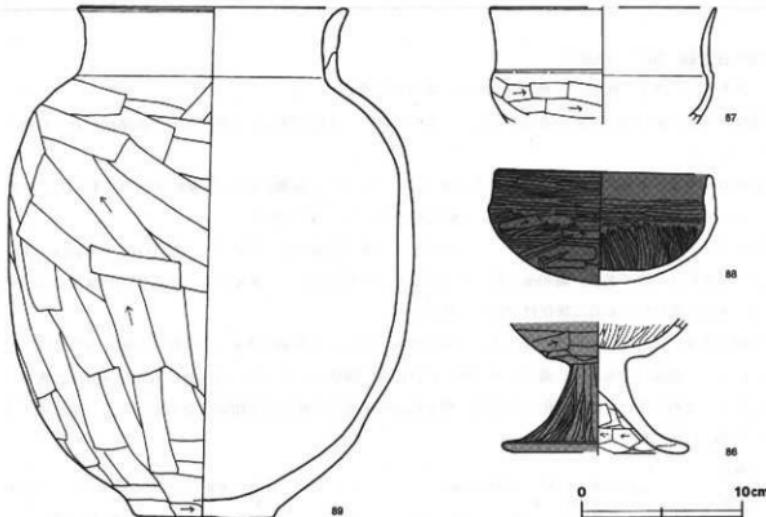
1 前 褐 色	ロームブロック少量	4 褐 色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
2 前 褐 色	ロームブロック少量、砂・礫微量	5 褐 色	ロームブロック少量
3 前 褐 色	ロームブロック少量	6 褐 色	鹿沼バミス中量、ローム粒子少量

第78号土坑土層解説

1 前 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	3 灰 黄 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 にぶい黄褐色	ロームブロック少量	4 灰 黄 褐 色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片187点、礫1点のほか、攪乱等により混入したとみられる繩文土片9点、平安時代の須恵器片2点が出土している。88の土師器鉢が南壁際の床面から正位の状態で、89の土師器壺がつぶれた状態で出土している。

所見 炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。また、本跡は当遺跡において最大規模の住居跡である。時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀前半）と考えられる。



第49図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表(第49回)

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	地 土	色 調	焼成	手 法	特 徴	出土位置	備 考
86	土 師 器	高 环	—	(8.2)	[11.6]	灰石・雲母・ 青色粒子	明赤褐	普通	坏部外側ヘラ削り 内側ヘラ削り	外部表面 内側削き	窓内	40%
87	土 師 器	碗	[14.0]	(7.2)	—	石英・灰石・ 青色粒子	澄	普通	体部外側ヘラ削り	内側ナダ	窓土中	15%
88	土 師 器	碗	13.4	6.9	—	灰石・雲母	にぶい褐	良好	口縁部外側ヘラ削り 内側削き	体部外側ヘラ削り後へ ナダ	南壁部床面	90% PL15
89	土 師 器	盤	16.7	31.7	8.6	石英・灰石・雲母	にぶい褐	普通	体部外側ヘラ削り	内側ナダ	南壁部床面	90% PL15

第19号住居跡(第50~52回)

位置 調査E区の北西部、B5a3区。標高46.0mの平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.00m、短軸5.88mの方形である。壁は高さ14~32cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-20°-Eである。

床 ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。東部に搅乱が見られる。壁溝は南西壁下、北西壁下と南東壁下の南側を巡っている。上幅12cm前後、下幅6cm前後、深さ5cmで、断面形はV状である。床面に炭化材と焼土が貼り付くように確認されているが、炭化材の出土量は少ない。

竈 北東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで126cm、袖部幅120cmで、壁外への掘り込みは46cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面とはほぼ同じ高さの地山面をそのまま使用して、火熱を受け、赤変硬化している。煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒 褐 色	ローム粒子・焼土粒子少量	7	褐 灰 色	砂質粘土多量、焼土粒子少量
2	黒 褐 色	焼土粒子・砂質粘土少量	8	暗 赤 褐色	焼土ブロック・砂質粘土中量
3	暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量	9	にぶい褐色	焼土ブロック・砂質粘土少量
4	黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土少量	10	褐 色	砂多量、焼土粒子少量
5	若 青 褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量	11	灰オーブー色	砂多量、焼土ブロック中量
6	黒 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	12	暗 褐色	砂中量、ロームブロック・焼土ブロック微量

ピット 6か所。P1~4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P5は南西壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6の性格は不明である。深さはP1が52cm、P2~3が60cmほど、P4が76cm、P5~6は20cmほどである。

貯蔵穴 東コーナー部に付設されている。長径80cm、短径48cm、深さ30cmである。

覆土 12層からなる。南部に一部人為的な堆積が見られるが、全体としてはレンズ状の堆積を示していることから、自然堆積と考えられる。

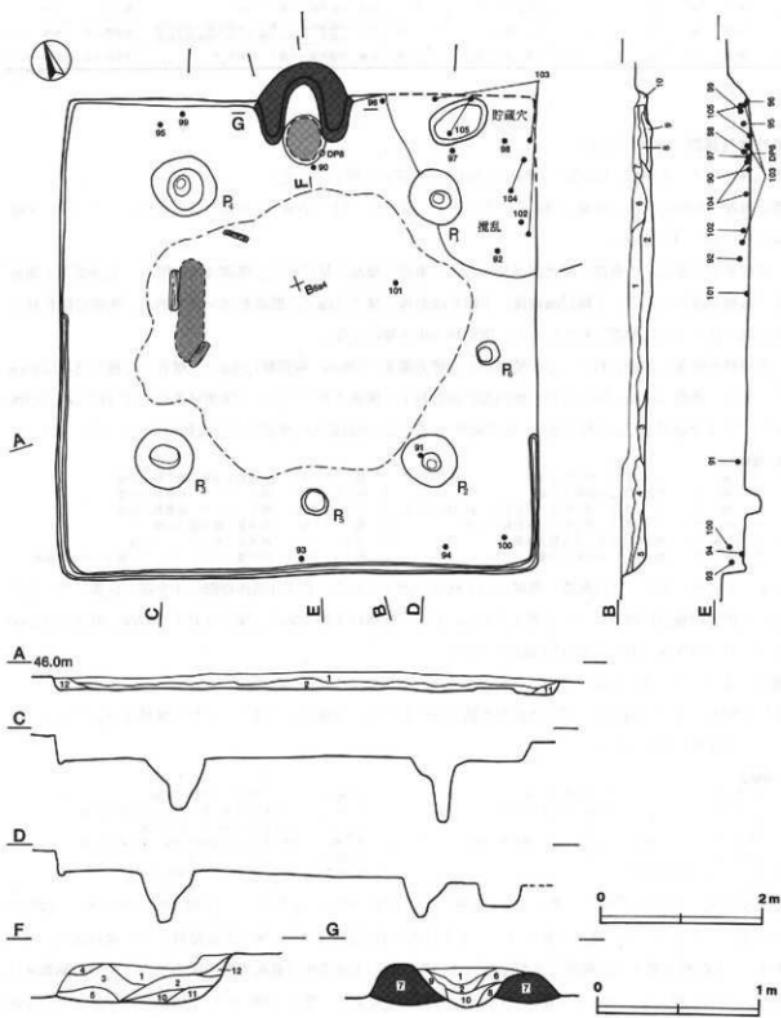
土層解説

1	暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	7	黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2	暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	8	灰 褐色	砂質粘土中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3	褐色	ロームブロック少量	9	暗赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子少量
4	黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	10	暗 褐色	焼土粒子・砂質粘土中量、炭化粒子少量
5	暗 褐色	ロームブロック少量	11	暗 褐色	ロームブロック少量
6	黒 褐色	炭化粒子少量	12	暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量

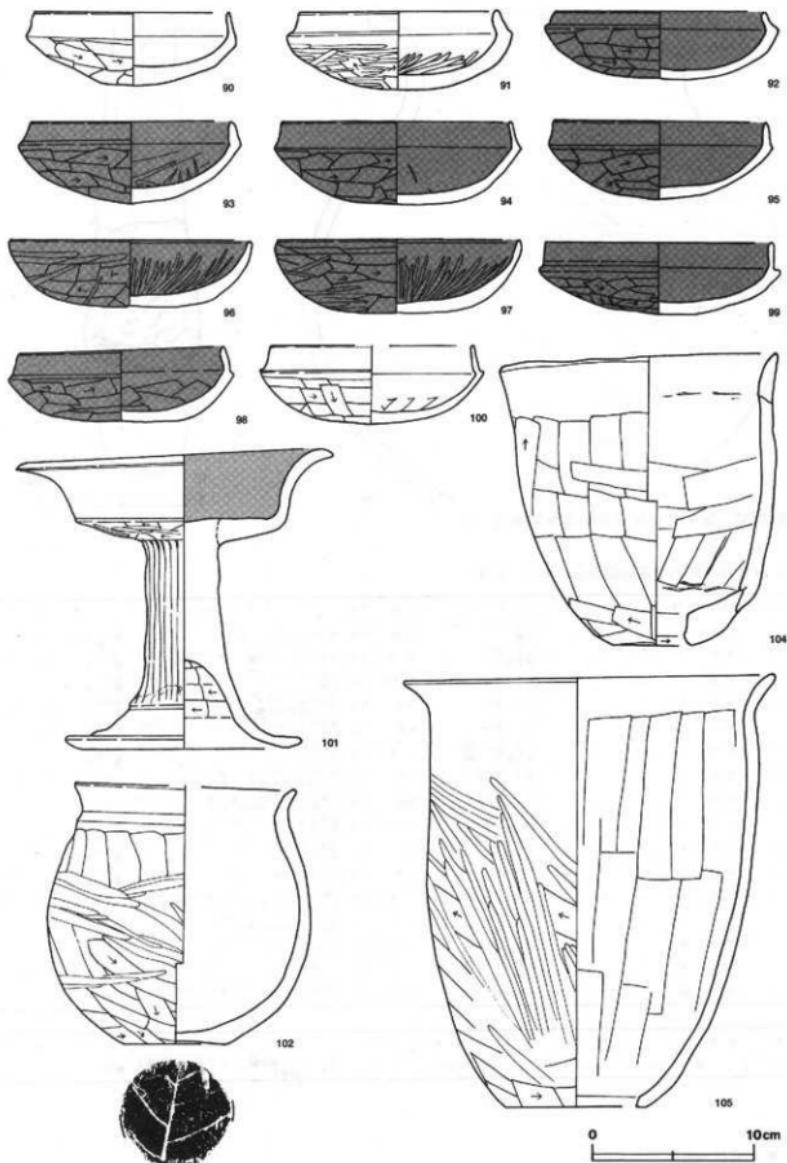
遺物出土状況 土師器片502点、礫5点(未掲載の花崗岩製の磨石1点を含む)、土製支脚1点のほか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片54点、平安時代の須恵器片123点(第3号流路跡からの流れ込みと考えられる)、土師質土器1点、陶器2点が出土している。90の土師器は竈前方部の床面から、95の土師器は北西部の覆土下層から、98の土師器と102の土師器は北東部の覆土下層、97の土師器、104と105の土師器は北東部の床面から出土している。覆土中からモモの種子が出土している。なお、現存率が高いが未掲載の土師器の杯12点、甕1点がある。

所見 炭化材や焼土が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物

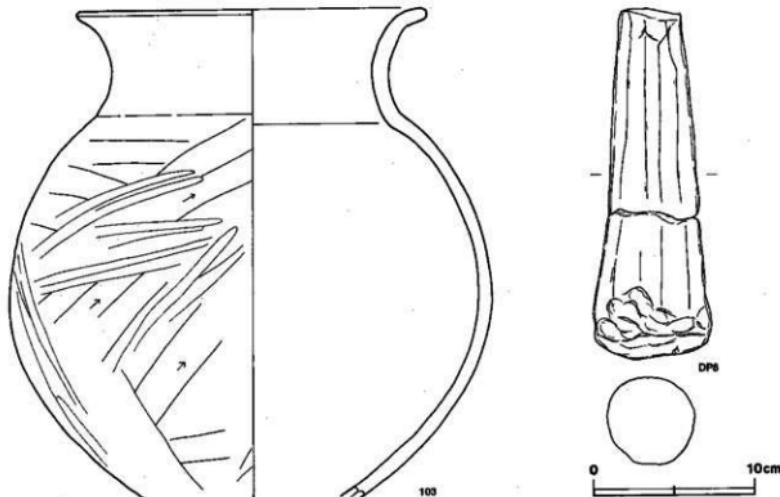
が多いことから、持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は、出土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第50図 第19号住居跡実測図



第51図 第19号住居跡出土遺物実測図（1）



第52図 第19号住居跡出土遺物実測図（2）

第19号住居跡出土遺物観察表（第51・52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特徴	出土位置	備考
90	土 器	壺	12.2	4.4	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	青緑	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナデ	竪方床床面	100% PL15
91	土 器	壺	12.4	4.8	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	北東部 竪土下層	95% PL15
92	土 器	壺	13.2	4.1	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナデ 内・外側黒色	北東部 横土下層	95% PL15
93	土 器	壺	12.4	5.0	-	長石・雲母	黒褐	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラナダ・ヘラ磨き	南西端 竪土中層	95% PL16
94	土 器	壺	14.2	5.1	-	長石・雲母	黒褐	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナデ 内・外側黒色	南西端床面	95% PL16
95	土 器	壺	13.2	4.8	-	石英・長石・雲母・赤色粒子・小鏡	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り 内面ナデ 内・外側黒色	北東部 竪土下層	95% PL16
96	土 器	壺	15.0	4.1	-	雲母・赤色粒子	黒褐	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	北東部床面	95% PL16
97	土 器	壺	15.1	4.5	-	雲母・赤色粒子	黒褐	普通	口部・体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	北東部床面	95% PL16
98	土 器	壺	12.9	4.4	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラナデ 内・外側黒色	北東部 横土下層	90%
99	土 器	壺	14.0	4.4	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラナダ 内・外側黒色	北東部 横土下層	90%
100	土 器	壺	12.6	4.8	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	体部外側ヘラ削り 内面ヘラナダ	南東部 竪土中層	55%
101	土 器	高 壺	18.2	18.5	13.0	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	口部・外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	中央部床面	90% PL16
102	土 器	壺	[13.6]	16.3	6.3	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 下端ヘラ削り	北東部 横土下層	85% PL16
103	土 器	壺	21.5	20.5	-	長石・赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ナデ	北東部 横土下層	85% PL16
104	土 器	瓶	17.0	18.0	3.7	石英・長石・雲母・小鏡	にぶい緑	普通	口・体部外側ヘラ削り 内面ヘラナデ 孔部 ヘラ切り	北東部床面	85% PL17
105	土 器	瓶	23.0	26.8	8.6	長石・雲母	にぶい緑	普通	体部外側ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナデ	北東部床面	85% PL17

番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP 8	文 鋼	21.6	7.4	6.0	825.6	土	表面ナデ 下端指標によるナデ 上端焼土付着 全面剥落	竪内	PL19

第20号住居跡（第53・54図）

位置 調査D区の南東部、B4b9区。標高46.0mの平坦部に位置している。

重複関係 西部が第71号土坑を、南西部が第73号土坑を、北西部が第22号住居跡をにそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 東部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。西壁は削平されているが、長軸5.16m、確認できた短軸4.00mで、方形と考えられる。壁は高さ20cmで、外傾して立ち上がっていいる。主軸方向はN-26°-Eである。

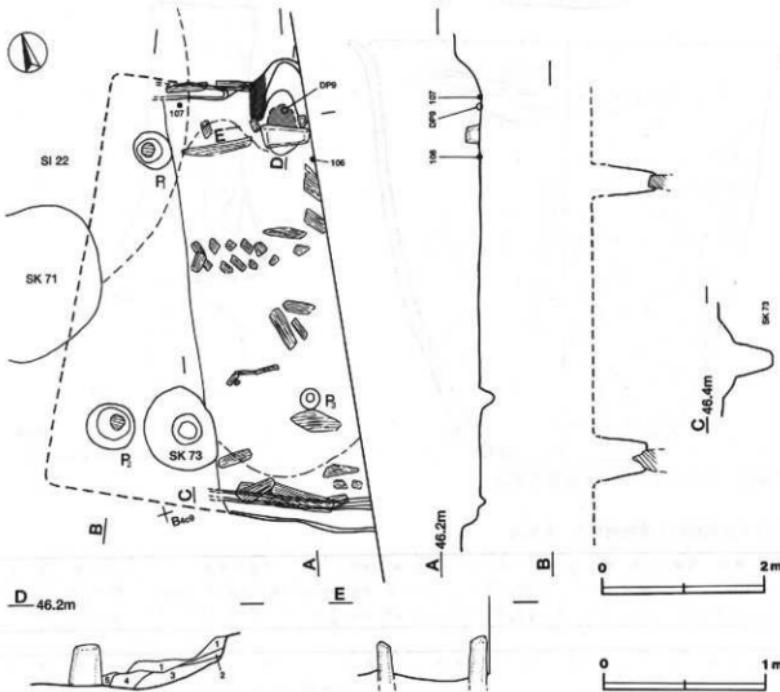
床 ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。壁溝は、削平されている西壁を除いて、巡っているので、全周していたものと考えられる。上幅12~20cm、下幅6~12cm、深さ10cmで、断面形はU字状である。床面に貼り付くように多量の炭化材が確認されている。

竈 北西壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで118cm、東部が調査区域外となっているが、袖部幅85cmほどと考えられる。壁外への掘り込みは40cmほどである。焚口部は袖18cm前後の角柱状の花崗岩を両側に立てている。火床部から長さ60cmほどの角柱状の花崗岩が確認されているので、両側の角柱状の花崗岩の上に乗せて構築していたと考えられる。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さで地山面をそのまま使用して、火熱を受け、赤変硬化している。硬化の度合いは強い。煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっていっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------|----------------------|
| 1 オリーブ黒色 | 砂中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 灰 黄 褐 色 | ローム粒子・砂質粘土少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒 褐 色 | 炭化物・灰中量、ローム粒子・焼土粒子少量 |

- | | |
|----------|----------------------|
| 4 灰 黄 色 | 炭化物・灰中量、ローム粒子微量 |
| 5 オリーブ黒色 | 灰多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量 |



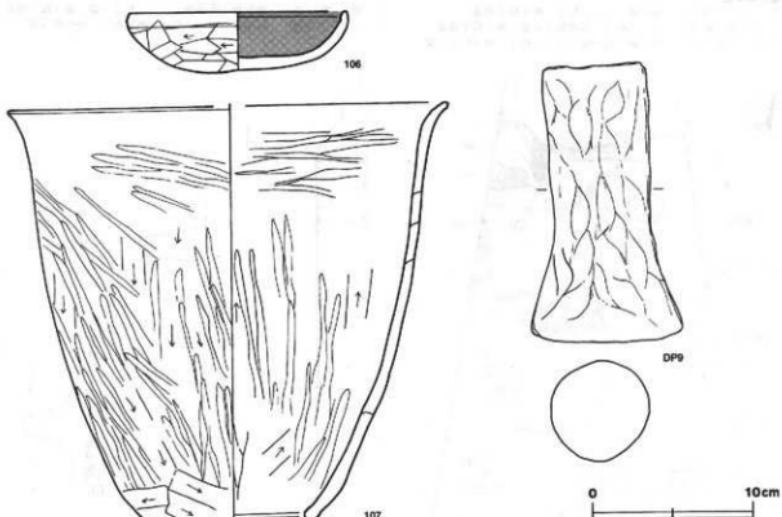
第53図 第20号住居跡、第73号土坑実測図

ピット 3か所。P 1・2は配置と規模から主柱穴と考えられる。P 3は南西壁の中央部から内側に位置しているが、壁側に傾くような掘り方であることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 1からシロダモの丸木の柱材が、P 2からコナラ属アカガシ亜属の丸木の柱材が確認されている。深さはP 1が76cm、P 2が68cm、P 3が18cmである。

覆土 層数は不明であるが、各層が小さなブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器片85点、礫1点、土質支脚1点のほか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片14点、平安時代の須恵器片10点（第3号流路跡からの）、陶器1点が出土している。106の土師器杯は竈右袖前方部の床面から、107の土師器櫃は北西部の床面からつぶれた状態で出土している。

所見 床面に貼り付くように多量の炭化材が確認されていることから焼失住居と考えられる。炭化材は多いが、遺物量は少ないことから、住居廃絶時に使用可能な遺物は持ち去り、その後に意図的に火をつけた可能性が考えられる。時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。茨城県内でこの時代の住居跡の柱材としてコナラ属アカガシ亜属の丸木が利用されるのは一般的であるが、シロダモの丸木が利用される例はほとんどみられない。



第54図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手法 の特徴	出土位置	備 考
106	土 師 器	杯	13.6	3.7	—	燒石・苔母・赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外側へフ削り 内面ナデ 内面赤彩	竈右袖前方部床面	95% PL17
107	土 師 器	櫃	[27.2]	25.7	[13.5]	石英・焼石・苔母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	体部内・外側へフ削り棒へフ削き 孔部へフ切り	北西部床面	85%

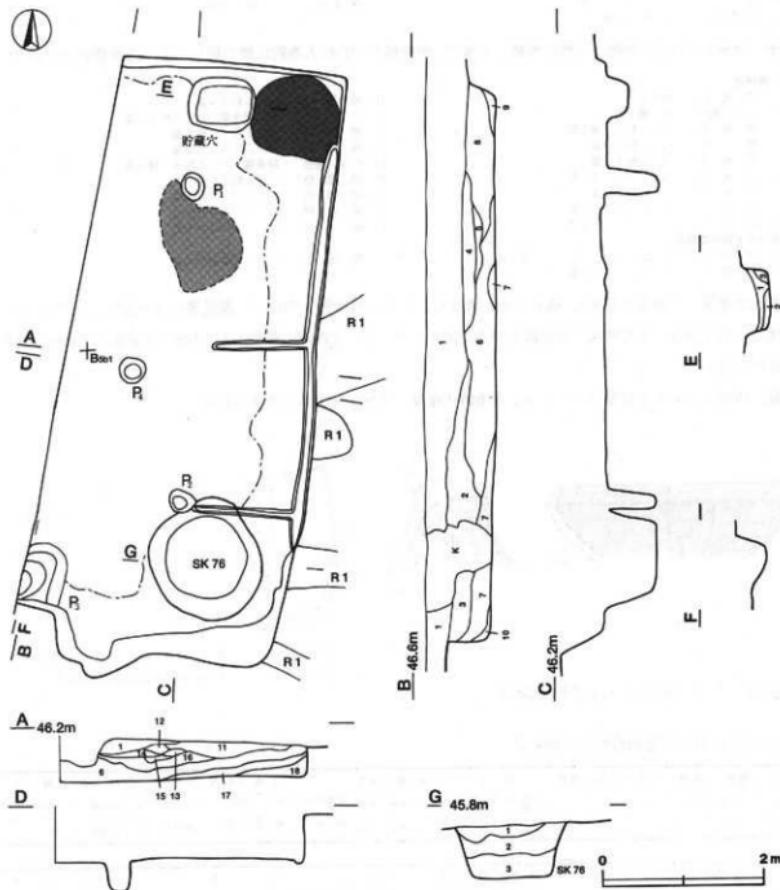
番号	器種	長さ(径)	幅(孔径)	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
DP9	支 脚	17.1	9.4	9.1	1097	土	表面削痕によるナデ 全面被熱	竈内	PL19

第21号住居跡（第55・56図）

位置 調査E区の西部。B5b1区。標高46.3mの平坦部に位置している。

重複関係 西部が調査区域外となっているため、全体を調査することはできなかった。中央部から南部にかけて第1号流路跡に掘り込まれている。南東部床面で第76号土坑が確認できたので、本跡の方が新しいと考えられる。

規模と形状 長軸6.96m、確認できた短軸3.24mで、方形と考えられる。壁は高さ14~58cmで、外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-6°-Eである。南壁東側に幅2.6m、長さ60cmほどの張り出し部が確認されている。



第55図 第21号住居跡、第76号土坑実測図

床 ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。東壁下に櫛溝が巡っている。上幅12~18cm、下幅6~12cm、深さ6cmで、断面形はV状である。幅10cm、深さ6cmほどで、中央に向かって東壁から2条の間仕切り溝状の掘り込みが見られる。北東部に焼土が、北東コーナー部に10cmほどの青灰色の粘土の高まりが見られる。

竈 調査区域内では確認できなかった。調査区域外の北壁中央部に付設されていたと想定される。

ピット 4か所。P1・2は配置と規模から主柱穴と考えられる。P3は南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P4の性格は不明である。深さはP1・2が62~65cm、P3が18cm、P4が36cmである。

貯蔵穴 北東部に付設されている。長軸82cm、短軸64cmの長方形で、深さは30cmである。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量
2 明褐色	ローム粒子中量

3 明褐色	ローム粒子多量
-------	---------

覆土 18層からなる。壁際に自然に堆積した後に、中央部を中心に入為的に埋め戻したような堆積状況である。

土層解説

1 黒褐色	耕作土
2 にぶい褐色	砂・礫少量
3 黒褐色	ローム粒子・礫少量
4 褐色	ローム粒子中量
5 暗褐色	ローム粒子少量
6 黒褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	ローム粒子少量
8 細褐色	ロームブロック少量
9 褐色	ロームブロック少量

10 暗褐色	ローム粒子少量
11 にぶい褐色	砂・礫多量、ローム粒子少量
12 暗褐色	ローム粒子・砂少量
13 黒褐色	ロームブロック少量
14 にぶい褐色	砂多量、ローム粒子・礫少量
15 暗褐色	ローム粒子少量
16 暗褐色	ロームブロック中量
17 暗褐色	ロームブロック中量
18 黒褐色	ロームブロック少量

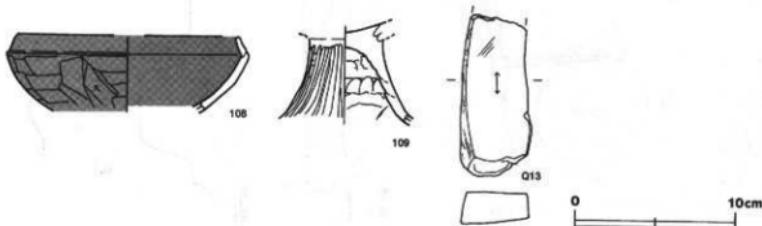
第78号土坑土層解説

1 黒褐色	砂中量、ロームブロック・礫少量
2 黒褐色	ロームブロック少量

3 黒褐色	ロームブロック少量
-------	-----------

遺物出土状況 土師器片189点、砥石1点、礫2点（1点は投敵弾）のほか、搅乱等により混入したとみられる繩文土器片38点、平安時代の須恵器片33点が出土している。北西部の覆土中から108の土師器片と109の土師器高杯が出土している。

所見 時期は、出土土器等からトルネット古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第56図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
108	土師器	片	[13.5]	(4.7)	—	石英・長石・雲母・小石	にぶい黄褐色	普通	体部外側へラ削り 内面ナゲ 内・外面黒色	北西部覆土中	15%
109	土師器	高杯	—	(6.1)	—	石英・長石・雲母・小石	にぶい黄褐色	普通	体部外側へラ削り 後へラ削き 内面指痕によるナゲ	北西部覆土中	30%

番号	器種	大きさ(径)	幅(孔径)	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q13	砥石	(9.9)	4.6	3.4	(176.5)	瑪瑙岩	表面凹面	覆土中	PL20

(2) 土坑

第19号土坑 (第57・58図)

位置 調査A区の南東部, C1e0区。標高44.3mの平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.1m, 短軸1.78mの不定形で、確認面からの深さは33cmで、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。長軸方向はN-0°である。底面は皿状である。

覆土 3層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	砂中量
2 黑褐色	砂中量

3 にぶい黄褐色	砂少量
----------	-----

遺物出土状況 土師器片3点、礫5点のほか、擾乱等により混入したと見られる繩文土器片5点が出土している。116の土師器壺は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀前半）と考えられる。

第20号土坑 (第57・58図)

位置 調査A区の北東部, C1b0区。標高44.6mの平坦部に位置している。

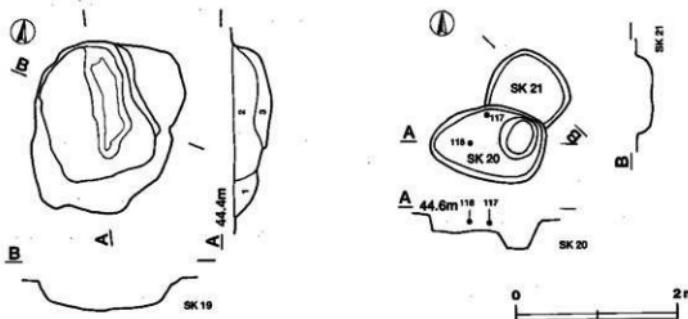
重複関係 北部は第21号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.0m、確認できた短径0.75mで、楕円形と考えられる。確認面からの深さは20cmで、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。長径方向はN-50°-W。底面は段状である。北東部に深さ45cmほどのピット状の落ち込みが見られる。

覆土 層数は不明であるが、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器片9点と礫1点が出土している。117土師器壺は北部の覆土下層から、118の土師器高杯は中央部の覆土下層から出土している。

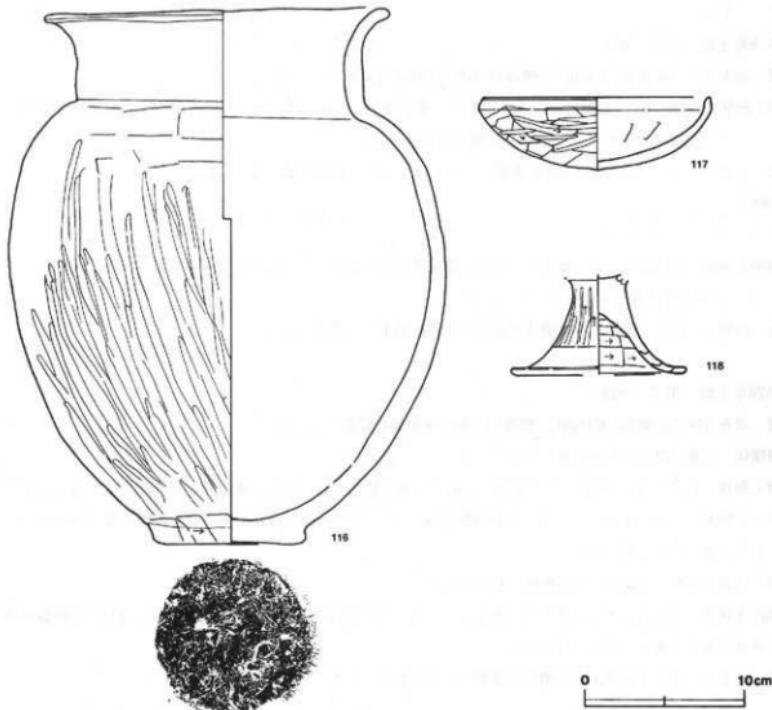
所見 時期は、出土土器等から古墳時代後期（6世紀前半）と考えられる。



第57図 第19・20・21号土坑実測図

古墳時代土坑出土遺物観察表 (第58図)

番号	種別	器種	口径	深さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
116	土師器	壺	21.0	33.0	9.4	石英・長石・雲母・小種	にぶい褐色	普通	体部外側へラ磨き 下端へラ削り 内面ナガ	SK 19覆土中	85% PL16
117	土師器	壺	14.2	4.4	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部外側へラ削り 下端へラ磨き 内面ナガ	SK 20北移 覆土下層	100% PL17
118	土師器	高杯	-	(6.2)	[11.0]	石英・長石・雲母	棕	普通	内面外側へラ削り 下端へラ磨き 内面ナガ	SK 20中央部 覆土下層	40%



第58図 第19・20号土坑出土遺物実測図

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認された奈良・平安時代の遺構は、堅穴住居跡2軒、流路跡3条である。堅穴住居跡は調査区のE区の中央部と南西部から、流路跡は調査区のE区の東部からD区あるいは調査区域外の北西部にかけて流れるように確認されている。この流路跡については、付章に自然科学的分析を掲載している。試料の採取地点のA地点は第1号流路跡に、B地点は第2号流路跡に、C地点は第3号流路跡に対応している。この流路跡周辺からは多量の礫が確認されている。これは、本跡の東部から北東部方向に位置する足尾山や加波山の山麓には扇形の緩斜面が特徴的にみられ、しばしば土石災害が起こっていることによると思われる。それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について、記述していく。

(1) 堅穴住居跡

第7号住居跡（第59図）

位置 調査E区の中央部、B5e6区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係 北東壁中央部を第49号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.30m、短軸3.20mの方形である。壁は高さ4cmで、直立している。主軸方向はN-16°-Eである。

床 ほぼ平坦である。硬化面は確認できなかった。北西壁から中央部に向かって、上幅25cm、下幅10cm、深さ10cmほどの間仕切り状の溝が1条確認されている。

竈 北壁中央部に設けられていたと想定されるが、第49号土坑に掘り込まれ、規模等は不明である。

ピット 4か所。P1は南西壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2~4の性格は不明である。深さはP1が20cm、P2~4が10~18cmである。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は北コーナー部に、貯蔵穴2は東コーナー部に付設されている。貯蔵穴1は長径70cm、短径58cmの橢円形で、深さは34cmである。貯蔵穴2は長径86cm、短径70cmの橢円形で、深さは22cmである。

貯蔵穴1・2 土壌解説

1 にほい褐色 ローム粒子多量
2 明褐色 ローム粒子多量

3 黒褐色 ロームブロック少量
4 黑褐色 ロームブロック少量

覆土 2層からなる。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

1 にほい褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミス中量

2 黒褐色 鹿沼バミス中量、ロームブロック少量

第48号土坑土層解説

1 前褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

2 暗褐色 ローム粒子少量

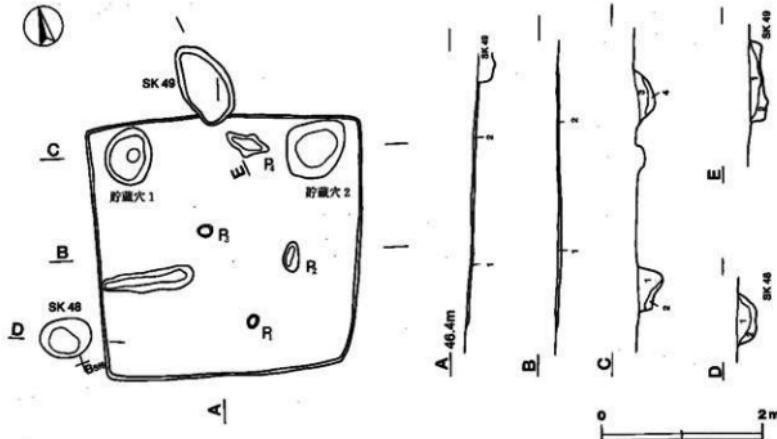
第49号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 明褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 須恵器細片3点、礫1点が中央部から出土している。

所見 時期は、遺物量が少なく明確ではないが、出土土器から平安時代と考えられる。



第59図 第7号住居跡、第48・49号土坑実測図

第9号住居跡（第39・60図）

位置 調査E区の南西部、B5d1区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係 南部が第10号住居跡の北部を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.80m、短軸3.75mの方形である。壁は高さ26~32cmで、直立している。主軸方向はN-11°-Eである。

- E である。

床 ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。壁溝は南西コーナー部に一部見られる。上幅14cm、下幅8cm、深さ7cmで、断面形はU字状である。P 1 の北東側に長軸100cm、短軸72cmの不定形をした7cmほどの高まりが見られ、表面は硬化している。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅136cmで、壁外への掘り込みは26cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面に礫と炭化材を少量含んだ砂質粘土で構築されている。火床面は床面を5cmほど掘りくぼめ、火熱を受け、赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がっている。

遺土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	5	にがい赤褐色	炭化材多量、燒土粒子中量、砂質粘土少量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	6	褐灰色	砂質粘土多量、燒土粒子微量
3	褐色	炭化材・砂質粘土中量、燒土粒子少量	7	褐色	砂質粘土多量、炭化材・礫少量
4	褐色	炭化材・砂質粘土中量、燒土粒子少量			

ピット 1か所。P 1 は南壁際中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。深さは18cmである。

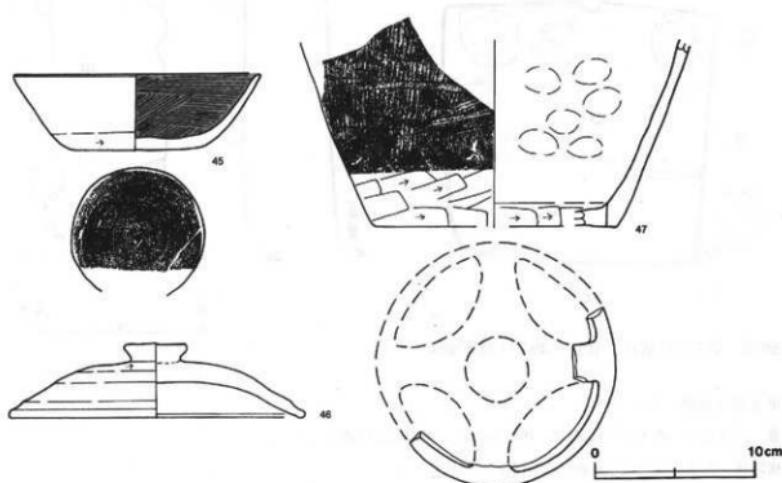
覆土 15層からなる。各層にロームブロックや炭化粒子が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	9	暗褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	10	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
3	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼バミス微量	11	暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	12	暗褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	13	暗褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子少量
6	暗褐色	ロームブロック中量	14	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
7	褐色	ロームブロック中量	15	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
8	暗褐色	ロームブロック・炭化材中量			

遺物出土状況 土師器片93点、礫1点のほか、擾乱等により混入したとみられる縄文土器片32点が出土している。45の土師器は中央部床面から、46の須恵器蓋は竈の西側床面から出土している。

所見 時期は、出土土器等から8世紀後葉と考えられる。



第60図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表(第60回)

番号	種別	各種	口径	標高	底径	土	色調	地成	手法の特徴					出土位置	備考	
									底部外観下部へラブリ	内側へラブリ	底面	内側黒色処理	底板へラブリ	内側部ロクロナダ		
45	土 耳	环	15.0	4.6	8.0	石英・長石・雲母	にぶい酸	普通							中央部床面	50%
46	原 恵	環	18.3	4.6	-	石英・長石・金雲母	黄灰	普通							東西側床面	70%
47	原 恵	瓶	-	(11.0)	(15.2)	長石・金雲母	灰	普通	底部外観下部へラブリ	内側へラブリ	底面	内側部ロクロナダ	孔部へラブリ		中央部床面	15%

表2 北田遺跡住居跡一覧表

番 号	主軸方向	平面形	面 積 (m ²)	最高 基高 (cm)	床面 標高 (cm)	壁構 造	内 部 施 設			覆土	主な出土遺物	時 期	備考(旧→新)		
							主軸穴	花入口	ピット	伊・電	野廻穴				
1	B4b8	N-42°-W	方形	5.14 × 5.12	10~ 22	平坦	全周	4	1	4	電1	1	人馬 土師器(环・棒・ 鋸・磨石)	古墳時代 焼失 SK22-33 71-木葬	
2	B5d4	N-20°-W	方形	5.38 × 5.16	4~ 10	平坦	-	5	1	1	電1	1	人馬 土師器(环・棒・ 鋸・磨石)	古墳時代 焼失 木葬 → SK 46	
3	A4j9	N-35°-W	方形	6.05 × (5.3)	0~ 24	平坦	一部	2	2	1	-	-	人馬 土師器(环)	古墳時代 焼失 SK45-52 22-木葬	
4	A4j9	N-36°-E	方形	5.20 × (4.64)	0~ 18	平坦	全周	2	1	-	-	-	人馬 土師器(环)	古墳時代 焼失 SK13	
5	A4i9	[N-10°-E]	[方形]	(3.82) × (3.56)	5	平坦	-	1	1	-	-	-	人馬 土師器(环)	古墳時代 焼失 SK4-5 木葬	
6	A4i8	N-25°-W	丸角正方形	[7.0] × 6.2	8~ 42	やや 凸凹	全周	4	-	14	-	-	白灰 青土(瓦礫・漆漆・陶 子手・土器内腹・灰 土)	古墳時代 焼失 SK61-62 木葬	
7	B5e6	N-16°-E	方形	3.3 × 3.2	4	平坦	-	1	3	-	2	-	不明 鐵質片	平安時代 木葬 → SK49	
8	C1f0	N-8°-W	円形または 楕円形	5.95 × (4.60)	-	平坦	-	12	-	3	伊1	-	不明 縄文土器片・瓦片 石器	縄文時代 中葉 SK10-11	
9	B5d1	N-11°-E	方形	3.80 × 3.75	26~ 32	平坦	一部	-	1	-	電1	-	人馬 土師器(环)	古墳時代 焼失 木葬 → SK 46	
10	B5e1	N-18°-E	方形または 長方形	[7.00] × (2.80)	-	平坦	-	2	-	-	電1	1	人馬 土師器(环・夷环)	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬	
11	B4d0	N-21°-W	円形または 楕円形	5.74 × (3.34)	20~ 38	平坦	-	1	-	-	1	人・自	土師器(环・椭)	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬	
12	A4i6	不明	円形または 楕円形	6.45 × (2.05)	20	平坦	-	4	-	-	-	-	人馬 縄文土器片・削片 石器	古墳時代 中葉 SK10-11	
13	B4a6	N-27°-W	方形	4.05 × 4.02	14~ 42	平坦	ほぼ 全周	4	1	4	電1	1	白灰 土師器(环・椭) 石器	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → SK49	
14	A4j6	N-55°-W	楕円形	[5.00] × [4.40]	20	やや 凸凹	-	8	-	-	伊1	-	自然 土器片・石器	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → SK72	
15	B5b2	N-18°-E	方形	5.8 × 5.6	22~ 35	平坦	一部	4	1	1	電1	-	自然 土師器(环・椭・ 刷毛)	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → SK72	
16	B5C2	N-2°-E	方形	8.2 × 8.00	0~ 20	平坦	一部	4	1	3	電1	-	人馬 土師器(椭・刷毛)	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → SK72-77	
19	B5a3	N-20°-E	方形	6.00 × 5.88	14~ 32	平坦	一部	4	1	1	電1	1	人・自	土師器(环・椭) 石器	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → SK72
20	B4b9	N-26°-E	方形	5.16 × (4.00)	20	平坦	一部	2	1	-	電1	-	人馬 土師器(环)	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → R1	
21	B5b1	N-6°-E	方形	6.96 × (3.24)	14~ 58	平坦	一部	2	1	1	-	1	人・自 石器	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → R1	
22	B4a8	不明	円形	[6.86] × [6.12]	-	平坦	-	5	-	5	-	-	不明 縄文土器片・西瓦 石器	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → R1	
23	B4a7	N-26°-E	円形	[8.1] × [4.74]	-	やや 凸凹	-	8	-	1	伊1	-	自然 縄文土器片・深鉢 石器	古墳時代 焼失 SK10-11 木葬 → R1	

(2) 流路跡

第1号流路跡(第61・62回)

位置 調査E区の東部から西部にかけて、標高46.9~46.0mの緩やかな傾斜面をなだらかに流れるように確認している。

重複関係 西端部は第15・16・21号住居跡を横切っている。

規模と形状 東端が調査区域外に延びているため、規模は不明である。東側から幾分蛇行しながらも、ほぼN-95°-W、途中N-60°-W、N-57°-Wの方向に変化して延びている。幅25~148cm、深さ18~34cmで、断面形はV字状、U字状や逆台形状で、定形的ではない。B5e9区とB6g4区周辺に深いところがみられる。

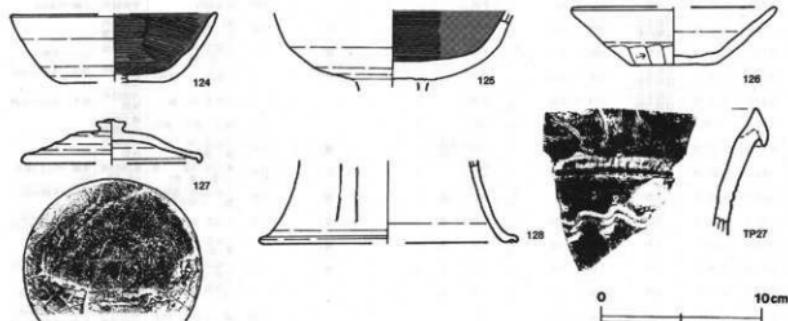
覆土 単一層である（トレーナーの第6層）。層厚は薄いが、砂や礫を含んだ自然堆積で、第2・3号流路跡と同様な堆積状況である。

トレーナー層解説

1. 褐	色	黒色土板めて多量、ローム粒子少量	10. にぶい褐色	砂多量、中疊中量（第2号流路跡）
2. 黒	褐	ローム粒子少量	11. 黒褐色	ローム粒子少量、砂微量
3. 褐	色	ロームブロック少量	12. 黑褐色	ローム粒子・砂少量
4. 褐	色	ロームブロック少量	13. にぶい褐色	砂多量、小疊中量（第3号流路跡）
5. 明	褐色	ロームブロック中量	14. 黑褐色	ローム粒子・小疊少量
6. 灰	褐色	砂多量、小疊中量（第1号流路跡）	15. 暗褐色	小疊少量
7. 黑	褐色	ローム粒子少量	16. 黑褐色	小疊少量
8. 黑	褐色	ローム粒子少量、砂微量	17. にぶい褐色	砂中量、小疊少量
9. 灰	褐色	ロームブロック少量	18. 褐色	砂・小疊少量

遺物出土状況 土師器片450点、須恵器片580点、礫43点が出土している。127の「ヰ」とヘラ書きされた須恵器蓋は底面から、128の須恵器円面鏡は覆土中から出土している。なお、現存率は高いが未掲載の土師器の杯3点、高台付杯3点、甕3点、須恵器の杯5点、高台付杯3点、甕2点、蓋1点がある。

所見 時期は、出土土器等から8世紀後葉から9世紀後葉と考えられる。本跡は第2・3号流路跡と同時に存在していた可能性が考えられる。



第61図 第1号流路跡出土遺物実測図

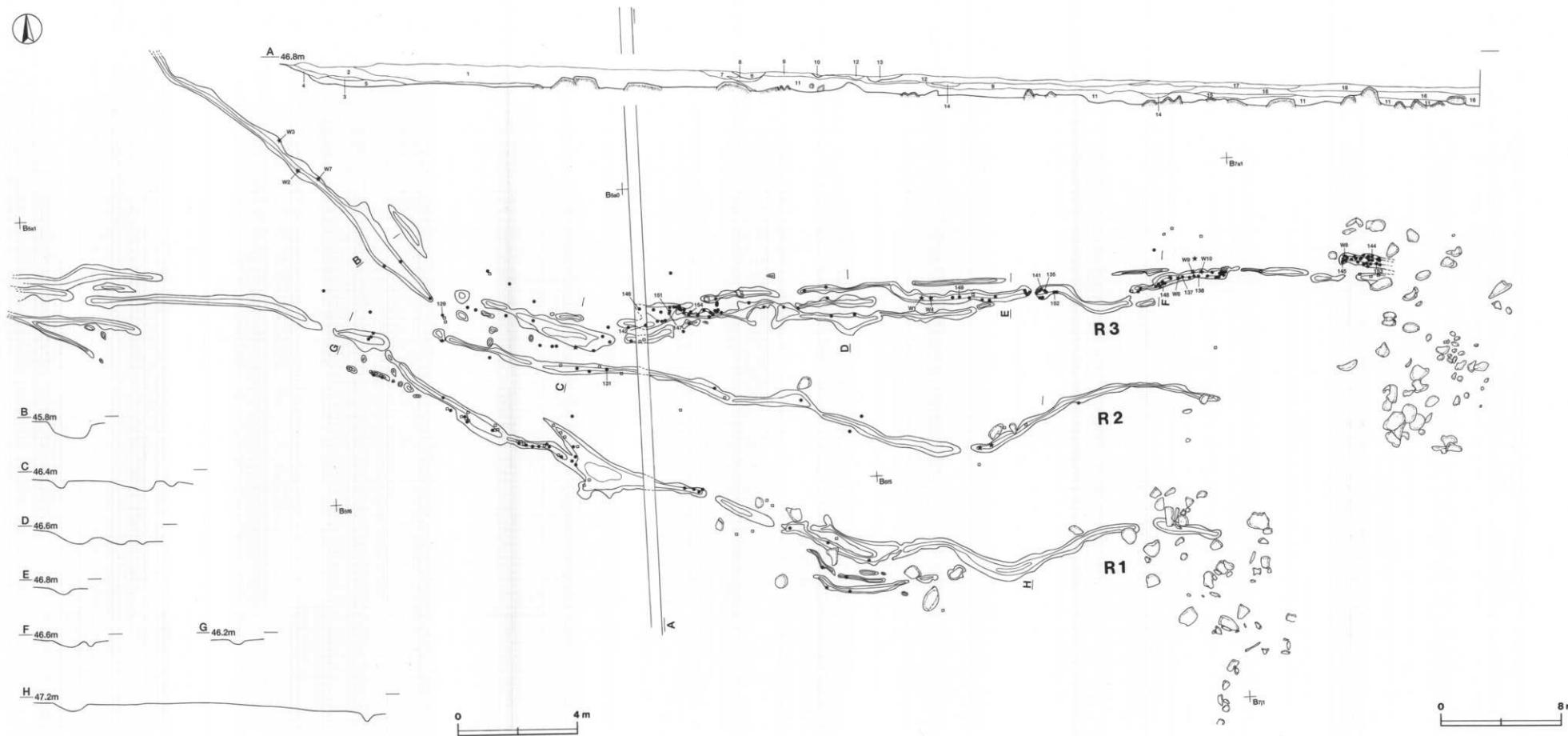
第1号流路跡出土遺物観察表（第61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 殊	出土位置	備 考
124	土師器	杯	[126]	4.3	[62]	長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部・後部ロクロナデ 内面ヘラ磨き 内底面	底面	30%
125	土師器	高 瓢	-	(4.6)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部・全体ロクロナデ 内面ヘラ磨き 内底面	底面	30%
126	須恵器	杯	[127]	4.5	5.4	長石・金雲母等	灰	普通	口縁部・全体ロクロナデ 体部下位ヘラ削り 底部一方内のへた削り	底面	40%
127	須恵器	蓋	[110]	2.7	-	長石	黄灰	普通	天井部斜面ヘラ削り 口縁部ロクロナデ 内底面ヘラ削り「ヰ」	底面	30% PL18
128	須恵器	円面鏡	-	(5.0)	[15.8]	長石	灰	良好	脚部ロクロナデ 脚部にナザミ凹	覆土中	5% PL18
TP27	須恵器	甕	-	(7.8)	-	石英・長石	褐灰	普通	底部3本垂直による波状文	底面	

第2号流路跡（第62・63図）

位置 調査E区の東部から西部にかけて、標高46.7~46.0mの緩やかな傾斜面をなだらかに流れるように確認でき、B5c8区周辺で第3号流路跡と合流している。第1号流路跡の北側と第3号流路跡の南側に挟まるよう位置している。

重複関係 B5c8区周辺で第3号流路跡と合流し、第2号流路跡より古いと考えられる。



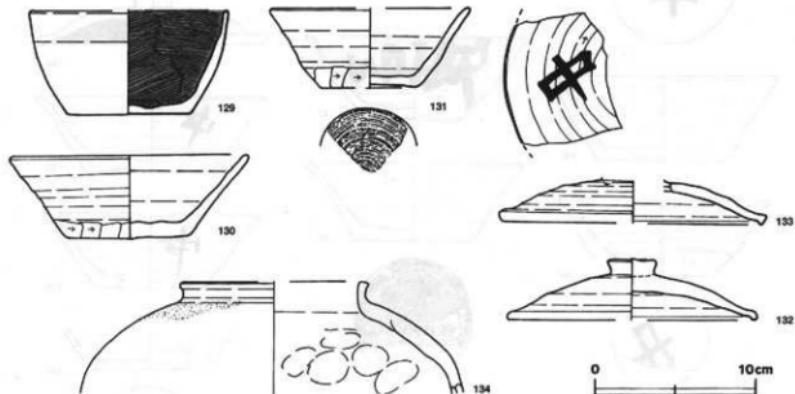
第62図 第1・2・3号流路跡実測図

規模と形状 東端が調査区域外に延びているため、規模は不明である。東側から幾分蛇行しながらもほぼN-96°-W、途中N-70°-Wの方向に変化した後、第3号流路跡に合流している。幅30~112cm、深さ18~46cmで、断面形はU字状、U字形状や逆V字形で、定形的ではない。B6e6区周辺に深いところがみられる。

覆土 単一層である（トレンチの第10層）。層厚は薄いが、砂や礫を含んだ自然堆積で、第1・3号流路跡と同様な堆積状況である。

遺物出土状況 土器片471点、須恵器片496点、磚4点が出土している。130の須恵器は「中」と墨書きされた須恵器蓋は底面から出土している。この墨書きの字体は第3号流路跡出土の143・147・150の墨書きの字体と同一である。なお、現存率が高い未掲載の土器の片1点、高台付片1点、高片1点、須恵器の片7点、高台付片2点、甕1点、蓋2点がある。

所見 時期は、出土土器等から8世紀後葉から9世紀後葉と考えられる。本跡は第1・3号流路跡と同時に存在していた可能性が考えられる。



第63図 第2号流路跡出土遺物実測図

第2号流路跡出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	管高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
129	土器	瓶	[12.2]	6.3	7.1	石英・長石・雲母	にふり赤褐色	普通 部陶輪へラ削り 内面黒色処理	口縁部・体部ロクロナデ 体部下位へラ削り	底面	40%
130	須恵器	片	14.6	5.1	7.1	石英多・長石多・ 雲母・小石多	灰	不良	口縁部・体部ロクロナデ 体部下位へラ削り	底面	60%
131	須恵器	片	[12.3]	4.9	[6.0]	長石	灰オリーブ	良好	口縁部・体部ロクロナデ 体部下位へラ削り	底面	25%
132	須恵器	蓋	[15.5]	4.7	—	石英・長石・金雲母	灰青	不良	天井部回転へラ削り 口縁部ロクロナデ	底面	30%
133	須恵器	蓋	[16.2]	(2.7)	—	長石・金雲母少	黄灰	普通	天井部回転へラ削り 口縁部ロクロナデ	底面	25% 天井部外 縁部(中)
134	須恵器	短頭曲	[11.8]	(7.0)	—	長石	灰オリーブ	良好	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ナデ 指痕による押出・外表面自然物仕上げ	底面	10%

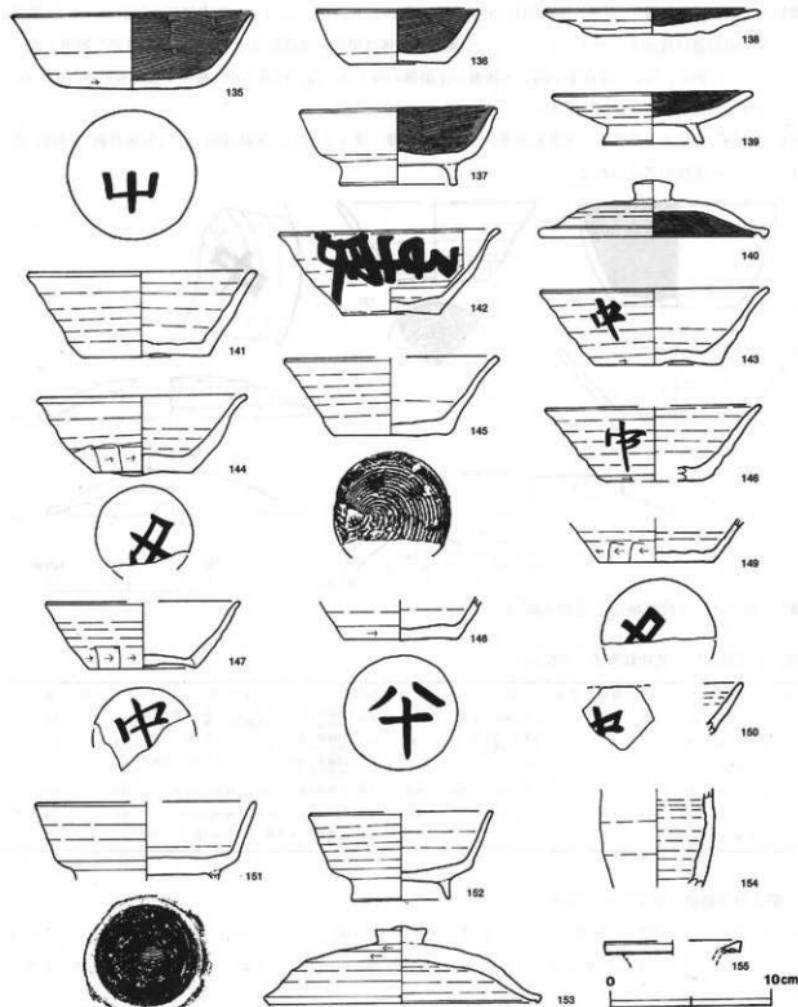
第3号流路跡（第62・64~67図）

位置 調査E区の東部から西部にかけて、標高46.6~45.3mの緩やかな傾斜面をなだらかに流れるように確認でき、B5c8区周辺で第2号流路跡と合流し、そこから北西部に向かって流れている。第2号流路跡の北側に位置している。

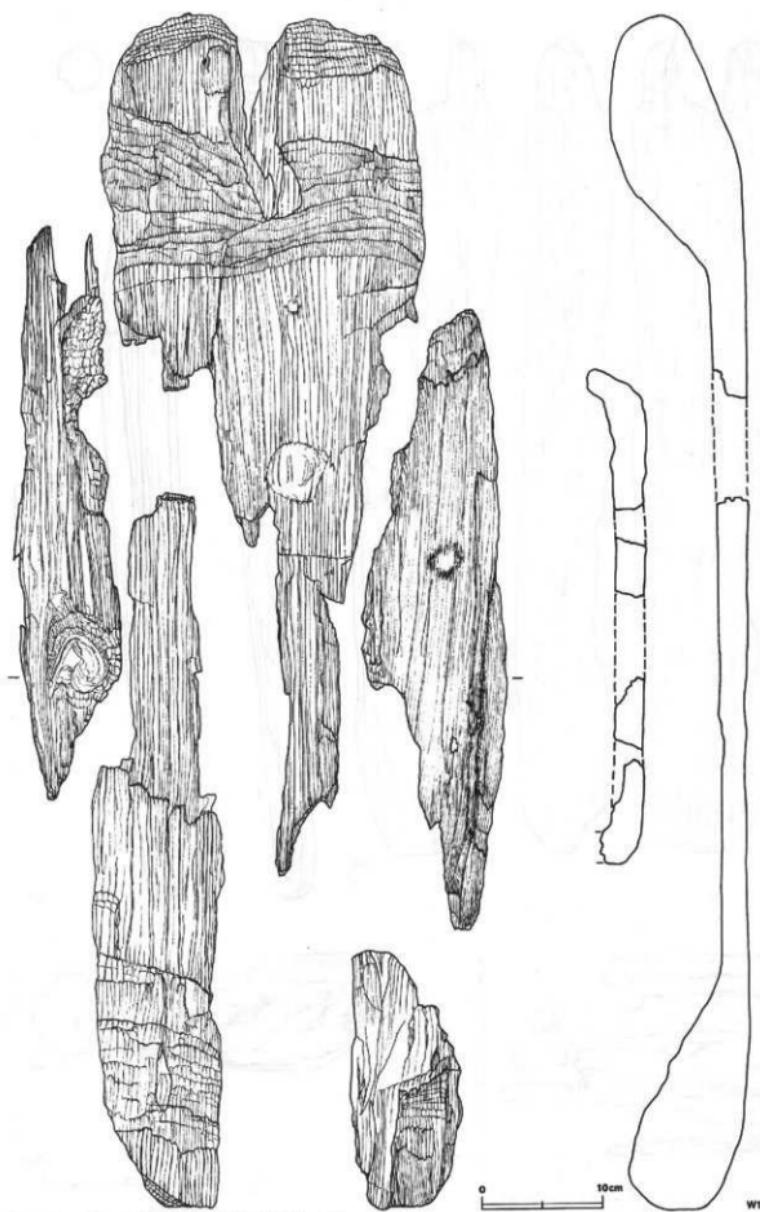
重複関係 B5c8区周辺で第2号流路跡と合流し、第2号流路跡より新しいと考えられる。第19号住居跡の北

東部を掘り込んでいる。

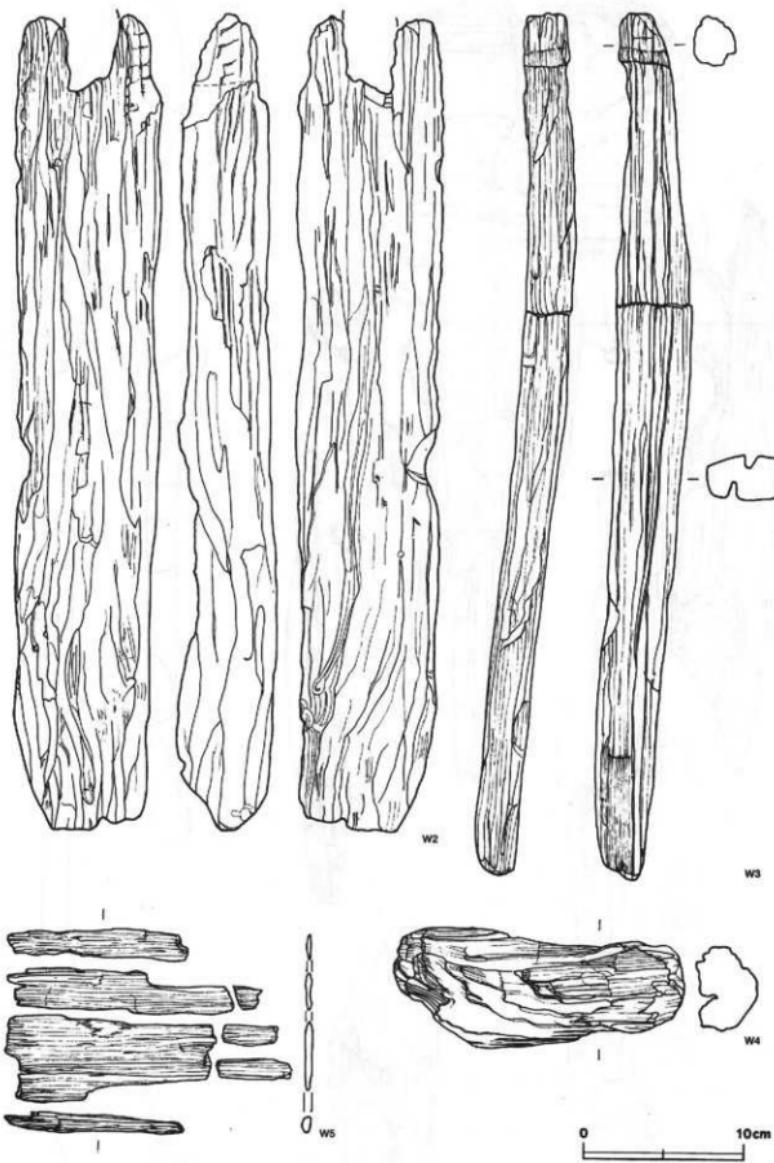
規模と形状 両端が調査区域外に延びているため、規模は不明である。東側から幾分蛇行しながらもほぼN-93°-Wの方向に延びた後、第2号流路跡に合流して、N-57°-Wの方向に延びている。幅25~220cm、深さ20~52cmで、断面形はV状、U字状や逆台形状で、定形的ではない。B5c9区とB6c1区周辺に深いところがみられる。



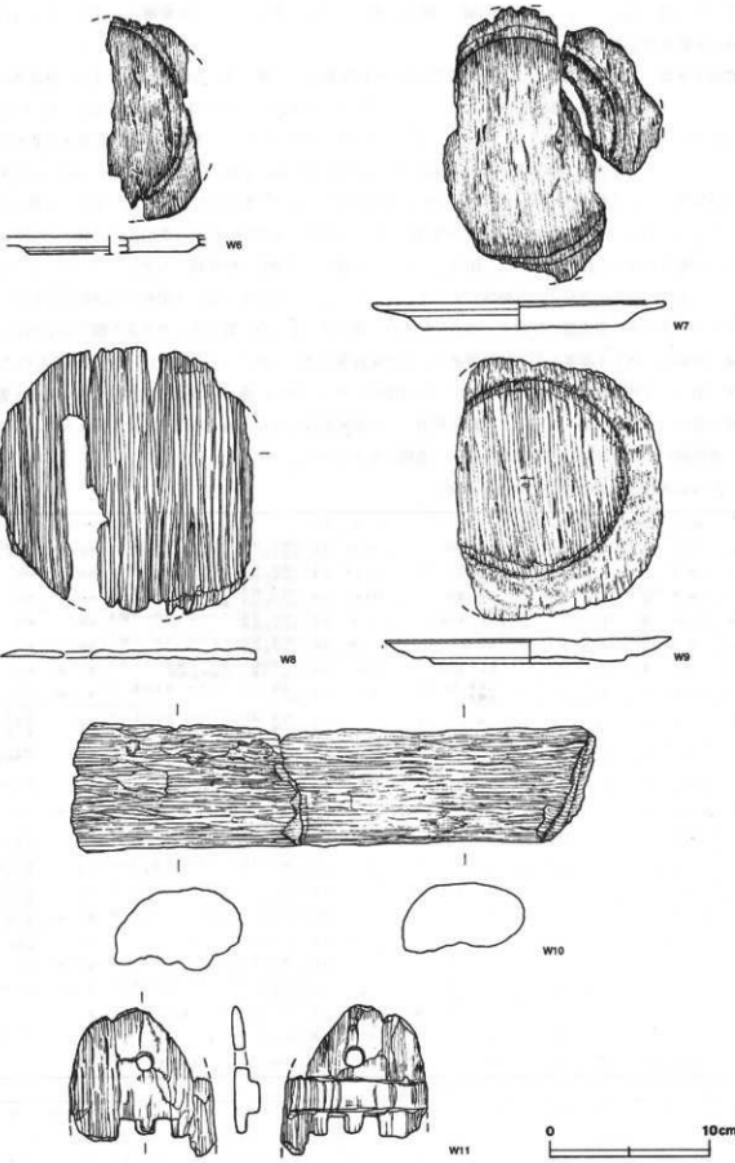
第64図 第3号流路跡出土遺物実測図(1)



第65図 第3号流路跡出土遺物実測図（2）



第66図 第3号流路跡出土遺物実測図（3）



第67図 第3号流路跡出土遺物実測図(4)

覆土 単一層である（トレーナーの第13層）。層厚は薄いが、砂や礫を含んだ自然堆積で、第1・2号流路跡と同様な堆積状況である。

遺物出土状況 土師器片1146点、須恵器片795点、灰釉陶器1点、礫11点、木製品10点のはか、攪乱等により混入したとみられる繩文土器片13点が出土している。138の土師器皿、139の土師器高台付皿や142の「子東」と墨書きされた須恵器杯は底面から出土している。143・147・150の「中」と墨書きされた須恵器杯は底面から出土している。この墨書きの字体は第2号流路跡出土の133の墨書き土器の字体と同一である。このほかに144と149の須恵器杯（この2個体の字体は同一）や146の須恵器杯も「中」と墨書きされているが、前者とは明らかに異なった字体である（146の墨書きは「串」の可能性もある）。W1の木製品の田舟は底面から、W3の木製品の挽物高台付盤は底面から出土している。田舟と共にモモの種子（37個体、野生種）が出土している。そのほかスモモ（2個体）やオニグルミ（5個体）も出土している。なお、現存率が高い未掲載の土師器の杯12点、高台付杯9点、壺2点、須恵器の杯42点、高台付杯6点、壺1点、蓋5点、盤3点、五孔式の瓶1点がある。

所見 時期は、出土土器等から8世紀後葉から9世紀後葉と考えられる。154の壺はG類に属するものである。本跡は第1・3号流路跡と同時に存在していた可能性が考えられる。極めて多量の遺物や多数の墨書き土器、須恵器の壺G、木製品の出土等から、流路を利用しての祭祀的な行為が実施された可能性が考えられ、また、3条の流路跡の中では中心的な意味合いをもつ遺構と考えられる。

第3号流路跡出土遺物観察表（第64～67図）

番号	種別	番号	口径	脚高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特徴	出土位置	備 考
135	十 鍋 壺	杯	15.0	4.6	8.0	長石・雲母	にぶい	普通	口縁部・外縁部クロナデ 内面ハラ磨き 内面裏地黒化處理	底面	20% 未掲載外縁部 [9] 8 [山]
136	土 師 器	杯	10.2	3.3	8.0	石英・長石・雲母・ 赤色粒子	にぶい	普通	口縁部・外縁部クロナデ 内面ハラ磨き 内面裏地黒化處理	底面	95% PL18
137	土 師 器	高台付 杯	12.3	4.8	7.2	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部・外縁部クロナデ 二次被燒處理	底面	95% PL18
138	土 師 器	盤	13.3	1.5	7.3	長石・青色粒子	にぶい	普通	口縁部・外縁部クロナデ 内面ハラ磨き 内面裏地黒化處理	底面	80% PL18
139	土 師 器	高台付 盤	12.3	3.2	6.2	長石・雲母	にぶい	普通	口縁部・外縁部クロナデ 内面ハラ磨き 内面裏地黒化處理	底面	95% PL18
140	土 師 器	壺	14.0	3.5	-	長石・金雲母	灰褐	普通	天井部斜面ハラ磨り 口縁部クロナデ 内面ハラ磨き 内面裏地黒化處理	腹下唇	40% PL18
141	須 恵 器	杯	14.0	5.2	7.8	石英・長石・雲母・ 赤色粒子	灰灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ 底部凹輪へ 切り	腹下唇	100% PL18
142	須 恵 器	杯	13.8	5.2	6.1	石英・長石・骨針	灰オリーブ	普通	口縁部・外縁部クロナデ 底部凹輪へハ ラ磨り	底面	95% 口・外縁部 [8] 13 [山]
143	須 恵 器	杯	14.0	4.7	7.7	石英・長石・雲母・ 青色粒子	灰灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ 底部凹輪へハ ラ磨り奥側・内縁部ハラ磨き 内面裏地黒化處理	底面	95% 口・体部 外縁部黒化處理 [中] PL18
144	須 恵 器	杯	12.7	4.8	7.0	長石・金雲母多	灰灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ 体部下唇ハラ磨 り切り盛り・内縁部ハラ磨き 内面裏地黒化處理	底面	60% 未掲載外縁部 [中]
145	須 恵 器	杯	[13.4]	4.8	7.2	長石	灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ 瓷錠初転み切 り	腹下唇	40%
146	須 恵 器	杯	[13.3]	4.6	[6.0]	長石・金雲母	灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ 体部下唇へハ ラ磨り	底面	35% 口・体部外 縁部黒化處理 [中] PL18
147	須 恵 器	杯	[12.0]	4.1	[6.4]	長石	灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ 体部下唇へハ ラ磨り	底面	35% 未掲載外縁部 [中]
148	須 恵 器	杯	-	(2.7)	7.0	長石・雲母・小穂	灰	普通	体部クロナデ・体部下唇ハラ削り 底 部多方向のハラ削り	底面	30% 未掲載外縁部 [八十七] PL19
149	須 恵 器	杯	-	(2.7)	7.2	灰石	灰	普通	体部クロナデ・体部下唇ハラ削り 底 部一方のハラ削り	腹下唇	20% 未掲載外縁部 [中]
150	須 恵 器	杯	-	(3.1)	-	長石・雲母	灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ	底面	5.5% 口・体部外 縁部黒化處理 [中]
151	須 恵 器	高台付 盤	[13.5]	(4.8)	-	長石・小穂多	灰	普通	口縁部・外縁部クロナデ 瓷錠静止糾 正	腹下唇	60%
152	須 恵 器	杯	[11.4]	5.4	6.0	長石・雲母	灰白	普通	口縁部・外縁部クロナデ 底部凹輪へハ ラ磨り	腹下唇	50%
153	須 恵 器	壺	16.9	4.7	-	長石・雲母・小穂	灰	普通	天井部斜面ハラ磨り 口縁部クロナデ	腹下唇	80% PL18
154	須 恵 器	壺	-	(6.0)	-	長石	灰灰	普通	体部クロナデ	底面	10% 壺 G 壺 PL18
155	灰釉陶器	長頸瓶	(8.5)	(0.8)	-	織密	灰	良好	口縁部クロナデ 外面輪付垂	底面	5%

番号	形 性	長さ (cm)	幅 (孔径)	厚さ (mm)	横 様	特 徴	出土地質	備 考
W1	田 舟	[97.7]	[40.7]	[10.0]	ケヤキ	一本木作り 中央部から両端部に向けて丁寧に削っている	底面	
W2	棒状木製品	50.2	[9.2]	[6.2]	不明	貫通したホゾ穴 (方形か菱形で、幅底3.0cm程) が有り	底面	建築材カ 繩文機具 (有る 見) カ
W3	棒状木製品	53.8	[5.3]	[3.2]	不明	両端部に抉り込み状の加工を施す	底面	

番号	器種	高さ(径)	幅(孔径)	厚さ	種類	特徴	出土位置	備考
W4	棒状木製品	[18.1]	[7.4]	[3.8]	不明	丸木状の木製品	底面	
W5	板状木製品	[17.9]	[12.8]	0.4	ヒノキ	糸目を利用して板状木製品	覆土中	
W6	高台付盤	口径 -	高さ(1.0)	底径 [10.2]	サクラ裏	木取り法は横木取り 搬物 剥り出し高台	底面	PL20
W7	高台付盤	口径 18.2	高さ 1.5	底径 12.4	ケヤキ	木取り法は横木取り 搬物 剥り出し高台	底面	
W8	盤	16.6	[16.1]	0.8	ヒノキ	木取り法は板目	底面	
W9	高台付盤	口径 18.0	高さ 1.5	底径 12.2	ムクロジ	木取り法は横木取り 搬物 剥り出し高台	底面	
W10	棒状木製品	[32.7]	8.0	[5.1]	ケヤキ	木取り法は芯待ち削材	底面	
W11	下盤	[8.1]	[8.1]	1.5	不明	端が丸味を帯び、足は低い	底面	

表3 種子(核)計測値一覧表

モモ

番号	縦径	横径	厚さ	備考	番号	縦径	横径	厚さ	備考
1	3.13	2.07	1.60		20	2.42	2.00	1.53	
2	2.90	2.19	1.73		21	2.93	2.25	1.64	
3	2.47	2.10	2.09		22	2.79	2.22	1.70	
4	2.65	2.23	1.77		23	2.98	2.11	1.56	
5	2.41	2.07	1.50		24	2.78	2.06	1.55	
6	2.57	1.95	1.70		25	2.57	2.12	1.62	
7	3.09	2.25	1.56		26	2.50	1.91	1.61	
8	2.57	1.88	1.60		27	2.70	2.14	1.62	
9	2.81	2.18	1.77		28	2.49	1.86	1.48	
10	2.94	2.31	1.63		29	2.60	1.76	1.44	側面に抉り有り
11	2.60	2.16	1.51		30	2.70	2.19	1.61	
12	3.18	2.28	1.63		31	2.89	2.14	1.49	
13	2.64	2.18	1.53		32	2.08	1.62	1.39	側面に抉り有り
14	2.14	1.85	1.51		33	2.00	1.56	1.36	
15	2.77	2.21	1.66		34	2.49	1.90	1.45	
16	2.84	2.35	1.72		35	1.85	1.51	1.38	
17	2.59	2.13	1.69		36	2.26	1.92	1.49	上部に抉り有り
18	3.28	2.79	2.55		37	2.27	2.07	1.75	上部に抉り有り
19	2.69	2.01	1.48						

クルミ

番号	縦径	横径	厚さ	備考	番号	縦径	横径	厚さ	備考
1	3.60	2.81	2.72		4	2.98	2.47	2.36	
2	3.70	2.87	2.76		5	3.27	2.68	2.53	
3	2.78	2.30	2.17						

スモモ(ミロバラン)

番号	縦径	横径	厚さ	備考	番号	縦径	横径	厚さ	備考
1	1.19	1.05	0.79		2	1.69	1.12	0.80	側面に抉り有り

4 その他の遺構と遺物

今回の調査で時期不明の土坑32基を確認した。これらの遺構については、全体図に掲載し、一覧表で示すこととする。

(1) 土坑

表4 北田遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) 長径(輪)×短径(輪)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (時期・折→日)
1	C 1c0	N - 64° - E [南北]	楕円形	2.16 × 0.92	17	緩斜	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
2	C 1d0	N - 37° - W	楕円形	1.58 × 1.40	16	緩斜	平坦	自然	縄文土器片, 四石	縄文時代中期中葉
3	C 1d9	N - 31° - E	楕円形	1.48 × 1.29	38	緩斜	段状	自然		
4	C 1d8	N - 27° - E	楕円形	2.52 × 2.05	94	緩斜	段状	自然	縄文土器片 (深鉢・浅鉢)	縄文時代中期中葉
6	C 1e0	N - 67° - W	不定形	1.63 × 1.26	26	緩斜	圓状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
7	C 1e9	N - 53° - E [南北]	不規則 楕円形	2.88 × 2.50	65	外傾	段状	自然	縄文土器 (深鉢)	縄文時代後期前葉 SK-30→E
8	C 1c8	N - 44° - W	円形	2.07 × 1.97	50	緩斜	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
9	C 1c7	N - 79° - E	不定形	1.57 × 0.70	75	外傾	段状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
10	C 1e6	N - 47° - E [南北]	楕円形	2.10 × 1.50	20	緩斜	段状	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
11	C 6b7	N - 77° - W	不定形	2.14 × 1.77	25	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
12	C 1a8	N - 62° - W	不定形	2.45 × 1.83	42	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
13	C 1b9	N - 76° - W	楕円形	1.31 × 0.99	17	緩斜	圓状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
14	C 1a8	N - 77° - W [内]	不規則	2.55 × 2.10	30	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
15	C 1a6	N - 23° - W	楕円形	2.21 × 0.75	20	緩斜	圓状	自然		
16	C 1b8	N - 10° - E	不定形	2.13 × 1.20	16	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SK-17→E
17	C 1b8	N - 86° - E [南北]	楕円形	1.83 × (1.22)	59	外傾	平坦	自然	縄文土器 (深鉢)	縄文時代中期 本跡+SK-16
18	C 1a7	N - 48° - E	楕円形	1.15 × 0.94	15	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
19	C 1e0	N - 0°	不定形	2.10 × 1.78	33	緩斜	圓状	自然	土師器 (甕)	古墳時代後期
20	C 1b0	N - 75° - W [楕円形]	1.38 × [0.99]	38	緩斜	段状	自然	土師器 (环・高坏)	古墳時代後期 SK-21→本跡	
21	C 1b0	N - 50° - W [楕円形]	1.00 × (0.75)	20	緩斜	圓状	自然	縄文土器片	古墳時代中期 本跡+SK-20	
22	C 1a6	-	円形	0.94 × 0.86	38	緩斜	圓状	自然	縄文土器片, 石皿 (未掲載)	縄文時代中期
23	B 1j7	-	円形	0.70 × 0.63	25	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期
24	B 1j8	-	円形	0.62 × 0.58	55	垂直	圓状	自然	縄文土器片	縄文時代中期
25	B 1j8	-	円形	0.74 × 0.72	38	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期
26	C 1e0	N - 84° - W	楕円形	0.95 × 0.58	23	緩斜	圓状	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
27	C 1b4	N - 45° - E	楕円形	1.37 × 0.55	17	外傾	段状	自然		
28	C 1a8	N - 42° - E	不定形	3.17 × 0.65	20	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
29	C 1c4	N - 5° - E	不定形	1.95 × 1.00	20	緩斜	凸凹	自然		
30	B 1j7	N - 90° - E	楕円形	0.97 × 0.41	41	外傾	圓状	自然		
31	B 1l7	N - 19° - E [楕円形]	(1.34) × 0.96	14	外傾	圓状	自然	縄文土器片	縄文時代中期	
32	C 1f8	N - 76° - W [楕円形]	2.28 × (1.12)	58	緩斜	平坦	自然	縄文土器片, 破 (未掲載の黒曜石2)	縄文時代中期後葉	
33	C 1b9	-	円形	0.63 × 0.61	26	垂直	圓状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
34	B 1j9	N - 53° - E [南北]	楕円形	1.77 × 0.70	13	緩斜	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期
35	C 1a7	N - 79° - E	楕円形	1.29 × 0.95	36	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期
36	C 1b6	N - 58° - W	不定形	3.25 × 1.09	70	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
37	C 1a5	N - 44° - W	楕円形	1.68 × 1.48	14	外傾	平坦	自然		
38	B 1j6	N - 20° - W	楕円形	1.70 × 0.98	11	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期中葉
39	C 1d9	N - 50° - E	不定形	3.25 × 1.09	70	垂直	平坦	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期 本跡+SK-7
40	B 1j5	-	円形	0.80 × 0.76	34	外傾	凸凹	自然		
41	C 1a0	N - 16° - W	楕円形	2.98 × 2.70	40	緩斜	凸凹	自然	縄文土器片, 破 (未掲載の磨石1)	縄文時代中期
42	C 1a9	N - 79° - E	不定形	2.35 × 1.84	18	外傾	凸凹	自然	縄文土器片, 破	縄文時代中期
43	B 1g0	N - 60° - W [楕円形]	2.10 × (0.81)	30	緩斜	圓状	自然	縄文土器片, 石鐵	縄文時代中期 本跡+SK-1号 遺物包帯と重複	
44	A 4j7	N - 65° - E	楕円形	2.42 × 1.06	54	外傾	圓状	自然		
45	B 5d3	N - 21° - W	楕円形	1.30 × 0.88	18	緩斜	圓状	自然		
46	A 4j6	N - 33° - W	不定形	4.15 × 3.83	50	外傾	凸凹	自然	縄文土器 (基台), 廃棄石群, 刃石, 破 (未掲載の当石3)	縄文時代中期中葉 本跡+SK-14

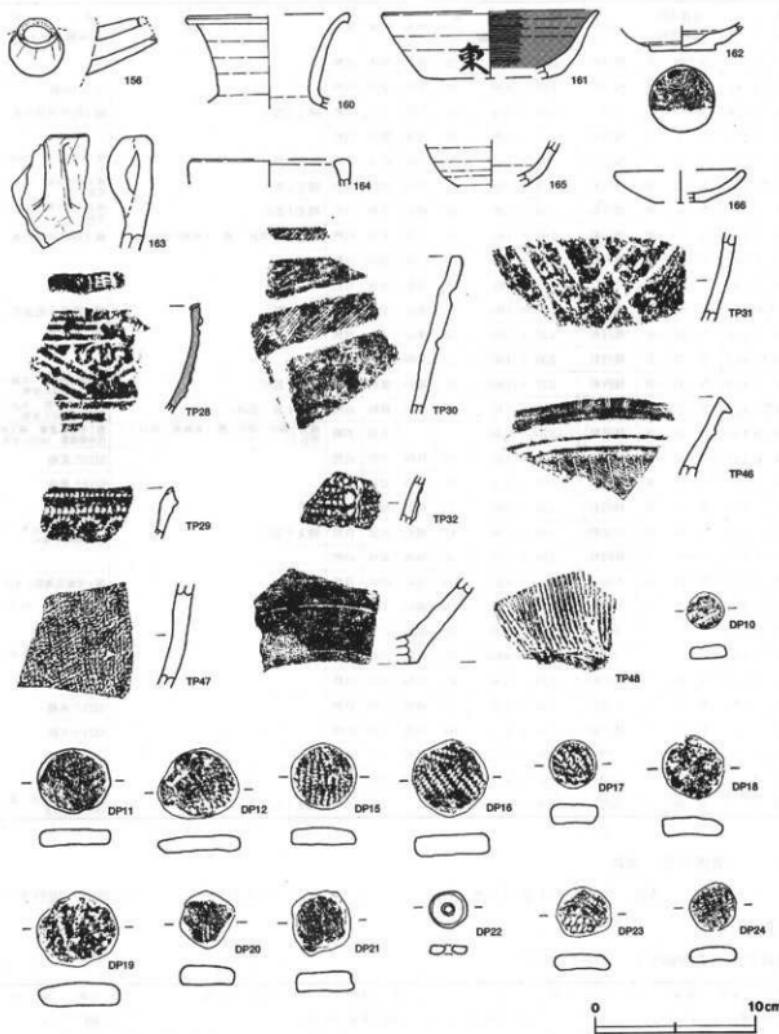
番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m) 長径(輪) × 短径(輪)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 (時期・新・旧)
46	B 5 e5	N - 76° - W	楕円形	0.65 × 0.50	25	緩斜	皿状	自然		
49	B 5 e6	N - 18° - W	楕円形	1.04 × 0.60	19	垂直	平坦	自然		SI 7 → 本跡
50	B 4 c8	-	円形	0.96 × 0.94	60	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代後期前葉
51	B 4 c8	N - 3° - E	楕円形	1.63 × 1.29	28	外傾	皿状	自然		
52	B 4 c8	N - 73° - E	楕円形	2.55 × 1.65	52	外傾	段状	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SI 1 →
53	B 4 d8	N - 22° - W	【楕円形】	1.70 × 1.48	43	外傾	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SK54 と 重複
54	B 4 d7	N - 83° - W	楕円形	1.55 × 1.26	45	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SK53 と 重複
55	B 4 a6	N - 2° - W	楕円形	1.67 × 1.61	45	外傾	平坦	自然	縄文土器 (漆跡)、縄 (未発見の凹石 3)	縄文時代中期中葉
56	B 5 d2	N - 46° - W	楕円形	1.16 × 1.04	17	外傾	皿状	自然		
57	B 5 d2	-	円形	1.05 × 1.01	15	外傾	皿状	自然		
58	B 4 c5	N - 69° - W	楕円形	1.19 × 1.03	47	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期後葉
59	A 4 j6	N - 67° - E	楕円形	1.27 × 1.05	52	垂直	平坦	自然		SI 14 → 本跡
60	A 4 l7	N - 53° - E	楕円形	2.30 × 1.80	22	外傾	凸凹	自然		
61	A 4 j8	N - 45° - W	楕円形	2.77 × (1.85)	18	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SI 6 → SK62 と重複
62	A 4 j8	N - 37° - E	不定形	2.00 × 1.10	25	緩斜	皿状	自然	縄文土器 (漆鉢)	縄文時代中期 不規→ SI 6 → SK62 と重複
63	B 4 b5	N - 25° - W	【楕円形】	[2.70] × [2.35]	-	-	平坦	不明	縄文土器片、漆片、縄 (未発見の凹石 1)、 未発見の石器、漆鉢 (未発見の漆石 1)、 未発見の漆器	縄文時代中期後葉 SI 6 → SK62 と重複
64	B 4 a8	N - 87° - E	楕円形	1.30 × 1.15	20	外傾	平坦	自然		SI 22 と重複
65	A 4 i5	N - 8° - W	楕円形	1.35 × 1.26	35	外傾	皿状	自然		SI 12 と重複
66	A 4 j5	N - 55° - W	楕円形	2.25 × 1.95	35	緩斜	皿状	自然		SK67 と重複
67	A 4 j5	N - 54° - W	【不定形】	(1.80) × 1.70	42	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期後葉 SI 4 → SK66 と重複
69	B 4 b5	N - 8° - E	【楕円形】	1.90 × 1.57	25	外傾	皿状	自然		
70	B 5 a2	N - 75° - E	不定形	2.00 × 1.54	118	外傾	皿状	自然		第 1 号配石遺構と重複
71	B 4 b8	N - 35° - E	不定形	1.96 × 1.70	28	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SI 22 → 本跡 → SI 1・20
72	B 5 c2	-	円形	1.30 × 1.20	28	緩斜	平坦	自然		SI 15 → 本跡
73	B 4 b9	-	【円形】	0.95 × (0.84)	67	外傾	段状	自然	縄文土器片	縄文時代中期 SI 20 →
74	B 4 a8	N - 20° - W	不定形	1.25 × 1.10	65	外傾	段状	自然		SI 22・23 → 本跡
75	A 4 i7	N - 80° - W	不定形	2.53 × 1.50	45	緩斜	平坦	自然		SI 23 と重複
76	B 5 b1	N - 5° - W	楕円形	1.53 × 1.35	60	外傾	平坦	自然		SI 21 → 本跡
77	B 5 d2	-	円形	1.15 × 1.15	50	外傾	平坦	自然		
78	B 5 d2	-	円形	1.40 × 1.34	32	外傾	平坦	自然		
79	B 4 b6	N - 88° - E	【楕円形】	[2.90] × [2.50]	-	-	平坦	不明	縄文土器片	第 2 号配石遺構 縄文 時代中期後葉

(2) 遺構外出土遺物

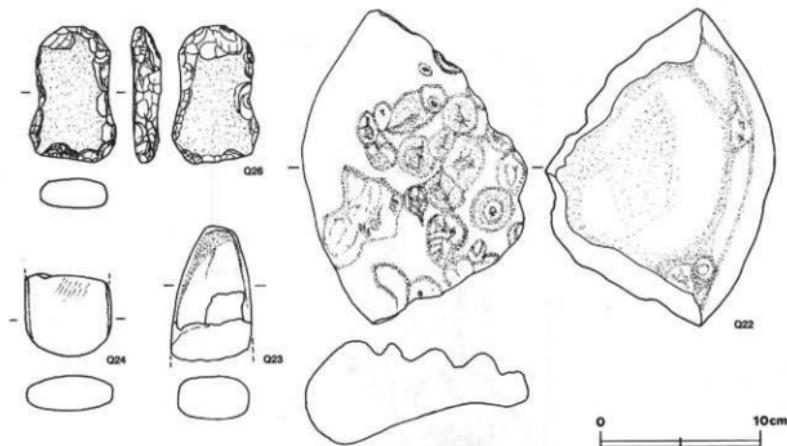
今回の調査で、遺構に伴わない土器や石器が出土している。これらの出土遺物については実測図と観察表で掲載する。

遺構外出土遺物観察表 (第68・69図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特徴	出土位置	備 考
156	縄文土器	往 口	-	(3.5)	-	石英・長石・黒母	にい青褐	普通	注口盤ナデ	A区表探	5%
160	瓶 席 器	長頭瓶	[10.0]	(5.8)	-	織密	灰	良好	口盤部ロクロナダ 内・外表面自然釉付着	D区表探	5% 稲穂丸座
161	土 席 器	耳	[13.4]	4.1	[8.5]	長石・黒母	にい青	普通	口盤部ロクロナダ 内面ヘラ磨き 内面褐色風化	E区表探	10% 体部外表面自然釉付着「裏」
162	土 席 器	小 里	-	(1.7)	3.0	赤色粘土	浅黄褐	普通	胎部ロクロナダ 並部側面舟切り	D区表探	30%
163	土 席 器	内耳罐	-	(7.0)	-	石英・長石・黒母	明赤褐	普通	耳部ナダ 外面部擦付着	E区表探	5%
164	青 瓶 塵	瓶	[10.0]	(1.7)	-	織密	灰白	良好	内・外全面施釉 (胎は明緑灰色)	E区表探	5%
165	陶 器	天 目	-	(3.0)	-	織密	にい青	良好	底部ロクロナダ 体部外底面下位施釉 施釉付	D区表探	5%



第68図 遺構外出土遺物実測図（1）

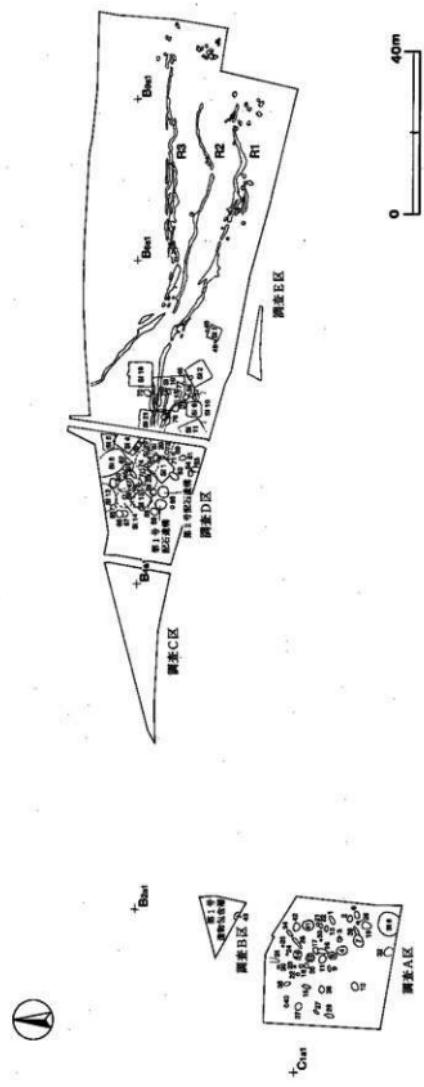


第69図 遺構外出土遺物実測図（2）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特徴	出土位置	備 考
166	陶 器	小 盆	[8.0]	2.0	[3.0]	綈窓	灰 黑	良好	全体クロコナメ 体部外側下位漏船 粘付有 「輪は内輪」	E区表探	5% 露出率
TP28	純文土器	鉢	-	(6.5)	-	石英・長石・雲母・ 鐵磁	明赤褐	普通	口沿部に點打を施す。蓋部に分離窓あり。口縁 部に内側漏船有り。蓋部上部に窓孔有り。口周付支	A区表探	
TP29	純文土器	深 鉢	-	(3.0)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	輪動沈縫文を施す。または波状に	A区表探	
TP30	純文土器	深 鉢	-	(9.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部に漏船有り。口縁部沈縫で区画。区画内 部に内側漏船文	A区表探	
TP31	純文土器	深 鉢	-	(5.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	沈縫で区画。区画内に刺突列点文と透窓施文	A区表探	
TP32	純文土器	深 鉢	-	(3.0)	-	石英・雲母	にぶい青褐	普通	盖部上部に漏船による押圧。沈縫と單筋純文（透 窓）	A区表探	
TP46	須 悪 器	甕	-	(5.0)	-	石英・長石	灰	普通	腹部に9本横筋による波状文	D区表探	
TP47	須 悪 器	甕	-	(6.3)	-	石英・長石・小堆	灰	普通	腹部外側丸子状の叩き目	D区表探	
TP48	陶 器	盤 鉢	-	(5.5)	-	砂粒	赤褐	普通	内面裏方向の擦り目	E区表探	雪滑走

番号	器種	長さ (往)	幅 (孔径)	厚さ	重 量	材 質	特 譴	出土位置	備 考
DP10	土器片円錐	24	22	0.8	4.4	土	表面に沈縫 裸面研磨	A区表探	
DP11	土器片円錐	4.0	4.5	1.0	20.8	土	表面摩滅 表面に单筋波しの純文か 裸面研磨	A区表探	
DP12	土器片円錐	4.3	5.0	0.9	22.0	土	表面单筋R Lの純文 裸面研磨	A区表探	
DP15	土器片円錐	4.1	4.1	1.0	20.7	土	表面单筋R Lの純文 裸面研磨	D区表探	
DP16	土器片円錐	4.7	4.6	1.2	30.8	土	表面单筋R Lの純文 裸面研磨	D区表探	
DP17	土器片円錐	3.0	3.0	1.1	11.0	土	表面单筋R Lの純文 裸面研磨	D区表探	
DP18	土器片円錐	4.0	3.8	1.1	16.5	土	表面摩滅のため純文の施文不明 裸面研磨	D区表探	
DP19	土器片円錐	4.7	5.1	1.3	31.3	土	表面摩滅のため純文の施文不明 裸面研磨	D区表探	
DP20	土器片円錐	3.1	3.3	1.2	14.0	土	表面摩滅のため純文の施文不明 裸面研磨	D区表探	
DP21	土器片円錐	3.7	3.6	1.2	17.0	土	表面純文 裸面研磨	D区表探	
DP22	土器片円錐	2.3	2.3	0.6	3.0	土	中央部に孔あり 孔径0.4cm 裸面研磨	E区表探	
DP23	土器片円錐	3.1	3.4	1.0	10.2	土	表面单筋R Lの純文 裸面研磨	E区表探	
DP26	土器片円錐	3.0	2.9	0.9	8.0	土	表面单筋R Lの純文 裸面研磨	E区表探	
Q22	四 石・石 砂	(19.2)	(14.4)	6.3	(1173.5)	安山岩	表面に26穴孔。底の機能面の周囲に縫を有し、 機能面が凹む	A区表探	
Q23	磨 制 石 砂	(8.2)	5.1	2.6	(167.6)	砂砾岩	刃部久経	A区表探	
Q24	磨 制 石 砂	(5.2)	5.5	2.2	(86.8)	安山岩	基部欠損	A区表探	P1.20
Q26	打 制 石 砂	8.3	5.4	1.8	110.5	安山岩	分割面 背圧による剥離 抵り部は浅い	D区表探	

第70図 北田道路全体図



第4節 まとめ

北田遺跡の調査成果を時代ごとに述べてまとめとする。

1 繩文時代

堅穴住居跡6軒、土坑45基、配石遺構2基、遺物包含層1か所がこの時代の遺構である。

住居跡の時期は

阿玉台II～III式期・・・第6号住居跡

加曾利E I式期・・・第8・12・22号住居跡

加曾利E IV式期・・・第14・23号住居跡

で、炉は第8・14・23号住居跡で確認されている。第8・14号住居跡は埋甕炉で、第23号住居跡は炉体土器を伴う石組炉であるが、複式炉が退化したような形状である。土坑は繩文時代中期中葉から後葉に位置付けられるものが43基、後期に位置付けられるものが2基である。この時代の遺構はA区の東側、B区全体、D区東側から確認され、E区からは確認されていない。E区からは繩文土器片の出土もないことから、集落や土坑群はA・B・D区を結んだ弧を描くようなラインの内側から南に延びるように広がると思われる。繩文時代中期中葉に位置付けられる県内の土坑にはフ拉斯コ状土坑が数多く見られ、しかも群存化する傾向がある¹⁾。しかし、当遺跡ではそのような傾向はみられない。フ拉斯コ状土坑の機能として、貯蔵用の穴と考えるのが一般的であるが、当遺跡の立地する環境（掘ると湧水しがちな場所）が作らさせなかつた可能性が考えられる。

遺物は、表掲で前期の関山式土器、遺構に伴って中期の阿玉台式土器、加曾利E式土器、後期の称名寺式土器が出土している。阿玉台式土器、加曾利E式土器の中には、東北地方の大木8a式土器の影響を受けているものも見られる。第8号住居跡から出土した土偶はハート形土偶の左足と考えられるが、流れ込んだものと思われる。石器類は、蔽石を兼ねた磨石や凹石（石皿兼用のものもある）、磨製石斧は多數出土しているが、石鏃と打製石斧は調査区内でそれぞれ1点ずつしか出土していない。これはそれぞれの石器の用途と考えられる狩猟や土掘りに、何か別の有機質のものを利用したのではないかと考えられる。

2 古墳時代

堅穴住居跡13軒、土坑2基がこの時代の遺構で、当集落の中心となる時期である。住居跡はD区の東側、E区の西側の限られた範囲の中で、土坑はA区の西側で確認されている。

(1) 集落について

出土土器と重複関係から大きく2期に分けられる。

第1期（6世紀前半）

第5・16号住居跡と第19・20号土坑が該期の遺構である。第5号住居跡の規模は不明である。第16号住居跡は一辺が8~8.2mの方形で、当遺跡で最大の規模で、焼失住居である。赤彩された杯や脚の短く「ハ」の字状に開く高杯が出土している。

第2期（6世紀後半）

第1~4・10・11・13・15・19・20・21号住居跡が該期の遺構である。住居跡の形態や施設等についてみると、規模は大体一辺5~6mの方形である。第13号住居跡が一辺4mの方形で規模は小さく、第10・21号住居跡は一辺7m前後の方形で規模は大きい。壁溝は第2・10・11号住居跡を除いて全周又は一部にみられる。竈

は調査区域外に延びているものや重複しているものがあるが、すべての住居に付設されていたと考えられる。第13・20号住居跡は共に、角柱状の花崗岩を両側に立てて、その上に角柱状の花崗岩を乗せて焼き口部としている構造である。時期は当遺構より少し古くなるが、真壁町の南椎尾八幡前遺跡第30号住居跡の龜構造と類似している²⁾。貯蔵穴は確認できなかったものもあるが、龜側のコーナー部に設けられているものが多い。出入口施設の区画の中に設けられているものや、すぐ脇に設けられているものもわずかにある。また、焼失住居が11軒中7軒を占めている。重複関係からさらに2期に細分も可能と考えられるが、土器の形態変化からはさほどの相違は見られない。杯は黒色処理されたものがかなりの比率でみられる。瓶は鉢形の大形と小形のものがみられる。第10号住居跡からは、未掲載のものも含めて7点の大形高杯が出土している。また、出土土器のはほとんどが土師器の杯と高杯の供應具であることから、何らかの祭祀的意味合いのある遺構と考えられる。土器はほとんどが土師器で、この時代の可能性がある須恵器片はわずかに1点である³⁾。

(2) 古墳時代の炭化材について

第20号住居跡出土の柱材について樹種同定結果を基に、県内で古墳時代（4世紀～7世紀）に位置付けられた住居跡から出土した炭化材について考えてみたい。その樹種は、次の表5の通りである⁴⁾。世紀毎に樹種の相違は見られず、クヌギ節とコナラ節が一般的である（7世紀は分析事例が少ないので幾分多様な樹種が確認され、クヌギ節とコナラ節が一般的であるとも言えない）。表5の結果からみると、コナラ亜属クヌギ節が約52%、コナラ亜属コナラ節が約18%、合わせると実に70%の比率で住居構築材を占めている（当遺跡の結果を含めない）。樹種の相違は地域性を表し、沿海周辺では、アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹が多く利用され、内陸部ではクヌギ節・コナラ節等の落葉広葉樹を主とした種類構成が見られるとの指摘がある。また、住居構築材の用材は、基本的に遺跡周辺の植生を反映していると考えられている。当遺跡の第20号住居跡の柱材として、コナラ属アカガシ亜属とシロダモの丸木が利用されている。共に常緑広葉樹で、県内では一般的な材木である。コナラ属アカガシ亜属の出土遺跡は、水戸市の白石遺跡、鉢田町の平出久保遺跡、北浦町の炭焼遺跡・木工台遺跡等が挙げられ、沿岸地域に位置する遺跡である。平安時代と時期は下がるが、やや内陸の常北町の前側遺跡からコナラ属アカガシ亜属の一類が出土している。付章の分析結果によると、平安時代であるが流路跡から木本花粉として、かなりの割合でコナラ属アカガシ亜属の花粉が出土していることから、平安時代においてもこの樹種の植生がみられたと思われる。しかし、住居の柱材としてシロダモの使用例は表からは見られない。既述したように住居構築材は大形であることから現地性の高い遺物といわれ、当遺跡周辺には常緑広葉樹が生育していたことが指摘できる。内陸部が落葉広葉樹を主とした住居構築材の種類構成をとる中で、コナラ属アカガシ亜属とシロダモの共に常緑広葉樹であることは、真壁町のような内陸地内では異質と言える。

表5 古墳時代の炭化材出土住居跡一覧表

4世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名	番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名
1	水海道市	真山A	S I - 2	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	4	岩井市	鰐ヶ谷津	S I - 1	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	岩井市	北前	S I - 29	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節				S I - 12	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	岩井市	高崎貝塚	S I - 3	柱材 住居構築材	ハンノキ属 タケ亜属	5	茨城町	南小別	S I - 60	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
									S I - 61	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

5世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名	番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名
1	つくば市 島名町	S I - 77	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節		4	牛久市	ヤツノ上	S I - 36	柱材	コナラ属コナラ至属コナラ節
			住居構築材	コナラ属コナラ至属コナラ節		5	牛久市	牛久山	S I - 4	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 79	住居構築材	コナラ属コナラ至属コナラ節					S I - 8	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
2	つくば市 谷田基跡	S I - 3	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節					S I - 27	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 22	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節		6	牛久市	東山	S I - 65	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
			住居構築材	コナラ属コナラ至属コナラ節		7	牛久市	馬場	S I - 16	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
3	牛久市 中久喜	S I - 12	柱材	コナラ属コナラ至属クメギ節					S I - 26	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 15	柱材	コナラ属コナラ至属クメギ節					S I - 43	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 23	柱材	コナラ属コナラ至属コナラ節		8	鉾田町	平出久保	S I - 38	住居構築材	ムクロジ
4	牛久市 ヤツノ上	S I - 13	樹幹材又は 根状材	コナラ属コナラ至属クメギ節						住居構築材	イヌガヤ
			天井材	タケ延長						住居構築材	コナラ属アカガシ延長
		S I - 19	柱材	コナラ属コナラ至属クメギ節		9	阿見町	実教寺子	S I - 12	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 21	不明	コナラ属コナラ至属クメギ節		10	美城町	南小原	S I - 90	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 23	樹幹材	タケ葉片						住居構築材	ハンノキ属
		S I - 26	建築材	コナラ属コナラ至属コナラ節						住居構築材	クリ
		S I - 36	柱材	コナラ属コナラ至属クメギ節						住居構築材	コナラ属アカシ延長

6世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名	番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名
1	つくば市 島名焼松	S I - 17	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節		4	牛久市	馬場	S I - 13	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 22	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節		5	常北町	上入野	S I - 17	柱材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 28	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節		6	北浦町	荒地	S I - 18	住居構築材	コナラ属アカガシ至属
2	谷和原村 西ノ島	S I - 1	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節					S I - 29	住居構築材	ハンノキ属
		S I - 11	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節		7	阿見町	星合	S I - 5	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節
		S I - 13	住居構築材	コナラ属コナラ至属コナラ節		8	美城町	南小原	S I - 10	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節

7世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名	番号	市町村	遺跡名	遺構名	用途	樹種名
1	水戸市 白石	S I - 1	住居構築材	コナラ属アカガシ延属		3	北浦町 木工台	S I - 57	住居構築材	コナラ属アカガシ延属	
			住居構築材	ヒノキ属似似						住居構築材	スタジイ
			住居構築材	コナラ属アカガシ延属クメギ節						住居構築材	サクラン
2	北浦町 木工台	S I - 7	住居構築材	コナラ属コナラ至属コナラ節				S I - 157	住居構築材	コナラ属コナラ至属クメギ節	
		S I - 57	住居構築材	エノキ属						住居構築材	ムクロジ
			住居構築材	コナラ属コナラ至属コナラ節						住居構築材	クリ

3 奈良・平安時代

堅穴住居跡2軒と流路跡3条がこの時代の遺構である。第7号住居跡は出土遺物が少なく時期は不明である。第9号住居跡は8世紀後葉、3条の流路跡は若干の時期差が見られるが、8世紀後葉から9世紀後葉の時期と考えられる。3条の流路跡からは、極めて多量の遺物（土師器・須恵器・木製品等）や種子が出土している。遺物数は土師器2076点、須恵器2141点、灰陶陶器片1点、流木を含む木器・木製品15点である。また、調査E区の東側を中心にかなり多量の大小様々な礫が出土している。これは奈良・平安時代の項目のところでも触れたが、加波山や足尾山を中心当遺跡の東側に位置する山々からの土石流によってたらされたものであろうと考えられる。それがある程度埋まった段階で川筋となったものが今回調査した流路跡と考えられる。群

馬県の日高遺跡⁵⁾や岐阜県の弥勒寺西遺跡⁶⁾、長野県恒川遺跡群⁷⁾等の流路跡はかなり大規模であるが、形態や遺物の出土状況は当遺跡のものに類似している。流路跡の出土遺物について、項目立てをしてまとめたい。

(1) 土器

当遺跡から出土した土器は、土師器・須恵器・墨書き土器である。須恵器の大部分は新治窯のものであるが、中には、水戸市の木葉下窯のものや、底部が回転糸切りの杯や高台付杯も見られ、他地域からの搬入品と考えられる。また、壺Gや円面鏡も出土している。墨書きの証文は「中」「子東」「八十」「串」等が見られる。県内での壺Gの出土例については、箕輪健一氏が集成を実施し、「官衙関連遺跡や奈良・平安時代の拠点的な集落跡から出土している⁸⁾」と捕らえている。

(2) 種子

当遺跡は据ると湧水しがちな湿地性の場所である。そのため比較的数多くの種子が遺存している。その種子の種類を同定した結果、モモ・スマモ・オニグルミの種子であることが判明した。種子は植物学的には核と言ふ。モモは核の大きさから栽培されていたものではなく、野生種のものと判断される。古墳時代の第19号住居跡からも出土している。これらの種子はそれぞれ食料として利用されているが、モモは祭的な行為でも利用されている。スマモ（ミロバラン）は日本産のものではなく、中国産の種類と判断される。

(3) 木製品

当遺跡出土の木製品は田舟、挽物の高台付盤、蓋、下駄や棒状木製品である。田舟の出土例としては鹿嶋市の豊郷条里遺跡⁹⁾がある。高台付盤の出土例としては水戸市の砂川遺跡第1号井戸遺物¹⁰⁾がある。当該期の下駄の出土例は鹿嶋市の宮中条里遺跡¹¹⁾や豊郷条里遺跡等がある。宮中条里遺跡や豊郷条里遺跡は鹿島郡衙に伴う条里と考えられる。W 2・3の棒状木製品は水戸市の大塚新地遺跡第2号井戸状遺構からの出土遺物¹²⁾に類似している。大塚新地遺跡は郷衙と考えられている。W 3の棒状木製品は鹿嶋市豊郷条里遺跡出土の紡績機具（布巻具？）¹³⁾に類似しているように思われる。このように、県内の木製品の出土遺跡は、地方官衙（郷衙）や地方官衙に伴う条里遺跡等である。W 2・3・4・10は使用目的の不明な棒状木製品と捕らえているが、機械具に関わる遺物の可能性も考えられる¹⁴⁾。当遺跡出土の木製品の樹種名は田舟がケヤキ、高台付盤がヒノキとケヤキ、ムクロジ、蓋がヒノキ等で、現地で採取可能な木材である。ケヤキは木目が美しく重硬で狂いが少なく、保存性の高い木材である。ヒノキは緻密で水湿に強く加工が容易な良材である。このように木製品を作る時、現地の木材の材質をよく捕らえ、選択して利用していたと考えられる。また、挽物については、飯塚武司氏により「挽物容器を出土する遺跡は、（中略）地方官衙・公的機関や有力集団の居宅に伴う例や、律令的祭祀に伴う出土例、木工生産遺跡からの出土に限られており、一般的な集落遺跡からの出土例はほとんどみられない¹⁵⁾」との指摘がある。

以上のように、当遺跡から壺Gや円面鏡、モモを始めとする種子、木製品等が出土していることを考えると、当遺跡の流路跡も単なる流路と考えるよりも、祭祀的な意味合いを持った遺構と考えられる。また、飯塚氏の指摘の中にある官衙という観点で、当遺跡周辺を見てみると、常陸国は律令制の郡として11郡を数える。当遺跡周辺は、真壁郡（白壁郡）に属していた。真壁郡の下に7郷があり、当遺跡周辺は真壁郷に属していた。豊崎卓氏によると、真壁町付近の条里制について、伊佐々条里・柴尾条里・桜井条里の存在を指摘している¹⁶⁾。当遺跡周辺は「古城」という地名であるが、この名称が中世まで溯源るのは明確であるが、それ以上溯るかはまだ不明である。まだ真壁郡衙の想定場所が分からず、郷と考えられるような調査遺跡も現在のところ存在せず、官衙との関連等については何も言えない。

4 中世

中世の遺構は確認されず、当遺跡の北300mの地点に位置する国指定史跡真壁城との関連は不明である。遺物は、表土から土師質土器の内耳鍋や小皿、常滑産の捕鉢、古瀬戸と考えられる小皿等が出土している。

註

- 1) 黒澤秀雄「茨城県の縄文時代中期のフラスコ状土坑について」『J研究ノート』3号 茨城県教育財団 1994年6月
- 2) 吹野富美夫「(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書ー小山遺跡・八幡前遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告』第99集 1995年3月
- 3) 福山林蔵「4 祭器」『古墳時代の研究』3 1991年3月 福山氏によると「6世紀代になると祭祀遺跡からの須恵器は少なくなり、土師器あるいは手捏土器が使用される」との指摘がある。時期は当遺跡より古くなる(5世紀後半)が、つくば市の谷田部塗遺跡の第1号土坑から高杯17点が出土し、中層まで埋め戻した後に一括投棄したような様相を示しているとしている。この遺跡から古墳時代の須恵器は出土していない。このような点から、在地の土師器の高杯を利用しての祭祀行為が行われると須恵器が遺跡内に入ることを拒否する何らかの意識があったのではないかだろうか。
- 4) 当教育財団が調査した遺跡で、パリノ・サーヴェイ株式会社の分析結果による。
- 5) 平野進一他『日高遺跡・関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集-』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年3月
赤生時代後半の水田跡が確認できた遺跡として著名であるが、9世紀代の溝から、木製の下駄・札・斎串・皿・折敷・曲物・杭等が多数出土している。
- 6) 関市教育委員会『弥勒寺西遺跡』現地説明会資料 2002年7月
当遺跡は、地中に埋没していた谷川から一万余点の遺物が出土している。その中には、祭祀に用いられた斎串や人形などの木製品や「大寺」「寺」「厨」等の墨書き土器、繩口羽、鐵鋤が含まれている。
- 7) 社団法人長野県史刊行会『長野県史 考古資料編』1988年3月
自然流路から木簡や祭祀具とともに挽物皿・曲物・割物盤・樋等が出土し、祭祀行為の一括廻棄の可能性を指摘している。また、伊那郡街と考えられている集落である。
- 8) 笠輪健一『鹿の子・鹿の子地域の調査報告II-』石岡市教育委員会 1997年3月
同氏に寄れば、石岡市の鹿の子C遺跡及び周辺の鹿の子遺跡、水戸市の振遺跡・堤内遺跡、八郷町の半田原遺跡、緑和町の北新田A遺跡、江戸崎町の思川遺跡を挙げている。そのほかに、つくば市の柴崎遺跡・熊の山遺跡等がある。熊の山遺跡では胎土分析を実施し、静岡県助宗窯出土土器の分析値が一番近いと指摘している。
萩野谷悟「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(N)-柴崎遺跡II区・III区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集 1994年9月
小島敏也「(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書II-熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第133集 1998年3月
- 9) 森下松寿他「鹿島湖岸北部条里遺跡II-豊郷条里遺跡須賀I地区-」『鹿島町の文化財』第31集 茨城県鹿島町教育委員会 1983年3月 この鹿島市豊郷条里遺跡からは舟形木製品も出土している。
本田勉他「鹿島湖岸北部条里遺跡N-宮中条里遺跡爪木I地区、豊郷条里遺跡須賀II地区・七反田遺跡-」『鹿島町の文化財』第38集 茨城県鹿島町教育委員会 1984年3月 当遺跡出土程度の小形のものは割物の禮との考え方もある。鈴鹿八重子他「御山千軒遺跡-東北新幹線関連遺跡発掘調査報告N」『福島県文化財調査報告書』第109

集 1983年3月

- 10) 佐藤正好他 「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書4 - 砂川遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第39集 茨城県鹿島町教育委員会 1982年3月
- 11) 田口崇 「鹿島湖岸北部条里遺跡V - 宮中条里遺跡爪木Ⅱ地区 - 」『鹿島町の文化財』 第39集 茨城県鹿島町教育委員会 1984年3月
- 田口崇 「鹿島湖岸北部条里遺跡VI - 豊郷条里遺跡沼尾Ⅱ地区 - 」『鹿島町の文化財』 第47集 茨城県鹿島町教育委員会 1985年3月
- 田口崇 「鹿島湖岸北部条里遺跡VI - 豊郷条里遺跡沼尾Ⅰ地区 - 」『鹿島町の文化財』 第48集 茨城県鹿島町教育委員会 1985年3月
- 12) 石井毅他 「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書3 - 大塚新地遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』第II集 1981年3月
- 13) 本田勉 「鹿島湖岸北部条里遺跡III - 豊郷条里遺跡須賀Ⅱ地区 - 」『鹿島町の文化財』 第32集 茨城県鹿島町教育委員会 1983年3月
- 14) 鈴鹿八重子他 「御山千軒遺跡 - 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告V」『福島県文化財調査報告書』 第109集 1983年3月
- 15) 飯塚武司 「関東・甲信の木製容器の推移と生産」 第39回埋蔵文化財研究集会 『古代の木製食器』 1996年3月
- 16) 豊崎卓 『東洋史上から見た常陸国府・郡家の研究』 1970年3月

付 章 北田遺跡の古環境について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北田遺跡は、櫻文時代中期、古墳時代、奈良・平安時代各期の堅穴住居跡をはじめ、古代の河川跡（流路跡）が検出されている。古代の河川跡からは、9世紀の土師器・須恵器などの遺物が多量に出土している。河川跡は、東西方向に伸び、古墳時代の住居跡群を一部削り込んでいる。

桜川流域で行われた古環境復元に関する調査状況をみると、上高津貝塚など霞ヶ浦沿岸地域では行われているが（土浦市教育委員会、1996など）、上流域に関する成果は少ない。このことから、河道内の覆土を対象に自然科学分析調査を行うことで、古代の自然環境に関する情報が得られるものと期待された。そこで今回は、河道埋積物について花粉分析と珪藻分析を行い、当時の古植生や河道内水域の様子など古環境に関する情報を得ることを目的とした。

1 試料

試料は、河道を横断する方向に3地点（A～C地点）で採取された。A～Cの順で河道の中心部に向かい、概して堆積物も粗粒になっている。今回は目的や層相などを考慮に入れ、珪藻分析、花粉分析とともに7点を選択した。試料の詳細は表1に示す。

2 分析方法

(1) 硅藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレラートを作製する。検鏡は、光学顯微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判

表1 分析試料一覧

地点	深度(cm)	層名	層相	分析項目	
				珪藻	花粉
A地点	0 ~ 5	1	黒色土（植物遺体多量）		
	5 ~ 10			○	○
	10 ~ 15				
	15 ~ 20				
	20 ~ 25				
	25 ~ 30				
	30 ~ 35				
B地点	35 ~ 40	3	黒褐色土（植物遺体多量 ロームブロック少量）		
	40 ~ 45			○	○
	45 ~ 50				
	50 ~ 55				
	0 ~ 5	4	黒褐色土（植物遺体多量）		
	5 ~ 10			○	○
	10 ~ 15				
	15 ~ 20			○	○
	20 ~ 25				
C地点	25 ~ 30	5	灰褐色砂質シルト層 (砂質・植物遺体混じる)		
	30 ~ 35			○	○
	0 ~ 10				
	10 ~ 20			○	○
	20 ~ 30	6	灰褐色砂質シルト層 (砂疊混じる)		
	30 ~ 40			○	○
	4		黒褐色土（植物遺体多量）	○	○

断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析を行うにあたり、海水～汽水生種は小杉（1988）、淡水生種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3 結果

（1）珪藻分析

結果を表2、図1に示す。A地点の40-45cm、B地点の5-10cm、25-30cmは、珪藻化石が少なかったが、その他の試料からは珪藻化石が豊富に産出する。また、完形殻の出現率は、C地点の0-10cmが約30%と低かったが、それ以外は70%前後である。産出分類群数は、合計で28属146種類である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・A 地点

10-15cmでは、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻）と陸生珪藻（陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある珪藻）が混在することを特徴とするが、水生珪藻の方が幾分多い。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）とpH不定性種（pH7.0付近の中性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が多産する。水生珪藻には特に多産するものではなく、淡水～汽水生の*Rhopalodia gibberula*、好流水性で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、*Fragilaria vaucheriae*、流水不定性の*Cymbella silesiaca*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia microstauron*が産出する。このうち、*Eunotia pectinalis* var. *minor*は、水深が1m以下で一面に水生植物が繁茂している沼沢や湿地で多く見られる沼澤湿地付着生種群（安藤、1990）もある。なお、中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群のことである（安藤、1990）。陸生珪藻は、耐乾性の高いA群（伊藤・堀内、1991）の*Navicula mutica*が約20%と多産し、同じくA群の*Hantzschia amphioxys*、*Orthoseira roeseana*、未区分陸生珪藻（伊藤・堀内、1991）の*Pinnularia schoenfelderi*、木城にも陸域にも生育する陸生珪藻B群（伊藤・堀内、1991）の*Pinnularia subcapitata*を伴う。また、40-45cmは、上記と同様水生珪藻と陸生珪藻とが混在する群集を示すが、珪藻化石の検出が少ない。

・B 地点

5-10cm、25-30cmともに水生珪藻と陸生珪藻とが混在するが、珪藻化石の産出が少ない。

・C 地点

0-10cm、20-30cm、30-40cmとも水生珪藻が優占し、淡水生種の生態性や産出種の特徴も近似している。

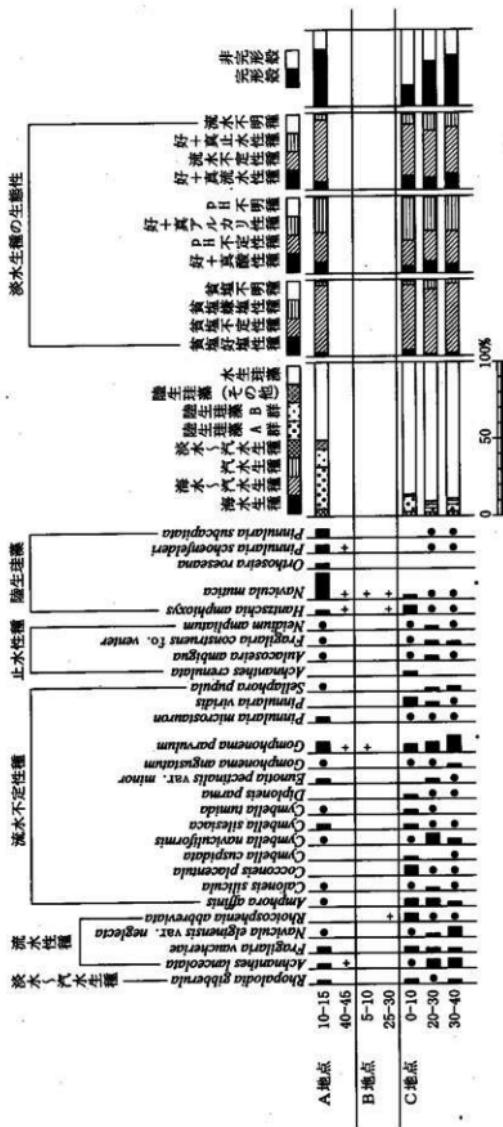


図1 主要珪藻類の層位分布
△水-淡水・海水層底より採取された試料について示す。△は、●は2%未満、▲は100個体未満の試料について示した範囲を示す。

表2 珊藻分析結果(1)

種類	生態性			環境 指標	A地點			B地點			C地點		
	塙分	pH	沈水		10~15	40~45	5~10	25~30	0~10	20~30	30~40		
Bacillaria paradoxa Grunow	Ogh-Meh	ak-bi	I-ph	U	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	ak-bi	I-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema pseudoung Lange-Bertalot	Ogh-Meh	ak-l	S	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia levidensis var. victorise Grunow	Ogh-Meh	ak-l	ind	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Nitzschia palis (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ak-l	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O'Muller	Ogh-Meh	ak-l	ind	5	-	-	-	6	4	5	-	-	-
Achnanthes clevei Grunow	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	T	-	-	-	-	2	1	-	-	-
Achnanthes cretacea Grunow	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	T	-	-	-	-	6	-	-	-	-
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	ak-bi	S	-	-	-	-	1	1	-	2	-	-
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Achnanthes stellata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	r-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	r-ph	K.T.	6	1	-	2	12	12	-	-
Achnanthes strobliana Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	ind	T	-	-	-	-	1	1	2	-	-
Achnanthes minimastris Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	ind	U	1	-	-	-	-	-	1	-	-
Achnanthes montana Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	ind	ind	R.L.T.	-	-	-	-	-	-	1	-
Achnanthes subulifolia Hustede	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	T	1	-	-	-	3	2	2	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	ind	U	1	-	-	-	10	11	6	-	-
Amphora montana Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	ind	RA	1	-	-	-	-	-	3	-	-
Amphora pediculata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	T	-	-	-	-	1	1	1	-	-
Anomoecetes brachysira (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	Q.T.	-	1	-	-	2	7	4	-	-
Anomoecetes ambigua (Grun.) Simonson	Ogh-ind	ak-bi	N	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	RB	2	-	-	-	1	1	-	-	-
Cocconeis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ak-bi	ind	1	-	-	-	2	5	1	-	-	-
Cocconeis placenta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ak-bi	ind	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-
Cocconeis placentula var. engypti (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ak-bi	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ak-bi	r-ph	S	-	-	-	-	2	-	1	-	-
Criticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	1	-	-	-	1	-	-	2	-	-
Cymbella amphioxys (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	-	-	-	-	5	-	-	1	-	-
Cymbella cumplicata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
Cymbella gracilis (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	T	-	-	-	-	-	-	2	-	-
Cymbella gracilis (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	ind	O	1	-	-	-	3	16	8	-	-
Cymbella silesiana Bliesch	Ogh-ind	ak-bi	ind	T	8	-	-	-	7	3	4	-	-
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ak-bi	ind	r-ph	K.T.	2	-	-	2	-	3	-	-
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	Q.T.	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	ak-bi	ind	T	1	-	-	-	6	1	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diatomella balfouriana (W. Smith) Greill	Ogh-ind	ak-bi	ind	RA	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Diploneis ovalis (Hildebrand) Cleve	Ogh-ind	ak-bi	ind	-	-	-	-	-	5	1	1	-	-
Diploneis parvula Cleve	Ogh-ind	ak-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eudictyon arcus Ehrenberg	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Eudictyon bifurca (Ehr.) Mills	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eudictyon indica W. Smith ex Gregoire	Ogh-ind	ak-bi	ind	O	-	-	-	-	-	2	-	-	-
Eudictyon pectinata (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ak-bi	ind	O	-	-	-	-	1	-	1	-	-
Eudictyon pectinata var. emarginata (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ak-bi	ind	6	-	-	-	-	6	1	2	-	-
Eudictyon pectinata var. undulata (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-ind	ak-bi	ind	O	-	-	-	-	1	-	1	-	-
Eudictyon praeserrata (Bidle) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	R.B.O.	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria capucina De Noter	Ogh-ind	ak-bi	ind	T	1	-	-	-	1	-	-	-	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Kuetz.) Hustede	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria capucina var. simplicis (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria costatum (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	U	-	-	-	-	-	-	2	-	-
Fragilaria costatum in ventre (Ehr.) Hustede	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	S	1	-	-	-	1	6	5	-	-
Fragilaria parasitica (W. Smith) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Fragilaria plana Ehrenberg	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria ulna Lange-Bertalot	Ogh-ind	ak-bi	ind	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	ak-bi	r-ph	K.T.	8	-	-	-	8	7	6	-	-
Frostula vulgaris (Trevat.) De Toni	Ogh-ind	ak-bi	ind	U	1	-	-	-	1	-	1	-	-
Gomphonema angustum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ak-bi	ind	U	3	-	-	-	4	2	5	-	-
Gomphonema angustum var. linearis Hustede	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	unk	1	-	-	-	-	-	3	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	Q.U.	2	-	-	-	-	-	4	-	-
Gomphonema olivaceum var. minutissimum Hustede	Ogh-ind	ak-bi	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema pavlovianum var. lagenula (Kuetz.) Frenguelli	Ogh-ind	ak-bi	ind	U	15	4	1	-	11	15	-	-	-
Gomphonema pseudosphaerophorum H. Kobayasi	Ogh-ind	ak-bi	r-ph	S	-	1	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema punctatum (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema quadrupunctatum (Oestrup.) Wiktor	Ogh-ind	ak-bi	r-ph	K.T.	-	-	-	-	-	-	3	-	-
Gomphonema sarcophagum Gregory	Ogh-ind	ak-bi	ind	1	-	-	-	-	-	-	3	2	-
Gomphonema sphacelophorum Ehrenberg	Ogh-ind	ak-bi	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	ak-bi	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema sunstonei Priske	Ogh-ind	ak-bi	r-ph	J	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	R.A.U.	6	1	-	-	12	3	-	-	-
Meridion circula var. constrictum (Ralfs) V. Heurck	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	K.T.	2	-	-	-	2	1	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	ak-bi	ind	R.I.	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula eugena (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	Q.U.	2	-	-	-	1	-	2	-	-
Navicula eigenmanni (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	U	1	-	-	-	1	5	13	-	-
Navicula explanata Hustede	Ogh-ind	ak-bi	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula ignota var. paleacea (Hust.) Lund	Ogh-ind	ak-bi	ind	RB	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ak-bi	ind	R.A.S.	35	4	1	2	5	2	2	-	-
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	ak-bi	I-ph	R.I.	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Navicula pseudobilis Hustede	Ogh-ind	ak-bi	ind	ind	-	-	-	-	1	1	-	-	-

表2 珪藻分析結果(2)

種類	生態性		環境 面積	A地點			B地點			C地點		
	地分	pH	淡水	10~15	15~45	5~10	25~30	0~10	20~30	30~40		
<i>Navicula radiosa</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula tantula</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RLU	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula tokyensis</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	1-ph	RI	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula viridis</i> (Kutz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-l	r-ph	KU	-	-	-	-	-	3	1	-
<i>Navicula viridis</i> var. <i>rotundata</i> (Kutz.) Cleve	Ogh-ind	al-l	r-ph	KU	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nedium affine</i> var. <i>longiceps</i> (Greg.) Cleve	Ogh-hob	ac-l	bl	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nedium alpinum</i> Hustedt	Ogh-ind	unk	ind	RA	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nedium amplissum</i> (Bhr.) Kramer	Ogh-ind	ind	1-ph	2	-	-	-	-	2	5	1	-
<i>Nedium dubium</i> (Bhr.) Cleve	Ogh-ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nedium iride</i> (Bhr.) Cleve	Ogh-hob	ac-l	bl	O	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bl	ind	S	4	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia angustata</i> (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-l	bl	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia brevisima</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	ind	RB	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia hantzschii</i> Rabenhorst	Ogh-ind	al-bl	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RBS	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Orthosira rossiana</i> (Raha.) O'Meara	Ogh-ind	ind	RA	7	-	-	-	-	-	4	4	4
<i>Pinnularia acrospherica</i> W.Smith	Ogh-ind	al-l	1-ph	O	-	-	-	-	-	2	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevirostris</i> (Kutz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	3	-	2
<i>Pinnularia brevirostrata</i> Cleve	Ogh-ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-ind	al-l	1-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia divergiformis</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-l	ind	-	-	-	-	-	-	2	3	2
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-l	ind	O	1	1	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>angustata</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>leptostoma</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia intermedia</i> (Mitt.)	Ogh-hob	ac-l	1-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia intermedia</i> (Larsen) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia menegazzii</i> (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	1	-	2
<i>Pinnularia microstoma</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-l	ind	S	3	-	-	-	-	3	4	-
<i>Pinnularia neomarginata</i> Kramer	Ogh-ind	ac-l	ind	S	7	-	-	-	-	2	1	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-l	bl	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-hob	ac-l	1-ph	O	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia rugosissima</i> Bartsch	Ogh-hob	ac-l	ind	RA	1	-	-	-	-	3	2	1
<i>Pinnularia schoenfeldii</i> Kramer	Ogh-hob	ac-l	ind	-	1	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia strobophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	11	1	-	-	-	3	3	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-l	1-ph	RBS	11	-	-	-	-	3	4	-
<i>Pinnularia subdeusta</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-l	1-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia subrepanda</i> Kramer	Ogh-hob	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia uva</i> Skvortzov	Ogh-hob	ac-l	1-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia viridiformis</i> Kramer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	12	6	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	ind	1	-	-	-	-	4	3	-	-
<i>Khochlophora abbreviata</i> (Ag.) Lange-B.	Ogh-hob	al-l	r-ph	KT	-	-	-	-	-	11	1	3
<i>Rhopodium gibba</i> (Ehr.) Müller	Ogh-ind	al-l	1-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Selaphia americana</i> (Bhr.) Mann	Ogh-ind	al-l	1-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Selaphia baculum</i> (Bhr.) Mann	Ogh-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Selaphia lesviosima</i> (Kutz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind	-	2	-	-	-	-	4	1	-
<i>Selaphia pupula</i> (Kutz.) Merezhkovsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-	-	-	5	7	-
<i>Selaphia pupula</i> sp. cf. <i>Skvortzow & Mayer</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	3	-	-
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-l	1-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis acutipennis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-	1	-	1
<i>Stauroneis kriegeri</i> Patrick	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Stauroneis legumen</i> (Bhr.) Kuetzing	Ogh-hob	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis nodosa</i> Schumann	Ogh-hob	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis phoenicoceras</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	I-ph	1	-	-	-	-	3	1	2
<i>Stauroneis phoenicoceras</i> var. <i>batterii</i> Tzunora	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis phoenicoceras</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis smilchi</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Spirula testacea</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	3	-	-	-	-	-	-	1
<i>Spirula angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	bl	U	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Spirula evoluta</i> var. <i>pinifera</i> (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-l	r-ph	U	1	-	-	-	-	3	-	2
<i>Spirula tenera</i> Gregory	Ogh-hob	ind	bl	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thetellaria focicella</i> (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	al-l	bl	T	-	1	1	1	-	3	4	-
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0
海水-汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0
淡水-汽水生種合計					10	1	0	0	0	6	5	6
淡水生種合計					193	17	5	6	198	211	198	
陸藻石莼類數					203	18	5	6	204	216	204	

凡例

- R.H.: 濃度に対する適応性
 pH: 水素イオン濃度に対する適応性
 C.R.: 淡水に対する適応性
 Ogh-Meh: 淡水-汽水生種
 Ogh-hil: 貧营养好適性種
 Ogh-ind: 貧营养不適性種
 Ogh-hob: 貧营养耐性種
 Ogh-unk: 貧营养不明確
 si-bl: 真アルカリ性種
 si-s: 好アルカリ性種
 i-bl: 好不適性種
 ind: 淡水不適性種
 r-ph: 不好酸性種
 r-bl: 好酸性種
 unk: 淡水不明確

環境指標種群
 J: 上流水域河川指標種, N: 湖沼汎用地帯指標種, O: 不育地帯湿地指標種 (以上は安藤, 1990)
 S: 好酸性種
 U: 基礎底泥性種, T: 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986)
 R: 腐葉指標 (RA: A等, RB: B等, RI: 褐, 伊藤・嶋田, 1991)

貧塩不定性種、真+好アルカリ性種とpH不定性種、流水不定性種と真+好流水性種（流水域に最も良く生育する種）が多産する。主な產出種は、中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*, *Fragilaria vaucheriae*, *Rhoicosphenia abbreviata*、好流水性の*Navicula elginensis var. neglecta*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Cymbella naviculiformis*, *Pinnularia viridis*、流水不定性の*Amphora affinis*, *Gomphonema parvulum*等である。

（2）花粉分析

結果を表2・図2に示す。A地点とB地点より採取された試料からは、花粉化石・シダ類胞子はほとんど検出されず、わずかにモミ属・マツ属・スギ属・エノキ属-ムクノキ属などが検出された。一報C地点より採取された試料からは、花粉化石・シダ類胞子が豊富に産出する。検出される花粉化石群集は、いずれも類似する。木本花粉ではモミ属が最も多く産出し、ツガ属・マツ属・ブナ属・コナラ属アカガシ亜属・ニレ属-ケヤキ属などが検出される。草本花粉ではイネ科が多く、カヤツリグサ科・サンエタデ節-ウナギツカミ節などが産出する。その他に、ガマ属・オモダカ属・イボクサ属・ミズアオイ属などの水生植物も検出される。

4 考察

A地点では、1層から珪藻化石が産出した。その群集組成の特徴は、生育環境を異にする水生珪藻と陸生珪藻とが混在する。A地点は河道の端に位置し、腐植が多く細粒（シルト）である。水生珪藻は、河川の影響を受けている時期の堆積環境を反映していると考えられる。中～下流性河川指標種群を含む流水性種、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種などを含むことから、堆積時には流水の影響を受ける沼沢地的な水域環境であったと考えられる。一方で乾いた環境に生育する陸生珪藻A群が多産するが、これは河川の影響を受けなくなったあの堆積環境を反映しているとみられる。おそらく、氾濫堆積物を母材として土壌化が進み、この時地表面に陸生珪藻が生育したものと考えられる。現在の洪水堆積物の研究によれば、小規模な氾濫の場合、河道の中心に近い場所ではトラフ型の斜交葉理を示すが、その外側には植物片などの浮遊物が集積し、さらに外側では植生は破壊されず薄い泥が堆積する（鈴木、1994）。A地点やB地点でみられる黒色土は、氾濫によってもたらされた植物片が河道の縁に集積したものや土壌化が進む際に地上面を覆っていた植物に由来すると考えられる。なお、黒色土の発達するA地点とB地点では、花粉化石、珪藻化石とともに保存状態が悪い。花粉化石は好気的環境下における風化に弱く（中村、1967）、A地点のように地表面が安定し乾燥した状況下では大部分が分解された可能性がある。一方珪藻化石は珪酸質からなるが、類似した化学組成をもつ植物珪酸体は、植物に再び吸収されたり粘土の形成に関与したりして、土壤中では比較的早い段階で消失する可能性が指摘されている（近藤、1988）。珪藻化石の風化のメカニズムは、まだ不明な点が多い。ただし、検出された珪藻化石に風化の痕跡が認められていること、珪藻の骨格を作るシリカは風化を受けて溶脱し、他の鉱物に変化すること（千木良、1995）などを考慮すれば、珪藻化石も風化により消失した可能性がある。これらのことから、黒色土の発達するA地点やB地点は冠水している期間が短かったといえそうである。

C地点は、灰色の砂質な堆積物を中心としており、河川の中心に近いと考えられる。珪藻化石群集をみると、中～下流性河川指標種群を含む流水性種や沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が混在することから、流水下で堆積した堆積物と推測される。このような群集は、堆積物の層相や微地形からみても調和的である。

木本花粉の組成をみると、マツ属、モミ属、ツガ属、トウヒ属など針葉樹の産出が特徴的である。これらの針葉樹は、加波山などの後背山地を中心に分布していたと考えられ、温帯針葉樹林を形成していたものとみられる。また、ブナ属やアカガシ亜属も山地に安定した森林を作る種類であることから、山地を中心に分布していたと考えられる。関東地方の潜在自然植生図（宮脇、1986）によれば、加波山の潜在自然植生は、山頂部は

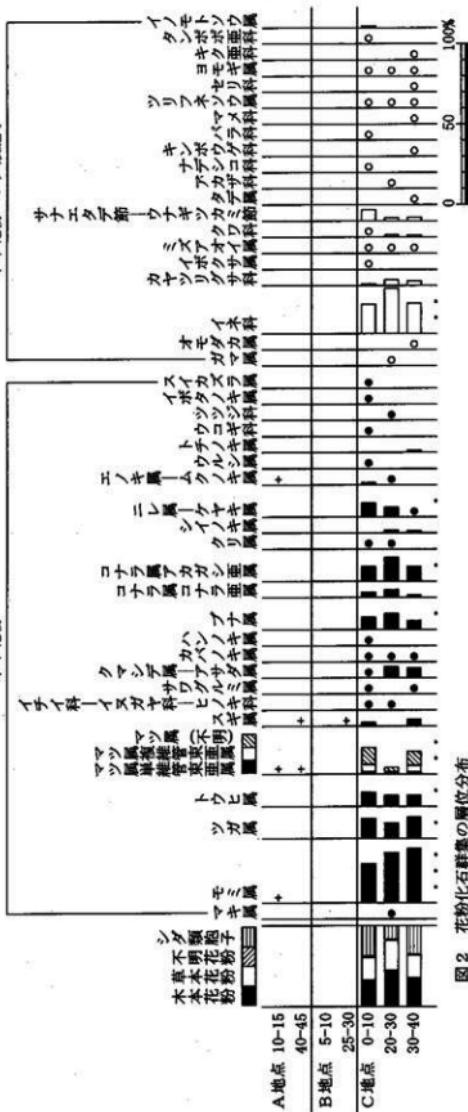


図2 花粉化石群集の層位分布
出率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く
数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉 100個体未満の試料
について検出した種類を示す。

表3 花粉分析結果

種類	試料番号	A 地点		B 地点		C 地点		
		10-15	40-45	5-10	25-30	0-10	20-30	30-40
木本花粉								
マキ属	-	-	-	-	-	1	-	-
モミ属	1	-	-	-	53	72	48	
ツガ属	-	-	-	-	27	22	19	
トウヒ属	-	-	-	-	19	16	10	
マツ属單被管束亞属	-	-	-	-	3	4	2	
マツ属復被管束亞属	2	-	-	-	10	-	6	
マツ属(不明)	-	1	-	-	23	6	12	
スギ属	-	1	-	1	5	-	6	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	1	1	-	
サワグルミ属	-	-	-	-	1	-	1	
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	-	2	16	9	
カバノキ属	-	-	-	-	1	2	1	
ハンノキ属	-	-	-	-	1	-	-	
ブナ属	-	-	-	-	17	23	8	
コナラ属コナラ属	-	-	-	-	7	11	2	
コナラ属カガシ属	-	-	-	-	20	34	13	
クリ属	-	-	-	-	1	1	-	
シノキ属	-	-	-	-	-	4	2	
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	19	14	1	
エノキ属ムクノキ属	2	-	-	-	3	2	-	
ウルシ属	-	-	-	-	1	-	-	
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	2	
ウコギ科	-	-	-	-	1	-	-	
ツツジ科	-	-	-	-	-	1	-	
イボタノキ属	-	-	-	-	1	-	-	
スイカズラ属	-	-	-	-	2	-	-	
草本花粉								
ガマ属	-	-	-	-	-	1	-	-
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	1	
イネ科	-	-	-	-	119	144	75	
カヤツリグサ科	-	-	-	-	8	18	11	
イボクサ属	-	-	-	-	1	-	-	
ミズアオイ属	-	-	-	-	1	2	1	
クワ科	-	-	-	-	2	7	5	
サニエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	45	9	9	
タデ属	-	-	-	-	-	-	1	
アカザ科	-	-	-	-	-	5	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	3	-	-	
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	2	
バラ科	-	-	-	-	1	-	-	
マメ科	-	-	-	-	-	-	2	
ツリフネソウ属	-	-	-	-	1	1	1	
セリ科	-	-	-	-	-	-	1	
ヨモギ属	-	-	-	-	3	4	1	
キク選科	-	-	-	-	-	-	2	
タンボが里科	-	-	-	-	1	-	-	
不明花粉	1	2	-	-	12	7	3	
シダ類胞子	-	-	-	-	7	-	-	
イノモトソウ属	-	-	-	-	-	-	-	
他のシダ類胞子	15	3	14	5	243	86	143	
合計								
木本花粉	5	2	0	1	218	230	142	
草本花粉	0	0	0	0	185	191	112	
不明花粉	1	2	0	0	12	7	3	
シダ類胞子	15	3	14	5	250	86	143	
総計(不明を除く)	20	5	14	6	653	507	397	

ブナを中心とする冷温帯広葉樹林、中腹がモミ属などの中間温帶林、低地に近いところはシイ・カシ類などの常緑広葉樹林になるとされており、花粉分析の結果と調和的である。なお、加波山の山麓には扇形の緩斜面が特徴的にみられ、土石流災害もしばしば起こっている（宮崎ほか、1996）。このように斜面地が不安定で土壤が流出しやすい場合には、カシ類よりも複地に強いモミが生育する場合が多い。本来遺跡が立地する標高では、シイ・カシ類からなる森林が存在すると思われるが、地形的要因によりモミなどの針葉樹林が本遺跡周辺まで分布を拡大していた可能性もある。花粉分析結果でモミ属が多いのは、このことを示唆するものとみられる。一方、ナラ類やカシ類、ニレ属-ケヤキ属、クマシデ属-アサダ属などの広葉樹は谷部や河道沿いやを中心生育していたと考えられる。先述した上高津貝塚や宇野沢はか（1988）などの成果をみると、ナラ類やカシ類、ニレ属-ケヤキ属、クマシデ属-アサダ属などが多く、今回の成果とは異なっている。この理由としては、これららの遺跡の花粉化石群集は、低地や山地縁辺部の植生を強く反映しているのに対し、本遺跡は山地に近いことから、山地の植生を強く反映しているためと思われる。

一方草本花粉をみると、イネ科を中心にサナエタデ属-ウナギツカミ節やカヤツリグサ科などが検出されており、これらは河道周辺に草地を作っていたものと思われる。また、イボクサ属やミズアオイ属など水生植物の花粉化石も検出されることから、これらは河道内に生育していたと思われる。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42, p.73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 千木良雅弘（1995）風化と崩壊. 204p., 近未来社.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘（1998）埼玉の藻類 硅藻類. 埼玉県植物誌. 埼玉県教育委員会, p.527-600.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p.23-45.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究, 27, p.1-20.
- 小杉正人（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析。日本ベントス研究会誌, 35/36, p.17-28.
- 近藤謙三（1988）植物珪藻体（Opal Phytolith）からみた土壤と年代。ペトロジスト, 32
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p. 1 - 353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2 / 1 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae. Band 2 / 2 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2 / 3 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achanthaceae, Kritsche Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2 / 4 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 宮崎一博・笠田政克・吉岡敏和（1996）5万分の1地図図幅 真壁地域の地質. 103p. 地質調査所
- 宮脇昭編（1986）日本植物誌 関東. 641p., 至文堂.

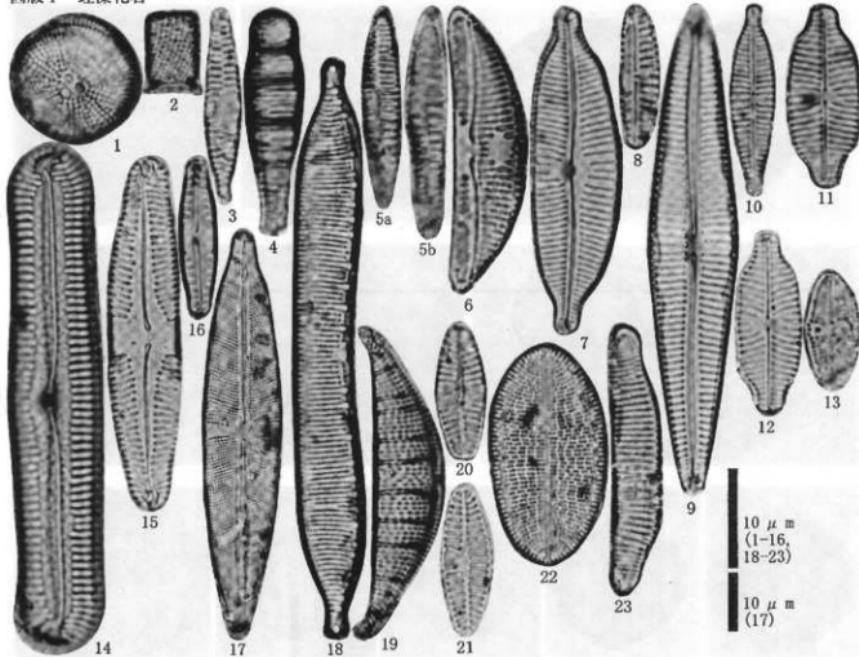
中村 純 (1967) 花粉分析.232p., 古今書院.

鈴木一久 (1994) 1993年9月9日野洲川洪水氾濫堆積物の3次元形態と堆積構造：1回の洪水氾濫で形成された複数の逆級化構造ユニット. 地質学雑誌, 100, p.867-875.

土浦市教育委員会 (1996) 国指定史跡上高津貝塚整備事業報告書.99p.土浦市教育委員会.

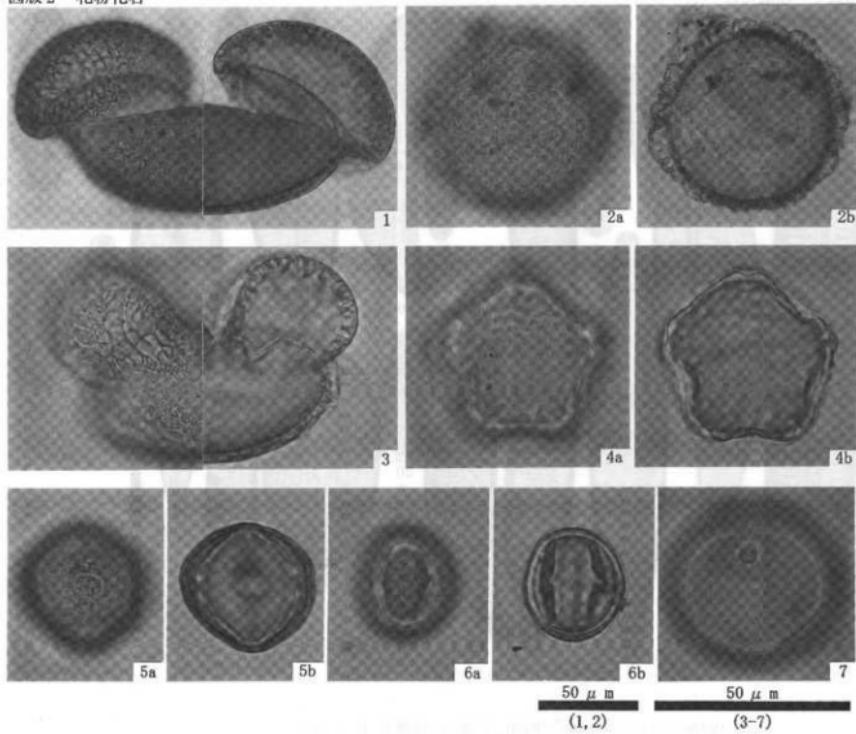
宇野沢 昭・磯部一洋・遠藤秀典・田口雄作・永井 茂・石井武政・相原輝雄・岡 重文 (1988) 特殊地質図 23-2 筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図.139p., 地質調査所.

图版1 硅藻化石



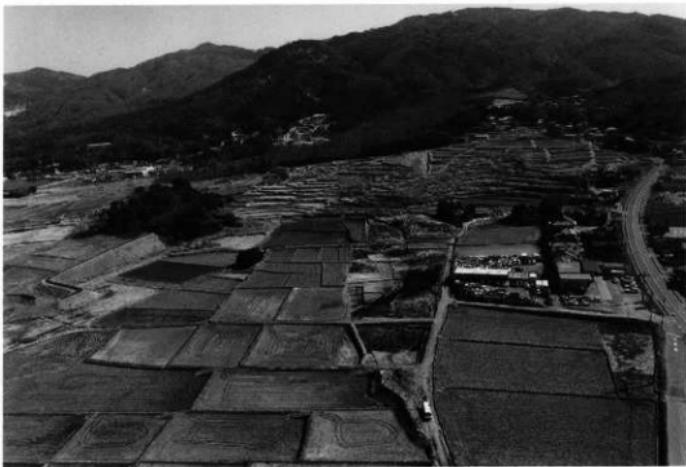
1. *Orthoseira roeseana* (Rabh.) O'Meara (A地点; 10-15cm)
2. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (C地点; 0-10cm)
3. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.) Petersen (C地点; 0-10cm)
4. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (C地点; 30-40cm)
5. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange-Bertalot (B地点; 25-30cm)
6. *Amphora affinis* Kuetzing (C地点; 0-10cm)
7. *Cymbella naviculiformis* Auerswald (C地点; 0-10cm)
8. *Cymbella sinuata* Gregory (A地点; 10-15cm)
9. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (C地点; 30-40cm)
10. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (A地点; 10-15cm)
11. *Navicula explanata* Hustedt (B地点; 25-30cm)
12. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (C地点; 30-40cm)
13. *Navicula mutica* Kuetzing (B地点; 25-30cm)
14. *Pinnularia acrosphaeria* W. Smith (C地点; 30-40cm)
15. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve (C地点; 30-40cm)
16. *Pinnularia subcapitata* Gregory (A地点; 10-15cm)
17. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (C地点; 0-10cm)
18. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (C地点; 0-10cm)
19. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Müller (C地点; 30-40cm)
20. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (C地点; 0-10cm)
21. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (C地点; 30-40cm)
22. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.) Cleve (C地点; 0-10cm)
23. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (C地点; 0-10cm)

図版2 花粉化石



1. モミ属(C地点;0-10cm) 2. ツガ属(C地点;0-10cm)
3. マツ属(C地点;0-10cm) 4. ニレ属-ケヤキ属(C地点;0-10cm)
5. ブナ属(C地点;0-10cm) 6. コナラ属アカガシ亜属(C地点;0-10cm)
7. イネ科(C地点;0-10cm)

写 真 図 版





上 遺跡遠景（北西から） 下 遺跡遠景（西から）



上 遺跡遠景（真壁城から） 下 調査A区全景



上 調査D・E区全景 下 調査D区東側完掘状況



上 調査E区完掘状況 下 第1号遺物包含層遺物出土状況



第1号住居跡
完掘状況



第1号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土狀況



第6号住居跡
遺物出土狀況



第8号住居跡炉
遺物出土狀況
(炉体土器)



第9・10・11号住居跡
完掘状況



第10号住居跡
遺物出土状況



第10・11号住居跡
遺物出土状況



第13号住居跡
完掘状況



第13号住居跡
遺物出土状況



第15号住居跡
遺物出土状況

第19号住居跡
遺物出土状況



第19号住居跡
窯遺物出土状況



第1号配石遺構
完掘状況





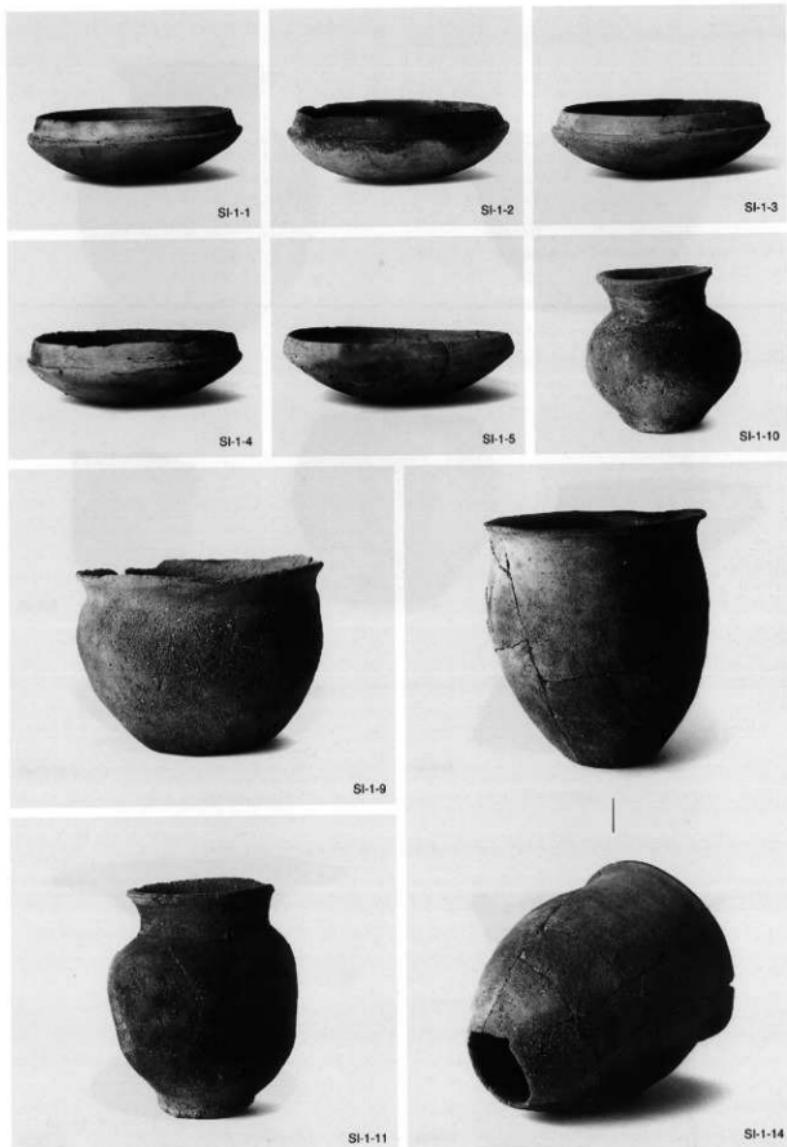
第3号流路跡
遺物（田舟）
出土状況（1）



第3号流路跡
遺物（挽物）
出土状況（2）



第3号流路跡
遺物出土状況（3）



第1号住居跡出土遺物



SI-1-13



SI-2-18



SI-2-16



SI-2-19



SI-6-41



SI-6-40



SI-10-48



SI-8-43

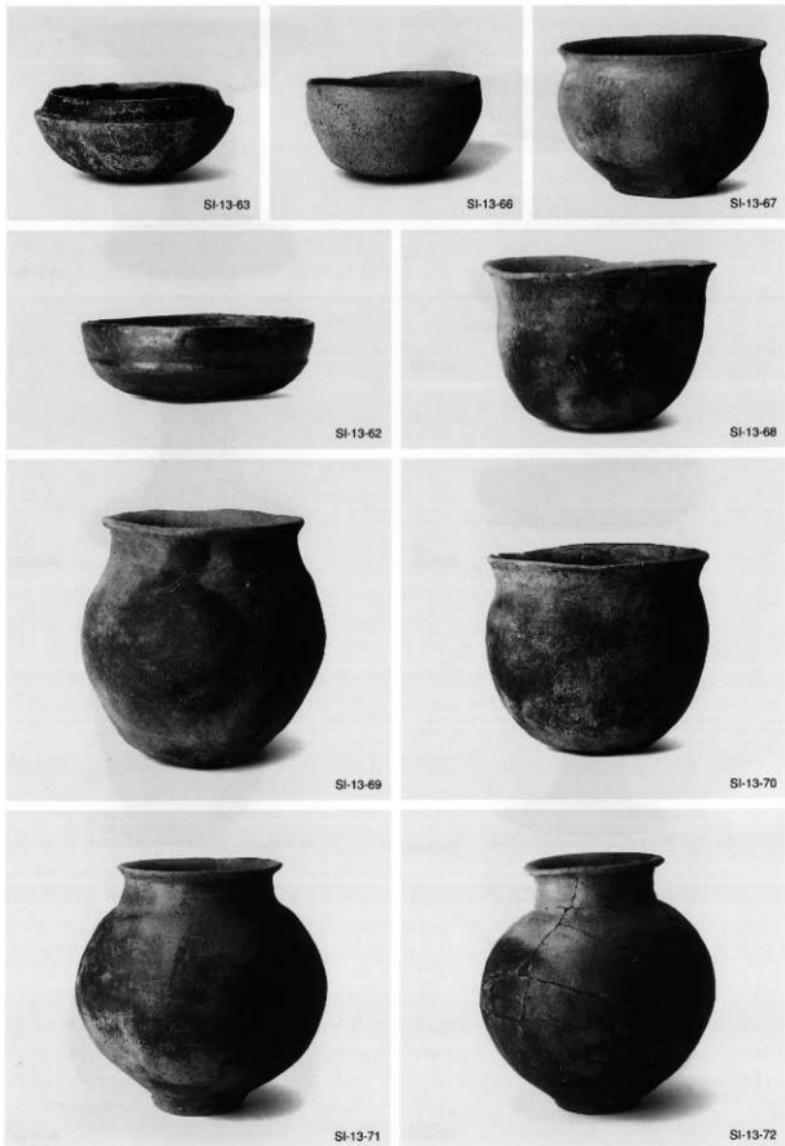


SI-10-54



第10·11号住居跡出土遺物

PL 14



第13号住居跡出土遺物



第13·14·16·19号住居跡出土遺物

PL 16



第19号住居跡、第19号土坑出土遺物



SI-19-104



SI-19-105



SI-20-106



SK-20-117



SI-23-111

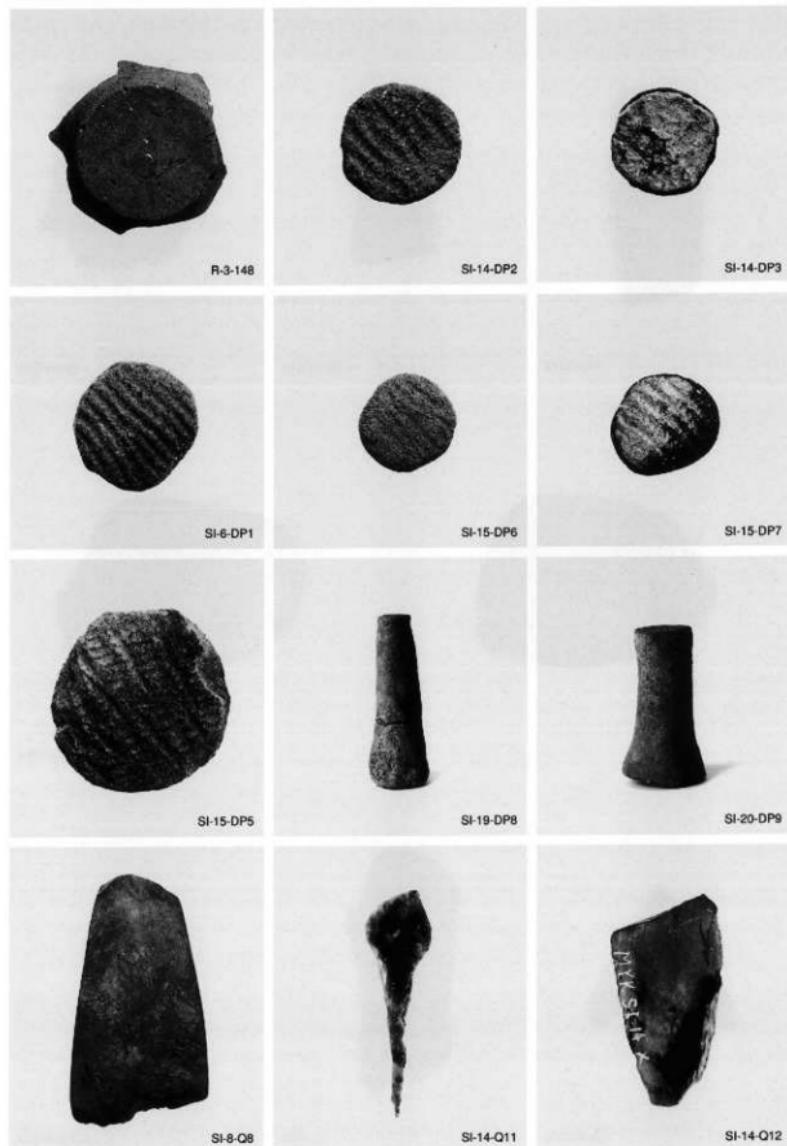


SK-7-114

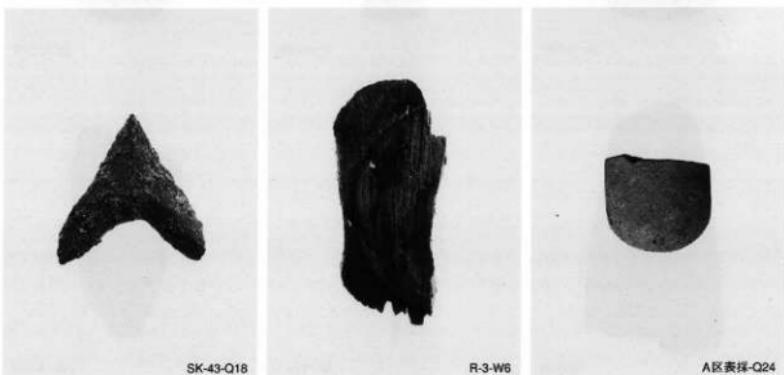
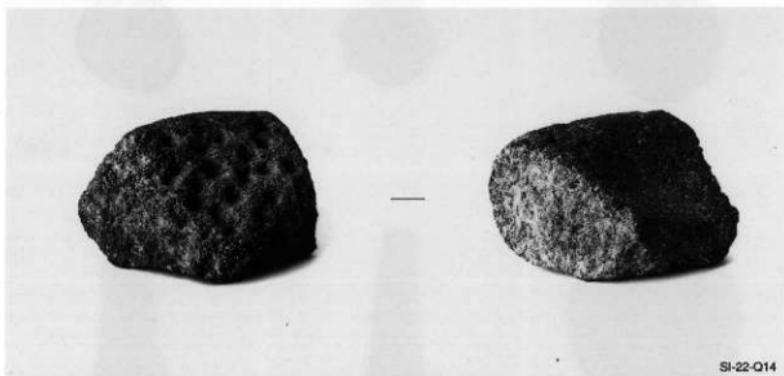
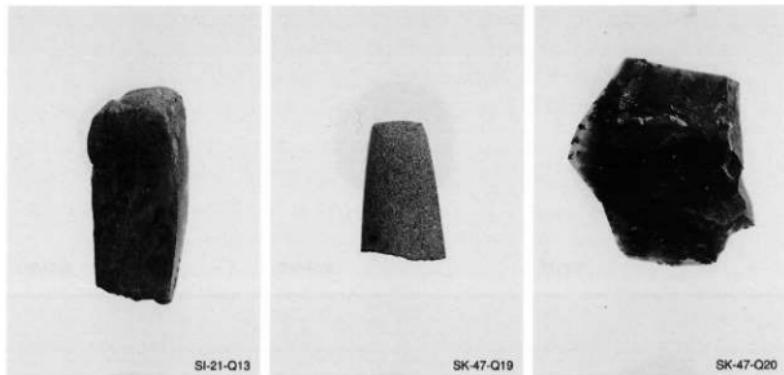
第19·20·23号住居跡、第7·20号土坑出土遺物



第32号土坑、第1·3号流路迹、第1号遗物包含层出土遗物



第 6 • 8 • 14 • 15 • 19 • 20 号住居跡、第 3 号流路跡出土遺物



第21·22号住居跡、第43·47号土坑、第3号流路跡、A区表探出土遺物

茨城県教育財團文化財調査報告第206集

北田遺跡

平成15(2003)年3月20日 印刷

平成15(2003)年3月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財團
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番2号
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 (株)平電子印刷所
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13
TEL 0246-23-9051